故實叢書 武家名目抄

職名部 巻五

192
55

武家名目抄五目次

第四十三冊職名部廿五

船奉行 四六五

船手 又稱[illegible]頭 又舟頭 四六七

船手同心 四六七

船[illegible] 四六九

船頭 四六九

檝取 四七一

水手 四七一

第四十四冊職名部廿六上

京都守護 又稱洛中守護京都警固 四七四

洛中警衛 四八四

第四十五冊職名部廿六中

六波羅探題 四八九

六波羅評定衆 四九六

六波羅引付頭 四九七

六波羅奉行人 四九八

六波羅問注所 四九八

六波羅問注所寄人 四九八

六波羅越訴奉行 五〇〇

六波羅侍所 五〇〇

六波羅検断 五〇〇

六波羅祗候人 五〇三

第四十六冊職名部廿六下

大內守護 五〇四

大內夜行番 五〇六

大番番頭 五〇七

大番 五〇七

篝屋守護人 五一六

在京人 又稱在京武士 五一八

第四十七冊職名部廿七上

九州探題 五二二

鎮西奉行 又稱鎮西守護 五二九

鎮西評定衆 五三一

鎮西引付衆 五三一

鎮西警固番 五三二

長門探題 又稱中國探題 五三四

長門國警固番 五三七

第四十八冊職名部廿七下

奥州總奉行 五三九
奥州探題 又稱奥州管領 五四〇
羽州探題 五四四
陸奥出羽管領 五四五
蝦夷管領 又稱蝦夷代官 五四七

第四十九冊職名部廿八

堺代官 又稱堺奉行堺政所堺檢斷 五四八
奈良代官 又稱奈良奉行奈良所司代 五五二
大津代官 五六〇
長崎代官 又稱長崎所司 五六一
佐渡代官 五六三

第五十冊職名部廿九上

總追捕使 五六五
守護 五六七
半國守護 又稱半守護 五七七

第五十一冊職名部廿九下

守護代 又稱守護代官 五八〇
小守護代 又稱又代又代官 五八五
守護使 五八七

武家名目抄第四十三冊

職名部廿五

塙檢校保己一編

○船奉行

吾妻鏡云文治元年三月廿一日甲辰廷尉爲レ攻二平氏一欲レ發二向壇浦一之處依レ有二延引一周防國在廳船所五郎正利依レ爲二當國舟船奉行一獻二數十艘一之間義經朝臣與二書於正利一可レ爲二鎌倉殿御家人一之由云々

平家物語云逆櫓條 判官船共の修理して兵粮米つみ物具入馬共立させ舟とう〱仕れとのたまへは水主梶取共これは順風にては候へとも普通には過て候沖はさそ吹て候らんと申けれは判官大に怒て沖に出浮たる舟の風こはけれはとてとゝまるへきか向風に渡らんといはゝこそ僻事ならめ順風なるか少し强けれはとて是程の御大事に船仕らしとはいかて申そ舟とう〱仕れ仕らすはきやつ原一々に射殺せ者共と宣へは水主梶取共爰にて射殺されんも同事風强くは沖にて馳死にも死ねや者共とて二百餘艘の中より只五艘出てそ走りける五艘の船と申は先判官の舟田代冠者の船後藤兵衛父子金子兄弟淀江内忠俊とて舟奉行の乘たる舟なりけり

安土日記云天正十年四月十七日濱松拂曉ニ被レ出サセ一今切ノ渡リ御座船飾御船之内ニテ一獻進上被レ申其外御伴衆船數餘多寄サセテ前後ニ船奉行付被レ置

紀州發向記云 其間中村孫平次仙石權兵衛尉九鬼右馬允爲二大將一小西石井梶原等船奉行越二由良門那知海一逆浪附レ天卒風捲レ砂凌二此大難一遂二寄熊野浦一

天正記云長曾我部秀長に關する條 大將秀長は淡路のふくらにおゐてなるとをわたらんとす(中略)日きりをさたむるあひた大船六百そう小船三百そうてんかより船ふきやうをさため浦浦のせん頭りきしやろかいかちをたてならへ諸勢一とにしほときを相はかりなるとを押出す

太閤記云うろ山條 彼城落去せは日本のよはみにこそあれたとひ半途にしてとかう成ぬ共いさ救ひみんとて急き船を用意せらる船奉行梶原に申付しかは頓てせんさくを遂せめては十艘計もかなと思ひ侍れ共やう〱五艘有其よしかくと申しかは其儀ならは人を撰みのせ候へと有しに庄林隼人佑其沙汰に及て二千餘人撰み出し汀に出沖をみれは番船數百艘蛛の子を散したる如くなり

又云（土佐國寄船條）元親舘に歸て此黑船の一艘分八段帆の小船いかほとに積大坂へ參るへきそ勘辨して先船を寄給ひ候へと（○按こゝの數句脫落せしと見ゆ）元親へ申けれは通辭又商人なとよひよせ穿鑿精しくせしかは百五十艘に積候はんと申けりさらは近き浦々明日より船を寄られ候へと長盛沙汰しけれは元親船奉行共に其旨申付土州の浦々を改七十艘よせぬ其外は廻船可ㇾ然候はんとて阿波讃岐其島々へ奉行をつかはしけれは八十餘艘來りぬ

土佐國高橋村民家所藏文書云入江修理殿よりかり舟の手廻舟の船頭池久助と云者其元へ舟道具不足の理のため一昨夕こし候きいまた此方不ㇾ戾ふしん千萬候品々不足分の舟道具の事舟御奉行衆可ㇾ被二相添一候久助申理候はゝ頓に此方へ戾來候へと浦戶なと相尋て可ㇾ申二達一候與津のものにて候可ㇾ成二其意一候將又市川惣左衛門乘候ふねもいまた不ㇾ廻候是又早々廻候へく候又申候あきへ被ㇾ申二遣一候てと池六なとへ可ㇾ申候かしく六月六日高久衛門八兵衛親忠

長曾我部家格云中五郡諸奉行一船幷船頭水主奉行小原次郎兵衛吉村九兵衛一船道具奉行池藤次郎濱田三郎右衛門一船作幷大鋸引奉行久宗任市原源太郎山本菊右衛門一同賄奉行葛岡七郎兵衛

又云諸奉行幷諸道口番事一御舟作奉行組田作之進市原隼人中間六右衛門一鍛冶奉行山崎與助一御船道具奉行毘沙門野村孫兵衛一御船板大鋸引奉行入受源三郎

見聞雜錄云花澤曲輪を能持堅め候伊丹津阿彌を被二召出一御褒美有二百人扶持被ㇾ下頭を生し候得とて伊丹大隅と御名を被ㇾ下駿河舟奉行に被ㇾ成（○按伊丹大隅を甲陽軍鑑には船大將とも海賊衆とも注し松平記には船手大將と記せり）

大友興廢記云（豫州表へ出陣條）宗麟公此節西園寺公廣を御退治なさるへきむね仰出さるゝ老中御尤なり根を斷て末を枯すの御分別とかんし奉る則佐伯紀伊介惟教鶴原掃部入道宗叱幷に船奉行深柄大藏若林越後入道道閑四人方へ面々に御書を以て仰付らる

又云（東福寺萬壽寺建立の條）義鎭公六人の老中より年貢運送の舟奉行を相添每年のほせらるゝ或年吉岡宗歡の侍佐藤八郎兵衛といふもの舟奉行として十六端のふねにてのほる云々

豐內事記云福島ト申ハ天滿ヨリ西也小倉作左衛門ト云新參ノ者ニ大野修理カ手勢ヲ指添又舟奉行丹後ト云者舟ヲ拵相共ニ川口ヲ支ヘタリ（○按丹後は明石氏なり松原自休手錄には船奉行とあり）

難波戰記云（大坂定持口條）道頓堀ノ末穢多村ニモ池堀廻シ塀ヲ塗リ楯ヲ作テ矢狹間コトニ矢鐵炮ヲ置舟奉行樋口淡路守雅兼中村木工右衛門尉一晟水手餘多差置テ西國ノ兵船ヲ防クヘシト下知ス

又云（堺放火條）大野道軒ニ軍士數千人差副テ堺ノ津ヘ遣ハサレケレハ道軒馳向テ彼地ニ火ヲ放チケリカヽル所ニ東國ノ舟奉行九鬼長門守守隆向井將監忠勝小濱民部少輔光隆同久太郎嘉隆等此事ヲ聞テ兵船ニ取乘テ堺ノ浦ヘ廻リ道軒カ後陣ヘ鐵砲ヲ打掛鯨波ヲ揚敵ヲ脅シケレハ道軒カ軍勢思寄サリケレハ堺ノ浦ヲ燒オホセスシテコソ逃タリケレ（○按駿府記に九鬼守隆向井忠勝を船大將と記し北條五代記にも亦小濱光隆を船大將と注せり）

山本豐久私記云家康公本多出雲守ニ伯樂淵ヲ窺ヒ見申樣ニト有云々蜂須賀阿波守內山田織部樋口內藏助森甚五兵衛同甚大夫是等ハ船ヲ預リタル者ナリ彼等モ是ヲ聞ト均ク船ヲ付テ共ニ伯樂淵ヘノリ入又池田宮內少輔內梶川次大夫ト云者是モ舟奉行也其刻ミ伯樂淵ヘ船ヲ著サセ走リ上テ然ヘキ者ト鎗ヲ合云々

按船奉行は船頭水主等を指揮して舟船の事を沙汰する長官なりこの職はもと世職にてさるへき津々浦々に居住せしものと見ゆ抑船奉行の名目源平鬪戰の始にみえたるのみにて中頃絕て聞ゆることなしさるは其職掌をのつから國々に絕しにはあらす將軍洋海を渡り遠征すへきこともなかりしかは此職を設けられさりしなるへし足利殿の頃はこれを海賊大將船大將なともよへりされは永祿天正の頃に至りては大かた舟奉行舟手衆なといへることなかりけれと常の辭には海賊衆とよへるかたも多くいてきにたり殊に東國にては海賊といふを通稱のことくおもひたりしとみえたりされと家の定めにて船奉行とのみ稱せしかたも有しなり猶次の條と船大將の條とを合せ見るへし（越前北庄分限役付に船奉行四人ありまたそれよりは品くたりて川船奉行三人ありこの川船奉行は大船のことにはあつからす川々往來の船のみを奉行するものなり）

○船手衆（又稱海賊衆又船方頭又船頭）

○船手同心

明德記云三年二月廿五日ノ曉干瀉ノ浦ヨリ取乘テ海上遙ニコキ出ス船ニ乘ケル人々ニハ山名修理大夫義理同中務少輔氏親同五郎時理草山駿河守高山上野介薬賀美濃守桑原彈正左衛門尉陰山治郎左衛門尉箕浦藏人大夫舍弟七郎兵衛尉入澤左京亮海賊梶原八郎左衛門召具シテ以上六十三人行末モ不ㇾ知漕ㇾ行心細サハ限無シ

永正十七年記云五月三日高國白川取ㇾ陣云々公方諸奉公衆二千餘勢州已下祗二候殿中一云々三好海賊篠原久米等公

方北等持寺邊居レ陣今日者先無二殊事一不レ能二合戰一云々

甲陽軍鑑云高坂彈正異見條 駿河の御留主武田上野殿田中に板垣殿ゑみつに舟手衆土屋備前向井間宮兄弟に小濱伊丹大隅

又云信玄代惣人數條 海賊衆間宮武兵衛船十艘間宮造酒丞船五艘小濱あたけ一艘小船十五艘向井伊兵衛船五艘伊丹大隅守船五艘岡部忠兵衛船十二艘同心五十騎

又云信玄家老軍法工夫條 駿河先方岡部忠兵衛海賊衆なり此人忠切人にて候故土屋備前守になされ右の金丸惣藏を土屋備前守養子にして同心被管をゆつり土屋惣藏と申云々

松平記云今川殿同朋伊丹權阿彌と申もの代々今川家ののなる上法師なれとも武邊よく心得甲州衆を切たて候故に此城落て後信玄かゝへ侍になし伊丹大隅と申舟手の大將仕候なり○按權阿彌を見聞雜錄には淮阿彌とせり

東亂記云三浦軍條 房州里見義弘兵船八十艘ニ取乘リ相州三浦へ押渡ル三浦ニ有合小田原衆海賊梶原備前守ヲ初トシテ富永三郎左衛門遠山丹波守ヲメキサケンテ切テ掛リ突合打落シ射立打立切合クル

甲陽軍鑑末書云天正八年三月末ニ勝頼公伊豆國表へ御働アリ四月北條家ヨリ梶原海賊ヲ出シ候所ニ武田方ヨリ小濱間宮駿河先方ノ海賊衆船ヲ出シ舟軍アリ勝頼公浮島カ原ニテ御見物云々

小田原衆所領役帳云愛洲兵部少輔八拾貫文三浦 佐原百卅二貫五百文御藏出 以上浦賀定海賊ニ付知行役御免但人數著到出錢ハ可レ隨二高辻一

又云二十三貫五百文三崎內 三崎十人衆新給被レ下海賊被二仰付一ニ付諸役御免

毛利家記云御小姓衆ニ半助ヲ呼候ヘト仰有テ被二召寄一御諚ニハ御船頭明石與次兵衛今朝御出船ノ時御船ヲハ四國ノ地ヘ乘可レ申ト云シ程ニ乘前近キカト尋ケレハ少シマハリニテハ御座候ト申云々○按與次兵衛後に丹後に改む松原自休手錄には船手奉行と注し豐內事記には船奉行と記せり本書及次なる太閤記の船頭はふなかしらと唱へしなるへし

太閤記云名古屋御留守在陣條 文祿元年七月廿二日名古屋を立出させ給ひ船頭明石與次兵衛を被二召出一被二仰付一候は今度御上洛ニ付夜於日二急思召間精を出し水手已下無二油斷一可レ申付一旨直に被二仰付一候也

松原自休手錄云福島堤小倉作左衛門加二修理手勢一船手奉行明石丹後傍レ船支二川口一云々

義殘後覺云野島來島喧嘩條 毛利家ノ船大將ニ野島來島栗屋トテ有ケルカ折節雨ノイタク降續キケレハツレヅレナルニ依テ野島ト來島ト碁ヲ圍ミケルニ栗屋ヲ初メトシテ兩島カ一族見物シタリケルニ來島カ與力碁ノ手ヲ助言シケレハ野島云樣ハ大事ノ所ヲ云給フ者哉碁ハ見落ヲ利トスル者ナルニト云ケレ共猶聞ス(中略)野島早速ニ引拔テ天頭ヲ丁ト切タリケリコハ如何ニト來島拔合セ遣マシト戰フ處ニ野島カ與力共居合セ切テカヽル來島カ與力同心立別レテ入亂レ前後亂ラニ切合程ニ須破事コソ出來レトテ東西ヒシメキケル

里見義䖏分限帳云高百石安田又助船方ノ頭高五拾石壹斗三升壹合佐野彌三郎船方小頭高五拾石向井甚之助船方預

按船手衆は前條にも述し如く船奉行の別稱なれと鎌倉殿の時にはこの名目聞えされは其頭はひとへに船奉行とのみ云しとみえたり足利殿の時となりては海賊大將ともよへりこれは戰國以來海濱諸國の大名諸家水戰に便なる者を扶持して兵船をあつけ敵國をおひやかし亂妨をなしゝよりの異名なり海東諸國記に應仁元年備後人吉安といふもの使を高麗につかはしゝ旨をのすその文に備後州海賊大將檝原左馬助源吉安とあり是によれはみつからも海賊と稱せしとみゆ檝原は梶原と同しこれ海賊大將の世家なり天文永祿の頃には國々家々の稱一樣ならす船手衆船奉行船手奉行船頭船方頭船大將海賊衆なとさまさまに唱へけれと其職掌は異なる事なかりしなりこの衆の品秩は物頭にあたりて與力同心なとをもつけられしなり世治りては與力同心はなく船頭水手はかりを指揮するかた多くなれりこれ水戰の用なき故なるへし尙別條を合せ考ふへし平家錄に細川家よりの船手の者頭平野治部左衛門組足輕に上簡を打せ是非乘入んといたしける云々とあり

○船上乘

安土日記云天正九年八月十三日因幡國鳥取表ニ至テ藝州ヨリ毛利吉河小早川爲二後卷一可二罷出一之風聞候(中略)今度毛利家爲二後卷一罷出ニ付テハ被レ成二信長御動座一東國西國之人數悉ヲ合被レ遂二御一戰一悉討果シ本朝無レ滯可レ被レ任二御心一之旨上意ニテ各其覺悟仕候然テ長岡惟任兩人ハ大船ニ兵粮ツマセ兵部大輔船ノ上乘松井甚助日向守船ノ上乘中村因幡國鳥取河之內江付置候也

按船上乘といふ職はいにしへ聞ゆることなしこは戰國の世打つゝき漸く接戰にも調練せしかはかゝる職掌をも設けられしにやこの職は水利に便なるものうけ給はれるなるへしさるは上乘といへる名は船奉行の外にはこの職をもて船中の上首とすれはなりもとより庶士たる輩の所職にして凡下のものゝうけ給はらぬことなり猶次の條をも合せ考ふへし

○船頭

平家物語云（金渡條）安元の頃ほひ鎮西より妙典といふ船頭をめしのほせ人を遥にのけて對面あり云々

梅松論云建武三年五月廿三日戌刻に雨ましりたる西風少し吹將軍御悦有て仰られけるは此風は天のあたふる物かはや纜をとくへしと有けれは或議に云海上の事其儀を得す異見を申かたし大船共の船頭を召れて御尋有へしと有に依て御座船串崎の船頭千葉大隅守か船をきはしの船頭大友少武長門周防の船の船頭拾四人御前に列して各申けるは云々

季瓊日錄云寛正三年十月三日 當院塔婆造營材木杣船頭於二山名兵部少輔一爲レ被二管一仍可レ勤之由可レ被二仰付一之事

山名殿木引人夫之事幷諸國海上河上諸關幷渡御過背事伺レ之

中國治亂記云天文廿年八月廿九日 義隆卿は岩永へ被レ退給旻ハ岡部右衛門大夫隆景カ領地ナリケレハ隆景御供シテ恩心寺ト申寺ニテ御湯ツケヲ進メ奉リサテ小荷駄ヲ岡部才覺シテ夜明方ニ千戸島へ落シ奉ル此處ニ後子壹岐ト申ス船頭アリ是ヲ賴ミ船ヲ才覺シテ皆ノリ玉フ

大内義隆記云二條殿若君ト御曹子ヲ先ニ立義隆モカチ地ニテ長州岩永ヘソ落玉フ（中略）セン崎ト云船津ヨリ小船ニ乘玉ヒ二三里ハカリ漕出ル御運ツキヌル故トカヤオキヨリ向フ北風ニウキタツ波モアラクシテ櫓カイモ更ニツカネハ船頭舟子アキレツヽ爲方ナクソ見エニケル

土佐國高橋村民家所藏文書云入江修理殿よりかり船の手廻船の船頭池久助ト云其元へ舟道具不足の理のため一昨夕こし候き早々不足分の舟道具の事舟御奉行衆可レ被二相添一候久助申理候は、頓に此方へ戻來候へと浦戸なと相尋て可二申達一候云々

長曾我部元親百ヶ條云他國へ上下共出入之事奉行人年老中判形無レ之は浦々山々一切不レ可レ通山々者其所庄屋浦浦は刀禰定置上者若緩申付猥出入候者卽時右之者可二成敗一無二證據一船乘せ候者其船頭迄も可レ行二罪科一事

太閤記云（朝鮮陣爲御用意大船被仰付條）船頭は見計ひ次第給米等相定可レ申事水主一人に扶持方二人此外妻子の扶持つかはし可レ申の事

續撰清正記云（釜山浦にて牛に乘條）釜山浦へ著船有とやかてとくねき海道へ出勢ありけるに日本よりの馬船いまた着岸いたさすして馬に乘さる侍共五十人餘有て跡舟を待へき歟又叙馬なりとも尋求て乘入へきかと評議せしむるの所に風波あしく候により五日も十日も船共湊を出す間布旨船頭共云傳るにより在々へ入て馬を取乘へきとすれとも敵ともか或は乘又は荷をもつけて退出したると見えて馬は一疋もなし歩にて供は成かたき者共か牛の有けるを奪ひ取て乘ける也

東遷基業云（安岐宮尾城攻條）今朝卯の下刻より豐後國姫島黒前にて軍始り申の刻にいたり同國佐賀の關の此方にて事終る其海上十里に及けり二艘の敵舟に二百人計乘たりしか水主十三人女八人生捕となり其餘の輩は悉く死を致せり（中略）其後生捕には衣類と料足をあたへ人をつけて薩摩へ歸されけり彼生捕の內に十二三の小さかしき童ありしを如水舟奉行松本吉右衛門に下知して中津に留め置れしか成長の後船頭となり上杉作左衛門と名付らる

又云（同條）義弘の家人等今は遁るゝ所なし敵船と相戰勝利あらすは內室に自害をすゝめ面々心よく討死せんと相談してはたく〱と船をかこひ蝸牛の紋付たる幕內によろひたる武者二三十人弓鐵砲一面にそなへ二艘の船左右に相別れて頻に鐵炮を打かくる（中略）敵船に近付時移る迄戰しか舟頭久田彌左衛門を始死傷するもの少からす

按船頭といへるは水手の長にしてよく水利を辨するもの、所職なり世職にて子孫に傳るもあり又水手の內よりさるへき者をえらひてなさるゝもあり水手は苗字をよはぬものなれと此職になさるれは苗字をゆるさるゝこと中頃より常のならひとなれり

○楫取

○水手

平家物語云（逆櫓條）判官船共の修理して兵粮米つみ物具入馬共立させ舟とう〱仕れとのたまへは水主梶取ともこれは順風にては候へとも普通には過て候沖はさそ吹て候らんと申けれは判官大に怒て沖に出浮たる舟の風こはけれはとてとゝまるへきか向風に渡らんといはゝこそ僻事ならめ順風なるかすこし強けれはとて是程の御大事に船仕らしとはいかて申そ舟とう〱仕れ仕らすは玄やつ原一一に射殺せ者共と宣へは云々

源平盛衰記云（義經解纜向西國條）元暦二年正月十七日夜ノ寅時ニ空カキ陰リ急雨シテ南ノ風ハ靜テ北風烈ク吹出タリ木ヲ折リ砂ヲ揚判官ハ風既ニ直レリ急キ船共出セトノ給フ水手挾杪等申シケルハ是程ノ大風ニハ爭カ出シ候ヘキ風スコシ弱リ候テコソト申ス判官大ニ嗔テ向タル風ニ出セト云ハハコソ僻事ナラメ加樣ノ順風ハ乞願フトコロナリトクトク此船共イタセ不レ出者ナラハ己等コソ朝敵ナレ射殺セ

截殺セト下知シケレハ伊勢三郎大ノ中指打食テ射殺サムト馳廻リケレハ水手挾杪共イカヽハセンコレホトノ風ニ船イタシタル事イマタナシ船ヲイタシヌル者ナラハ一定水ノ底ニ沈マムズ出サズハ矢ニ中テ死ナムズ死ニハイツレモ同事サラハ出シテ馳死ニセヨトテ寅卯ノ間ニ判官ノ船ヲ出ス

又云師盛亡條 備中守師盛ハ軍場ヲハ遁出テ小船ニ乗テ渚ヲ漕セテ助ケ船ニ移ラムトオハシケル程ニ武者一人高岸ニ立テ云ク是ハ薩摩守殿ノ御内ニ豐島九郎實治ト申ス者ニ侍リ助ケサセ給ヘヤト云テ招ケレハ只一人也ソレ乗セヨト給フ水手等御船狹ク小ク候イカヽト申シケレトモ只ヨセテ乗セヨト仰セラレケレハ漕寄タリ

東寺文書云明年三月頃可レ被レ征二伐異國一也梶取水手等鎭西若令二不足一者可レ省二宛山陰山陽南海道一之由被レ仰二太宰少貳經資一了仰二安藝國海邊知行之地頭御家人本所一圓地等一兼日催二儲梶取水手等一經資令二相觸一者守二彼配分之員數一早速可レ令レ送二遣博多一也者依レ仰執達如レ件建治元年十二月八日武田五郎次郎殿武藏守相模守在判

太平記云大舘左馬助討死條 敵ノ乗捨テ水主計殘レル船數多アリ是ニソ我物ヨト悦テ冑著ナカラ浪ノ上五町計ヲ游テアル船ニ岸破ト飛乗ル水手梶取驚テ是ハ抑何者ソト咎メケレハサナ云ソ是ハ宮方ノ落人篠塚ト云者ソ云々

豫章記云正平廿一年豐前今塔御陣ニテ一族中談合アリ阪國ノ方便ハ以レ船爲二肝要一也御所ヘ被二所望申一ケル上使大豆津底將監兩人葦屋船三艘水主十人下賜テ船ニ可レ乗人ヲ配當ス

越後軍記云長尾正景溺死條 謙信深智謀ヲ廻シ正景カ常ニ好ム處ヲ尋ネ問玉フニ正景ハ暑夏極熱ノ節船ヲ池水ニ泛テ納涼ノ興ヲ相催スコトヲ樂ムノ由傳聞テ竊ニ水練ニ達シタル水主ヲ召テ汝ハ予カ命ヲ背キ出タリト僞リテ急キ正景カ館ニ往我正景ヲ誅戮セント計ノ由ヲ告知ラスヘシ然時ハ返忠ノ者ナリト賞美シテ汝ヲ彼カ船頭ニ爲スヘシ其時船底ニ穴ヲ穿テ正景カ船遊セン時必池水ニ沈ムヘシト云附ラレケル船頭畏マツテ領掌シ急キ正景カ屋敷ニ往テ件ノ計コトヲ誠シヤカニ演テ辨舌ニマカセテ僞偶ケル

三好成立記云楮長治ハ土佐ニ居住セシ森志摩守ヲ賴玉フ志摩守定二相圖一助任ノ川ヘ迎船ヲ遣ケレ共彌生ノ雨ノ名殘ニ打霞ミ水主山ヲ見違佐古ノ山下ヘ乗入ヌ

太閤記云就九州御出勢御掟條 天正十五年三月廿日の朝なきいつに勝れ靜なりけれはさらは押わたらんとて嚴島さして漕出ぬ

水手楫取共欵乃の歌こと〳〵しくうたひ出帆はひわたりつゝ宮島に上りたまふ

又云就高麗陣掟條 肥前國名護屋は昔年松浦さよ姫か唐土船をしたひし湊なり此所を旅舘と被二相定一九州勢として搒侍りぬ總軍勢に扶持方馬の飼料其外水手楫取等に至るまて四十八萬人の兵粮無二懈怠一下行の事寔爾何も及ましきにやと思ひえられたり

長曾我部家格云船幷船頭水主奉行小原次郎兵衞吉村九兵衞

淸正記云肥後國天草志岐林專一揆條 伊知地文太夫といふものを大將として人數三千あま草郡のうち志岐といふ所へさしむかふ志岐の城主林專種々手段をめくらし文太夫をはしめ袋の浦といふ所にて一人ものこらす討取歸陣するものは船頭かこはかりなり

難波戰記云大坂定持口條 道頓堀ノ末穢多村ニモ池堀廻シ云々船奉行樋口淡路守雅兼中村木工右衞門一晟水手餘多差置テ西國ノ兵船ヲ防クヘシト下知ス

按檝取は船中にて檝取るわさをつかさとるものなり楫取又挾杪ともかけりかんとりといへるとなへはかちとりの轉語なり古く檝取浦とかきてかとりの浦とよめり水手は櫓棹をとり又船中の事は何事によらすとりあつかふものなり水手あるひは水主ともかけれと國史にはなへて水手に作れり是れをかこといへるは檝子の意なるへし扨水手といへは檝取をもこめておほよそにとなへしことくきこゆるかたもあれとかならす兩名の分ちはある事なり永承三年高野御參詣記に梶取四人水夫十人とあり本條の引書にもかこかんとりと記せる文あまた見ゆ又船子といふ稱あれとこれは檝取水手のたくひをよへるにて別にさる種族あるにあらす

武家名目抄第四十四册

塙檢校保己一編

職名部廿六上

○京都守護 又稱洛中守護、京都警固

帝王編年記云六波羅參議高能 一條二位能保卿長子母左馬頭義朝女壽永二年以後 掃部頭親能 文治二年以後同四年辭退 入道中納言能保 頼朝卿妹聟號二一條二位一文治四年以後 土肥次郎實平 文治五年以後 牧四郎國親 建久三年以後 三條左衛門尉有範 建久五年以後 掃部頭親能 建久七年還補 右衛門佐兼武藏守朝政 正治元年以後元久二年閏七月廿七日於二六角東洞院一被レ誅畢 里見判官代義直 建仁元年以後 駿河守季時 元久二年七月以後建保七年正月辭退 伊賀判官光季 建保七年二月十三日爲二六波羅一承久三年五月十五日以二官軍一被レ誅○按京都守護の歴名北條記にも見えて少しく違ひあり二書ともに疑はしきもの多く誤謬も亦少からす先高能を壽永二年より京都の警衛となれりとあるは殊更誤なり公卿補任によるに高能今茲纔に九歳何を以て其職に居る事を得へけんや思ふに其父能保は鎌倉殿の妹聟たるにより平家没落の後は京都の消息を關東に通し何くれと功勞ありしかは文治に至りて洛中の守護に定められ建久元年に鎌倉殿上洛あるに依て六波羅の新亭をいとなまれ下向せらるゝに及ひて高能を其留守に置れしなとやうの事を混雜して記せるなるへし次に親能文治二年より同四年まで在職し建久七年に還補せられしとあるも疑ふへし親能は文治三年大江廣元と共に上洛せしかと是は公家の殿閣修理の事を沙汰せしかと是は全く洛中守護の職たりしにはあらすされと元より鎌倉殿の家司たるか故に其間は能保と共に沙汰することも多かりしなりさてありしほとに能保薨せられしかは親能むれと洛中の事をうけ給はり沙汰して六波羅守衛のつかさとなれり建仁三年朝雅京都守護の長官となりて上洛せし後も共に政事を行なひしこと吾妻鏡にみえたるか如しされは本文に載る所かたへ誤あるをしるへし次に資平國親有範義直等の四人を以て能保親能朝雅なとゝ同しさまに列れしも又ひか事なりこの類は在京の間洛中警固の人數なとにて武役に從ひし輩にてありしなるへけれと決して能保親能朝雅なとのことく近畿の大小事をうけ給はれる人々にはあらさるなり次に朝雅正治元年に此職となれりとあるもたかへり朝雅は建仁三年十月上洛せしこと吾妻鏡に見ゆ思ふに正治元年とせしは其頃小山朝政か大番役にて在京せし時に城長茂と合戰せしことあれは混してあやまれるものなるへし其證は本書編年の所に平長茂亂二入京都守護人左衛門尉朝政宿所一云々とかけるを以て知へし朝雅初は朝政に作りて同名なるか故に此誤をいたせりとみゆ小山朝政は全く大番勤仕に上京せしなりこゝに京都守護人とかけるはまきらはし北條記には朝雅を元久元年の任職とすこれは建仁三年の明年なれはいたくとかむへきにあらす猶詳なるよしは卷尾の按に注せり

判官物語云かまくらには二位との川こえの太郎をめして九郎か院の御きしよくよきまゝに世をみたさむと内々たくみ候なる西國のさふらひとも思ひつかぬさきにこしこえにはせむかひ候へと仰けれはむすめにて候ものを判官殿のめしおかれて候間身にとりていたましく候たへ仰付られ候へと申すてゝそたゝれける又はたけ山をめして御へんむかはせ給ひ候へしさもあらはいつするか兩國を奉らんと仰られけれは畠山おほせけるはねんらいのちうと申御きやうたいの御中と申たとひ御うらみ候とも九國にてもまいらさせ給ひ候てけむさん候てしけたゝに給り候はんするいつするか兩國をけんしやうのひきて物にまいらせ給ひ京都の守護におきまゐらせ御うしろみにまもらせ給はんほとの御心やすき事は何事か候へきとはゝかる所なく申すてゝそたゝれける二位殿其後は仰出さるゝ事もなしこしこえには此事を聞給ひてやしんをさしはさまるむねすつうのきしやうもんをかきしんせられけれともなほ御しようゐんなかりけれはかさねて申しやうをそまいらせけるさてこそしはらくさしおかれけれははうくわむはみやこにのほり院内の御きしよくよくて京都のしゆごにはきけいに過たるものあらしといふ御き色なりければはむしあふきたてまつる云々

吾妻鏡云文治元年五月十一日癸巳依下被レ召二進前内府一之賞上武衛去月廿七日叙二從二位一給除書今日到著左典厩 能保 所レ被二執進一也近日可二參向一之由被二申送一十七日己亥左典厩 能保去七日出京 到著直被レ入二營中一十月十三日壬戌伊豫大夫判官義經潜參二仙洞一奏聞云義經退二平氏凶惡一令レ屬二世於靜謐一然而二品曾不レ存二其酬一剰可二誅滅一之由有二結搆之聞一爲レ遁二其難一已同二意行家一此上者可レ賜二頼朝追討官符一云々十八日丁卯義經言上事於二仙洞一有二議定一而當時義經外無二警衛之士一不レ蒙二勅許一者若及二濫行一之時仰二何者一可レ被二防禦一哉爲レ遁二今之難一先被二宣下一追被レ仰二子細於關東一歟之由治定仍被レ下二宣旨一廿二日辛未左馬頭 能保 家人等自二京都一馳參申云去十六日前備前守行家追二捕祗候人之家屋一搦二取下部等一結局行家移二住北小路東洞院御亭一云々十一月三日壬午前備前守行家伊豫守義經等赴二西海一十二月一日庚戌平氏一族相二漏誅戮配流二罪一之輩多以在二京都一云々早尋二取之一可レ召二預在京御家人一之由今日被レ仰二遣北條殿一 去月廿五日入洛 六日乙卯今度同二意行家義經一之侍臣幷北面輩事具達二關東一仍可レ被レ申二行罪科一之由註二交名於折紙一被レ遣二帥中納言一其上殊結搆衆六人可二申請一之旨被レ觸二仰北條殿一七日丙辰雜色濱四郎爲二御使一帶下院奏折紙狀幷被レ獻二右府一御書等上上洛左典厩下部黒法師丸爲二京都案内者一被レ相二副之一有二義經同心聞一之侍臣事被レ申二子細一此間事等京都巨細者大略以被レ示二合左典厩幷侍從公佐等一治定彼公佐朝臣者二品御外舅北條殿外孫也十七日丙寅北條殿任二關東仰一屋島前内府息童二人越前三位通盛卿息一人被レ捜二出之一梟首

平家物語云 判官都落文治元十一及六代條 同七日の夜に入て北條四郎時政六萬餘騎を相具して上洛す(中略)去程に北條四郎時政は鎌倉殿の御代官に都の守護して候はれけるか平家の子孫といはむ人男子においては一人にても尋ね出したらん輩には所望はこふに依へしと披露せられたりけれは京中の上下案内は知たり勸賞蒙ふらんとて尋求るこそうたてけれ

吾妻鏡云文治二年正月十日己丑攝津國貴志雜事所レ被レ加二御家人一也但止二關東番役等一可レ勤二左馬頭 能保 宿直一之

由被定二月一日己酉北條殿於六條河原刎群盜十八人首凡如此犯人者不可渡使廳直可處刎刑之由云云六日甲寅左典厩（能保）歸洛相伴室家姬君二人等二品被遣御馬十匹以下餞物典厩御在鎌倉者諸事被申合間雖爲至要當時於京都巨細無人媒介仍令急給又神佛事幷禁裏仙洞等事節會除目及豫州事可被觸申于議卿等事等注條々具示付給廿五日癸酉北條殿自去年在京執行武家事之間於事賢直貴賤之所美談也廿七日乙亥安達新三郎爲飛脚上洛北條殿早可被歸參之由被仰遣於關東事可有御談合事有數洛中守護者已可被仰左典厩之故也三月廿三日辛丑北條殿可歸關東之由奏聞訖仍洛中事可示付何人哉之由有勅問付帥中納言被奏御返事云々時政下向事自鎌倉殿度々被仰下候之際廿五日一定之由所令存候也云天王寺御幸云京中之守護可差留武士等候事左馬頭殿御在京候不可御不審候且此兩條可令申合給候歟以此旨可令申上給候時政恐惶謹言廿四日壬寅北條殿近日依可被歸參關東公家殊被惜思召之由帥中納言被傳勅旨是則亦公平忘私之故也且其身雖令下向差置穩便代官可令執沙汰地頭等雜事之旨度々發相具貢馬十匹法皇依可有御熊野詣也六月廿一日辛卯因幡前司廣元爲使節上洛閑院皇居可加修復之由被申之八月十二日庚辰右武衞（能保）消息到來當時京中强盜亂入所々尊卑爲之莫不消魂差勇士等殊可警衞給之由有天氣云々十九日丁亥洛中狼藉事連に被下院宣之間且尋問子細且爲相鎭之千葉介常胤下河邊庄司行平可上洛之旨被仰付訖今日被召御前承條々仰云々御消息云洛中群盜蜂起幷散在武士狼藉事度々被仰下候之趣殊驚歎思給候時政下向之時東國武士少々差置候訖其外も或爲兵粮米沙汰或爲大番勤仕武士等在京事多候歟彼輩不鎭狼藉還疲計略若如此事をもや企候覽人々難塞候然者偏可爲賴朝恥辱候當時親能廣元雖在京候元自非武器候只閑院殿修造事致沙汰候計也如此事全不可爲彼等不覺候歟仍常胤行平を差進候於東國有勢者候之相濕勇士候也自餘事は知候はす於武士等中狼藉は此兩人輙可相鎭候見器量計進候能々可被仰付候條々以別紙言上候且此趣可令洩披露給候賴朝恐々謹言進上帥中納言殿廿五日癸巳因幡前司廣元使者自京都參著去十五日於六條若宮始行放生會之處見物雜人中鬪亂出來有被疵之者等

被仰下之處固辭及再三但洛中警衞事者示付平六時定内々二品仰也云々五月十三日庚寅紀伊刑部丞爲賴爲飛脚自京都到著所持參院宣也以夜繼日可進之旨帥中納言被觸仰之由云々北條殿被歸關東之後洛中之狼藉不可勝計去月廿九日夜上下七ヶ所群盜亂入云々世上嗷々事定以令聞及給歟時政在京旁依穩便思食於他武士者縱雖召下於彼男者勤仕洛中守護可宜之由度々被仰遣之上直被仰含畢然而猶以下向之間如此事等出來歟義經行家等在洛中之由風聞或說叡山衆徒之中有同意之輩云々奉爲君無由事ノミ出來ハ旁驚思食者也者院宣如此仍執啓如件十五日壬辰北條殿雜色自京都參著典厩被申云可鎭世上嗷々之由去七日蒙院宣云々六月廿二日戊辰左馬頭飛脚自京都到來豫州隱居仁和寺石倉邊之由依有其告雖遣刑部丞朝景兵衞尉基淸以下勇士無其實云々三年正月十九日辛酉文治元年所被寄附于希義主墳墓之土佐國津崎在家等爲早々人致濫妨狼藉之間琳猷上人參訴右武衞（能保）仍可停止濫吹之由被加下知訖彼上人雖可參訴關東行程隔遼路之條武衞爲二品御耳目在京之間如此二月十六日戊子美濃權守親能爲上洛使節進云々九月十三日辛亥攝津國在廳以下幷御室御領問事被定其法今日爲北條殿奉可得其意之由所被仰遣三條左衞門尉之許也其狀云總諸國在廳庄園下司總押領使可爲御進退之由被下宣旨畢者縱領主雖爲權門於庄公下司等國在廳者一向可爲御進退候也速就在廳官人被召國中庄公下司押領使之注人可被充催内裏守護以下關東御役云々四年四月廿日丙戌親能飛脚自京都參著去十三日六條殿燒亡云々六月十七日辛巳常陸房昌明者近年自京都所參也元住延曆寺武勇得其名也就中誅前備前守行家以降人許之云々而强田邊有領所不慮得替之間企愁訴欲上洛便宜事可扶持之旨可給御書於在京御家人中之由望申仍昌明在京之間如旅粮所望事隨所望可給之旨被申右武衞（能保）其御書下賜昌明昌明潜披之乍瞑持參申云案此旨趣似恩如爵何非恥辱哉全非旅粮等望依訴申上洛之間只爲用意也有勇敢譽之由於被載之條者所仰也者于時御入興則令俊兼書改之給雖爲僧勇士也在京之程可被召具宿直之候右兵衞督殿云々八月十七日右兵衞督（能保）消息到來洛邊群盜蜂起事至疑貽分者相觸所々畢就中叡山飯室谷竹林房住侶來光房永

實同宿號千光房七郎僧招卒惡徒浪人等令夜討以下惡行之由風聞之間經奏聞畢仍仰法印圓良被召之處去四日召進彼僧之由所捧請文也云々十二月六日丁卯式部大夫親能飛脚自京都參著去月廿五日於東大寺郭內寺僧與武家使鬪亂相互傷死被疵者數十人也今日廿九日在京士卒欲令發向南都之處爲朝御大事可加禁制之旨被仰右武衛幷親能之間擊留之則應仰留武士發向畢之由所申上師殿也是依殺害高太入道事可尋沙汰之由二品下知給之間親能遣使者於南都欲尋之處不相待其成敗忽此狠藉出來云々卅日辛卯親能申送云六條殿造營之間所役屋々事致丁寧勤之由殊所蒙御感之仰也云々五年閏四月一日庚寅右武衛使者參著被申條々去月廿日大內修造事始也御管領八ヶ國可令充其役給歟雖爲官符未到以前先內々可觸申之由蒙院宣者四日癸巳被獻武衛御返事造內裏事早可致沙汰云々

又云建久元年十一月七日丁巳二品御入洛令著六波羅新御亭(故池大納言賴盛卿舊跡此間被建之)給下總守邦業前掃部頭親能因幡前司廣元宇都宮左衛門尉朝綱小山七郎朝光等豫候此所八日戊午左武衛(能保)參給御參內以下事御談合十二月十日庚寅六波羅御留守事今日被定之左武衛賢息(高能朝臣下野)可被坐彼御亭云々十四日甲午前右大將家令下向關東給二年正月十五日甲子被行政所吉書始(中略)京都守護左兵衛督(能保卿)鎭西奉行人內舍人藤原朝臣遠景四月五日壬午大理(能保卿)幷廣元朝臣等飛脚參著各被獻書狀去月比佐々木小太郎兵衛尉定重於近江國彼庄刄傷日吉社宮仕法師等仍山徒蜂起所司捧奏狀參洛可賜定重身上之由申之云云五月二日乙酉大夫尉廣元飛脚自京都參著大理被獻書狀去月廿六日山門衆徒爲訴申左衛門尉定綱參閑院皇居之間則有群議罪名可被處遠流云々十月十日乙酉成勝寺執行昌寛法橋爲使節上洛是法住寺殿修造之間差置前掃部頭親能大夫判官廣元昌寛去頃依召雖歸參爲終其功重以上洛十二月廿四日戊戌親能廣元等使者自京都參著去月七日法住寺殿有御移徙之儀每事無爲云々大理所被獻其記也五年五月十日庚午被進砂金百三十兩於京都且可傳獻由被仰遣一條中納言(能保卿)之許是東大寺大佛御光料之殘也閏八月十六日癸酉一條前黃門使者自京都參著去二日依病遂素懷之由申之十一月廿日丁未御堂供養間導師以下施物等自京都到著前掃部頭親能奉行所調進也

又云正治元年二月六日戊辰羽林殿下去月廿日轉左中將給同廿六日宣下云々續前征夷將軍源朝臣遺跡宜令彼家人郎從等如舊奉行諸國守護者四月十二日癸酉諸訴論事羽林直令決斷給之條可令停止之於向後大少事北條殿同四郎主幷兵庫頭廣元朝臣大夫屬入道善信掃部頭親能(在京)三浦介義澄八田右衛門尉知家和田左衛門尉義盛比企右衛門尉能員藤九郎入道蓮西足立左衛門尉遠元梶原平三景時民部大夫行政等加談合可令計成敗之旨被定之六月廿五日乙酉掃部頭親能依姬君御事自京都參著於洛中沙汰重事等綱頭之間于今遲參云々卅日庚寅姬君(三幡)遷化乳母夫掃部頭親能遂出家二年四月八日癸巳佐々木左衛門尉廣綱飛脚自京都參著申云去月廿九日於六條萬里小路若狹前司保季犯掃部入道郎等吉田右馬允親淸之妻親淸自六波羅歸之處有此事即取太刀斬伏之云々

又云建仁元年二月三日甲申掃部入道(親能)佐々木左衛門尉定綱小山左衛門尉朝政爲大番勤仕在京朝覲行幸仙洞(二條殿)安城四郎平長茂引率軍兵圍朝政三條東洞院宿廬朝政供奉行幸留守程也所殘留之郎從等禦戰之間長茂引退(中略)有淸水坂之由風聞之間朝政等雖馳向不知行方云々彼使者先到著大官令亭次參御所三年九月十七日壬午掃部頭入道寂忍註申云叡山堂衆與學生確執及合戰云々十月三日戊戌武藏守朝政爲京都警固上洛西國有所領之輩爲伴黨可令在京之旨被廻御書十九日甲寅佐々木左衛門尉定綱中條右衛門尉家長爲使節上洛是將軍御代始也京畿御家人等殊插忠貞不可存貳之由相觸之且可召進起請文之趣所被仰遣武藏守朝政幷掃部頭入道寂忍等之許也

尊卑分脈云源朝政左衛門佐京都守護公家近習一天無雙權勢頗公家武家天下政務有掌云々北條四郎時政爲聟時政妾兵木女房重賞寵賞無比類

吾妻鏡云元久元年三月九日壬申武藏守朝政飛脚到著申云去月雅樂助平維基子孫等赴伊賀國中宮長司度光子息等赴伊勢國各叛逆云々十日癸酉京都飛脚歸洛謀叛人事發向彼國可令糺彈之由被仰朝政廿二日乙酉鎭西乃貢事掃部頭入道寂忍可令勘定之由被仰遣廿九日壬辰伊賀伊勢兩國平民謀叛事頗非無御不審仍今日被遣晝夜雜色隨武藏守朝政下知可發向之旨重被仰京畿御家人之中四月廿一日甲寅武藏守朝政飛脚到著申云去月廿三日出京同廿七日入伊勢國自今月十日

至同十二日合戰彼黨遂以敗北云々二年閏七月十九日甲辰牧御方廻姧謀以朝政爲關東將軍可奉謀當將軍家之由有其聞廿五日庚戌東使今日入夜入洛郎相觸事由於在京健士廿六日辛亥右衞門權佐朝雅候仙洞未退出之間有圍碁會之處小舍人童走來招金吾告追討使事金吾更不慭動歸參本所令目算之後自關東被差上誅罸專使無據于遁逃早可給身暇之旨奏訖退出于六角東洞院宿廬之後軍兵數到雖相戰朝雅失度逃亡迺松坂邊金持六郎廣親佐々木三郎兵衞尉盛綱等追彼後之處山内持壽丸射留右金吾云々十月十日癸亥駿河前司季時爲京都守護上洛

又云承元元年六月廿四日丙戌就御室仰坊門亞相被執申高野山愁訴紀伊國土民猥耤事於御所有其沙汰和泉紀伊兩國守護者佐原十郎左衞門尉義連職也義連卒去之後未被補其替自今以後無指事外不可置守護人諸事可爲仙洞御計之由被定之仍義連代早可召上之由所被遣御書於掃部入道寂忍之許也七月廿三日壬辰掃部入道寂忍使者參著和泉紀伊兩國守護代事任御下知去九日可參上之旨相觸之云々九月廿四日丁酉掃部頭入道寂忍自京都參著具參近江國住人盤五家次是傔仗祐兼後胤也去建仁三年叡山堂衆令蜂起事起自家次之謀計彼時逃亡不知行方之處五日於白河邊生虜之十月廿九日辛未掃部入道歸洛二年閏四月廿六日乙未依西國守護沙汰事季時使者參著仍今日於御所被經其沙汰十二月十八日癸未正五位下行掃部頭藤原朝臣親能法師（法名寂忍）卒年六十六（于時在京）

大友系圖云親能正五位下齋院次官式部大夫掃部頭美濃權守法名寂忍母大外記中原廣季朝臣女也初爲外祖父廣季養子後復本姓藤原屬右大將家始爲武家勤軍事行政務補任六波羅等之重職承元二戊辰年十二月十八日逝去六十六歲親能男季時從五位下駿河守三河守號淵名補六波羅職

北條記云元久二年乙丑季時（駿河守親能一男自元久二年十月至建保（承久元）七年正月爲京都守護）

承久元年己卯光季（伊賀太郎判官伊賀守朝光子承久元年二月十三日爲六波羅警衞上洛同三年五月十五日以官軍被誅）

遂阿（武藏守民部少輔俗名親廣）

吾妻鏡云承久元年正月廿八日武藏守親廣左衞門大夫時廣前駿河守季時秋田城介景盛隱岐守行村大夫尉景廉以下不堪薨御（實朝）之哀傷遂出家也二月十四日伊賀太郎左衞門光季爲京都警固上洛廿九日武藏守親廣入道爲京都守護上洛三年二月廿六日辛巳町野民部大夫康俊爲使節上洛是去十日夜半七條院三條御所依放火燒失之由有其聞放火人等事可糺彈之由示遣親廣入道光季等許五月十九日壬寅大夫尉光季飛脚下著申云此間院申被召聚官軍仍前民部少輔親廣入道應勅喚光季申障之間有可蒙勅勘之形勢云々廿一日甲辰一條大夫賴氏自京都下著二品乍感悅尋京都形勢賴氏述委曲自去月洛中不靜十四日晩景召親廣入道十五日朝官軍競起同日大夫尉惟信山城守廣綱廷尉胤義高重等奉勅定引率官軍襲光季高辻京極家合戰光季幷息男壽王冠者光綱自害放火宿廬云々六月十四日丁卯相州於勢多橋與官兵遂戰及夜陰親廣秀康盛綱胤義乘軍陣歸洛宿于三條河原親廣者於關寺邊零落云々佐々木彌太郎判官高重以下被誅于此處云々

承久記云平九郎判官胤義ヲ被召テ親廣法師伊賀判官是等ヲハ可如何ト被仰ケレハ胤義申ケルハ親廣ハ被召ハ參候ハンス光季ハ權大夫ニ緣者ニテ候ヘハ被召共參リ候ハシ如何樣ニモ先兩人ヲメサレ候テ參リ候ハスハ其時コソ討手ヲモ被差遣候ヘト計ラヒ申セハ尤可然トテ少輔入道ノ許ヘ御使ヲ被遣郎五十騎計ノ勢ヲ相具シテ參ケル（中略）ヤカテ伊賀判官メセトテ被召タレハ畏テ承ハリヌ無左右可參候ヘトモ京中ニ何トヤランノノシル事ノ候光季ハ未不承候カタノ樣ニ候ヘトモ關東ノ御代官トシテカクテ候ニ如何ナル御事ニテ候共先承候ハントコソ存候ニ今始テ勅定ニアツカリ候ヘハ參ルマシキニテ候トソ申ケル押返シ別ノ儀ニ非ス直ニ可被仰下旨アリ急キ參レト被仰ケレハ子細ヲ承テ一方ヘモ罷伺ハン御所ヘハ無左右參リカタフ候ト申セハサテハ此事ハヤ知テケリ胤義カ申狀不違サラハウテトテ討手ヲ被向承久三年五月十四日ノ事也今日ハ日暮ヌトテ被留ヌ深行程ニ判官ノ郎從等一所ニヨリアフテ軍ノ僉議評定シケルカ申ケルハ御身ニ無誤シテ大勢ニ被取籠テ被討サセ給候ハンハ念ナキ事ニテ候ハスヤ夜ノ中ニ都ヲ出サセ給ヒテ美濃尾張迄ハ馳給ヒ候ハンスランサリトモ鎌倉ヘハ三四日ニハツカセ給フヘシ左候ハスハ北陸道ヘカヽラセ給テ鎌倉ヘツカセ給候カ是等ノ儀ヲ御計ヒ可有トソ申ケル判官其コソエアルマシキニテアレ鎌倉殿モ思召樣有テコソ都ノ守護ニモ差置セ給ツラメ一天ノ君日本一ノ御大事ヲ思召立セ給程ニテハアカラサマノ御計ヒニヤアルヘキ今ハ定テ道々モ關々モサヽヘテソアルランニ一マトモノカレヌモノ故ニカタキニ背ヲ見セタリナ

ント鎌倉へ聞エン事コソ口惜カルヘケレ能コソアレ一天ノ君ヲカタキニウケ進ラセテ我身ニアヤマリナクテ王城ニ尸ヲサラシ名ヲ萬代ノ雲ニ揚ン事願フ所ノ幸ナリ一引モ引マシキモノヲト云ヘハ其後郎從等次第々々ニ落行テ一人當千ノ輩廿七人ソ殘ケル(中略)判官ノ宿所ハ高辻子京極高辻子ヨリハ北京極ヨリハ西京極面ハ棟門平門ニテ大門也高辻子面ハ土門ニテ小門也

尊卑分脈云藤原光季使左衛門尉京都守護後鳥羽院承久御義兵之始依爲關東代官不應召仍遣軍被追伐畢

○按帝王編年記より是迄の數條は鎌倉殿の時承久已前の京都守護人なり

葉黃記云寶治元年七月三日甲寅祈雨孔雀經法今日滿五ヶ日有結願(中略)不慮鬪亂相模守重時朝臣下向關東當時無京都守護之棟梁歟七日戊午今日可有御幸之由日來有沙汰而關東兵亂以後重時朝臣令下向當時無洛中守護之棟梁

太田康有記云建治三年十二月十九日御寄合山內殿相太守城務康有被召御前奧州被申六波羅政務條々(中略)奧州上洛事爲京都守護被差上之由可申入西園寺殿也

○按已上二條も鎌倉殿の時なれと承久の後北條家六波羅に定まりし後の事なれは前數條とは事かはりたれと名目同しきをもてこゝにのす

園太暦云觀應元年十月十六日世上事猶有說歟不審之間以狀欲尋女房之處有勅書世上事定開及歟言語道斷事旁可被仰合令參仕哉且又可進大夫云々卽雖可馳參口息之間進大夫小時退出語曰九州蜂起直冬靡九州之勢大友少卿以下無不歸之隨而大友京都代官二人逐電之間爲征罸前大納言幷師直可發向於義詮者爲京都守護所進置也於當時御所可奉守護歟將又以逸士爲御所歟爲勅定可被仰下云々二年正月三日或曰桃井率和田勢入來坂本大嶽擧火云云四日今日自坂本軍兵已入洛之由風聞仍京都守護輩少々向河原云々及晚無其實之間面々引歸之由風聞八月二日今朝聞宰相中將明日可歸宅京都守護細川陸奧守顯氏可沙汰云々件顯氏者禪門專一之仁也之由日來有其聞今又屬相公彼是非言詞所及云々

又云文和元年十一月三日傳聞土岐刑部少輔賴泰上洛爲京都守護率多勢云々

太平記云薩埵山合戰條洛中ニ勢ヲ殘サヽランモ南方ノ敵ニ隙ヲ窺ハレツヘシトテ宰相中將義詮朝臣ヲハ都ノ守護ニソ被留ケル

○按以上三條は足利殿の時臨時に置れし京都守護にて人からの定もなく鎌倉殿の時の守護とはことなれとも同し名目によりて役にをさむ

按壽永元暦の際平家西海に漂ひし頃は武家いとまなかりけれは京都警衛の任をも定められす不虞の備なかりけれは公家に詮議ありしに依て鎌倉殿にも評定ありしかと吾妻鏡に元暦元年二月十八日武衛被遣御使於京都是洛陽警固以下事所被仰也とありこれ其證なりしはしは其人と定めさる程に平家滅ひて義經入洛したりけれはおのつから警衛の任にあたりて洛中は元より近畿までを守護せしに是も程なく京都を沒落せしかは鎌倉殿より北條時政を京都守護として京畿の成敗をつかさとらしめたり然るに藤原能保は鎌倉殿の妹聟として是より先京師に在なから禁內の消息洛邊の形勢を推察して密に鎌倉に通し其餘何事によらす京都の大小事を媒介せしかは鎌倉殿にも賴思はれしまゝ關東下向のをり全く京都守護の任に定られ程なく時政をは召下されぬ建久元年鎌倉殿六波羅亭をもて京畿の政所に定められしをり能保の男高能を六波羅の留守に置れ政事をは元の如く能保に委ねられしなり高能は建久九年に卒去せり其後は別に留守を置れさりけれはひとへに有司政務を沙汰する職となりて守護の任にあたれる人は其私亭に居りしなり但藤原親能は六波羅家にありし由吾妻鏡及同島津本に見えたれとこれは全く六波羅殿に居りしにはあらて其近きあたりに私亭ありしなるへしもと能保は縉紳の家に成長せし人なる故に武事には心もとなかりけるをもて時政下向の時代官として北條時定を殘し置武備をたすけられ其外にも佐々木大內の輩など京畿の警備をつとむるとにてはありしなり洛中警衛士のことは次の條に辨せりさて又藤原親能は文治中大江廣元と共に殿閣修造の奉行となりて上洛せしかもとより鎌倉の家令にて國政を奉る證なれは在洛の間はおのつから京都の成敗にもあつかりて能保のさしつきの如くなりしか能保逝去ありし後は親能ひとり政務を沙汰し六波羅の長官として西國の乃貢勘定の事をさへふさねたりもと刀筆の吏より起れる人なれはこれも武備には長せさる故にや佐々木の一門等むねと警衛の事を輔けたりしか親能年たくるに及ひていよ〳〵武事に不便なりけれはにや北條時政の聟平賀朝雅京都守護の長官として上洛しけるに此人は武事にもかしこくいきほひある人なりけれは文武ともにかね沙汰せしかは親能は其副職となりてひとへに尋常の政務をのみ奉行せり朝雅の兄惟義は佐々木の門族と同しく京都警衛の人數にありし人なれは其ゆかりもありことに北條氏の聟なれはこの職をうけ給はりしなるへし朝雅事ありて後親能の男季時守護を奉りて上洛し父子事を執たりしか親能は卒去し季時は右大臣家薨去のおり薙髮して職を辭しけるまま伊賀光季毛利親廣上洛し相ならひて事務を攝し京師を警衛せり然るに承久の亂起るに及ひて伊賀光季は官兵に誅せられ親廣は官軍に屬して失にしかは其後は北

條の一族二人六波羅の探題になりて在洛することゝなれり初義經洛中の守衞たりしより時政能保親能朝雅季時光季親廣に至るまてすへて七人洛中守護の首領たりしか爰にいたりて北條氏兩六波羅にありて畿內西國の成敗をつかさとれるより長き例とはなりしなり此兩職を常には六波羅殿とのみ稱する事なるかたまく京都守護とよはれしことも聞ゆされと其つかさとる所古とは事かはりて其名勢重かりけれはひとへに關西の執權の如くなりて評定引付の衆をおき諸奉行を設くるほとの勢となりぬ依てこゝに列せすして次の卷に出せりさて等持院殿將軍補任の後は京都を御所になされしかは別に守護を置るへきいはれなかりけれと鹿苑院殿よりあなたには世の亂いまたしつまらすして將軍家も他邦に赴かることなきならねは其をりくには一門他家にかきらすさるへき輩を京都に留められこれを京都守護なとよひしことありされと臨時の定なれは鎌倉殿の時の守護には准し難かるへし

○洛中警衞

吾妻鏡云文治二年三月廿四日壬寅北條殿近日依可被歸參關東公家殊被惜思食之由帥中納言被傳勅旨且其身雖令下向差置穩便代官可令執沙汰地頭等雜事之旨度々被仰下之處敢无其仁重一旦勅定差置非器代官等若有現不當之事者還可有其恐歟之由固辭及再三但洛中警衞事者示付平六時定內々二品仰也云々廿七日乙巳北條殿已欲進發關東仍爲警衞洛中撰定勇士被差置之其交名注獻折紙所付進帥中納言也注進京留人々合平六傔仗時定梓の 新大夫のたの平二やしはらの十郎くはらの二郎ひせんの江次さかを四郎同八郎ないとふ四郎彌源次ひたちはう平五の二郎ちうはちらう太うへはらの九郎たしりの太郎いはなの太郎同二郎同平三やはたの六郎のいよの五郎太郎同三郎同五郎しむらの平三とのをかの八郎ひろさはの次郎同いや四郎同五郎同六郎かうない大方十郎平一の三郎いかの平太同四郎同五郎已上卅五人五月廿五日壬寅能保朝臣平六傔仗時定及常陸房昌明等飛脚參著持參前備前守行家之首略各申云去十二日在于和泉國在廳日向權守淸實許之由得其告行向圍淸實宅備州逬入或民家二階之上時定襲寄於後昌明競進略搦取之時定相加其所梟首畢六月廿八日甲戌左馬頭能保飛脚參著去十六日平六傔仗時定於大和國宇多郡與伊豆右衞門尉源有綱義經聟合戰然而有綱敗北自殺云々七月一日丙子以平六傔仗時定可被任左右兵衞尉之由被申京都是依有度々勳功也九月廿九日壬申北條兵衞尉時定飛脚參著申云去廿二日糟屋藤太有季虜堀彌太郎者景光白狀云豫州此間在南京云々仍付左典厩經奏聞差副五百餘騎於比企藤內朝宗爲搜求之遣南都了

又云建久元年四月廿日癸卯佐々木左衞門尉定綱飛脚參著申云去十三日右武衞能保室依難產卒給云々五月十日癸亥右武衞室家四十九日可被修御佛事之由被仰遣佐々木左衞門尉定綱三年六月廿日庚申美濃國御家人等可從守護相模守惟義下知之由被仰下是爲被鎭洛中群盜等也四年二月三日庚子奉爲崇院周闋御佛事所被召聚之長絹五百匹被進京都佐々木四郎左衞門尉高綱可執進之由被仰遣廿五日壬戌平六左衞門尉於京都卒北條殿腹心也且爲眼代且爲御使在京多施勳功訖廿八日乙丑京都警衞勤厚御家人等者其賞可超過關東近士之趣被仰下云々

帝王編年記云六波羅土肥次郎實平文治五年以後 牧四郎國親建久三年以後 三條左衞門尉有範建久五年以後○按北條記にもみゆ但實平の下に或本無之とあり三條は五條の誤なり

吾妻鏡云正治二年正月十五日壬寅佐々木左衞門尉定綱在京進垸飯四月八日癸巳佐々木左衞門尉廣綱飛脚自京都參著申云去月廿九日於六條萬里小路若狹前司保季犯掃部入道親能郎等吉田右馬允親淸之妻親淸自六波羅歸之處有此事即取太刀斬伏之其後彼男來廣綱之許依使廳召欲渡廷尉方之間策駿馬逐電畢定遁下東國歟之由廻推察兼以言上云々七月廿七日辛巳六波羅書狀等到來佐々木中務丞經高乍爲帝都警衞人數奉輕朝威條々也是於洛中稱生虜强盜人以其交追捕近隣民居等加之去九日催聚淡路阿波土佐等國軍勢各著甲胄令馳騷依奉驚天聽早可遣關東之旨及勅命云々八月二日乙酉佐々木中務丞經高蒙御氣色三ケ國守護職以下所帶等被召放之是日來聊依罪科雖被經沙汰勳功異他之間暫相宥之處爲洛中警衞之士令騷京都背叡慮之條難及私寬宥之旨再往被經沙汰如此十一月一日癸巳相模權守幷佐々木左衞門尉定綱等飛脚自京都參著去月廿二日可追討近江國住人柏原彌三郎之由被宣下是背帝命之故也

北條記云建仁元年辛酉義直里見列官代或本不見又日記不見也○按又帝王編年記にみゆ但建仁元年已後とありて或本已下の十字なし

吾妻鏡云建仁三年六月廿四日庚申江兵衞尉能範爲使節

上洛是全成息可㆑誅之由被㆑仰㆓相模權守佐々木左衞門尉(定綱)等㆒故也七月廿五日辛卯相模權守使者自㆓京都㆒到著申云去十六日催㆓遣在京御家人等於東山延年寺㆒襲㆓播磨公頼全(全成法橋息)㆒令㆑誅㆓戮之㆒云々

又云元久二年閏七月廿六日辛亥右衞門權佐朝雅候㆓仙洞㆒未㆓退出㆒之間小舍人童走來告㆓追討使事㆒金吾更不㆓驚動㆒退㆓出于六角東洞院宿廬㆒之後軍兵五條判官有範後藤左衞門尉基淸源三左衞門尉親長佐々木左衞門尉廣綱同彈太郎高重已下襲到雖㆓相戰㆒朝雅失㆑度逃亡遁㆓松坂邊㆒金持六郎廣親佐々木三郎兵衞尉盛綱等追㆓彼後㆒之處山内持壽丸射㆓留右金吾㆒云々十月十三日丙寅五條判官有範使者自㆓京都㆒參著申云去二日叡山法華堂渡廊放火(中略)法華常行堂供養法於㆓食堂㆒修㆑之放火事堂衆所行歟之由有㆓其疑㆒云々

又云建暦元年三月廿三日乙亥山門騷動事任㆘被㆓仰下㆒之旨㆖相㆓催京畿御家人㆒可㆑警㆓固園城寺㆒之由被㆑仰㆓駿河守季時左衞門尉廣綱等㆒二年三月廿日丁卯惟義頼時廣綱等依㆓在京奉公之勞㆒各拜㆓領一村地頭職㆒七月七日辛亥駿河前司惟義使者自㆓京都㆒到來持㆓參藤中納言(資實卿)奉書㆒是賀茂河堤事除㆓江丹兩國幷神社佛寺權門庄領等㆒可㆑致㆓穩便沙汰㆒之由可㆑被㆑下㆓知惟義等㆒又此趣被㆑仰㆓諸國守護㆒畢者駿州使者申云件堤事當時致㆓其沙汰㆒之處去月廿四日藤中納言(資實卿)奉㆑仰被㆓相觸㆒云堤事被㆑仰㆓關東㆒時全可㆑費㆓煩諸國㆒之由不㆓思食寄㆒而仰㆓九个國御家人㆒不㆑論㆓權門勢家神社佛寺領㆒可㆓充催㆒由被㆑加㆓下知㆒之間賀茂八幡已下庄々面々訴申就㆑中修理職杣役事於㆓此所々㆒者奉公異㆑他之地也又大嘗會ト合兩國在㆓此中㆒彼是可㆓免許㆒云々惟義申云件杣分可㆑充㆓催何所㆒乎云々而此申狀事太以不㆑足㆑言也仍直被㆑遣㆓奉書㆒之由同廿五日重被㆑仰之旨云々九日癸卯堤事雖㆑爲㆓難儀㆒勅定之上者早可㆑除㆓彼所々㆒之由被㆓仰出㆒仍駿州使者歸洛九月二日乙巳筑後前司頼時去夜自㆓京都㆒下向當時可㆑勤㆓前驅已下事㆒之躰不㆑幾之間所㆑被㆓召下㆒也

又云建保元年五月三日癸卯相州大官令承㆑仰被㆑發㆓飛脚㆒遣㆓御書於京都㆒是義盛雖㆑令㆓伏誅㆒餘黨之分紛散未㆑知㆓其存亡㆒凡京畿之間有㆓骨肉㆒不日無㆓羅索之儀㆒者難㆑斷㆓後昆狼唳㆒也御書之様和田左衞門尉義盛土屋大學助義淸横山右馬允時兼すへて相模の者とも謀叛をおこすといへとも義盛殞㆑命畢御所方別の御事なししかれ共親類多きうへ戰場よりも散々に成よしきこしめす海より西海へも

落行候ぬらん有範廣綱おの〱そなたさまの御家人等にこの御ふみの案をめくらしてあまねく相觸て用意をいたして打とりてまいらすへき也五月三日佐々木左衞門尉殿大膳大夫相模守九日己酉爲㆓廣元朝臣奉行㆒被㆑送㆓御教書於在京御家人之中㆒是在京武士不㆑可㆓參向於關東㆒者令㆓靜謐㆒畢早可㆑守㆓護院御所㆒又謀叛之輩廻㆓西海㆒之由有㆓其聞㆒可㆑致㆓用意㆒之由旨被㆑仰㆓佐々木左衞門尉廣綱㆒云々廿二日壬戌關東飛脚等自㆓京都㆒歸參初使節者八日入洛後飛脚同十四日入洛因㆑玆京中浮說非㆑一自㆑院有㆓御禁制㆒亦在京士卒雖㆘申㆓可㆓參向㆒之由㆖有㆓天氣㆒爲㆑警㆓固洛中㆒被㆑留㆑之佐々木左衞門尉廣綱得㆓私飛脚㆒相㆓伴五條大夫判官有範廣綱㆒各自㆓坊門殿㆒給㆑馬已擬㆓進發㆒之處御教書到著之間留訖云々八月六日甲戌新造御所御障子圖風情事先々繪不㆑相㆓叶御意㆒被㆑仰㆓合識者㆒又有㆓御尋旨等㆒仍今日被㆑遣㆓御事書於佐々木太郎左衞門尉廣綱之許㆒八月十四日壬午京都飛脚參著申云去月廿五日淸水寺法師建㆓立一堂㆒其地在㆓淸閑寺領㆒之由彼寺憤鬱淸閑寺爲㆓台嶺之末寺㆒山又咎㆑之淸水寺依㆑爲㆓南都末寺㆒奈良殊怒㆑之而今月三日淸水寺構㆑城山僧集㆓會于長樂寺㆒自㆓公家㆒先遣㆓檢非違使有範惟信基淸等㆒破㆓却淸水之城㆒制㆓止武備㆒急著㆓法衣㆒可㆑在㆓佛前㆒之旨被㆓仰含㆒寺僧承㆓伏之㆒二年五月七日辛未園城寺回祿之間可㆑被㆑修㆓造唐院幷堂舍僧坊㆒之由有㆓其沙汰㆒以㆓駿河前司惟義朝臣豐前守尙友等㆒爲㆓總奉行㆒宇都宮入道蓮生(山王社幷拜殿)佐々木左衞門尉廣綱(四足門)源三左衞門尉親長(鐘樓)内藤左衞門尉盛家(預坊)已下所㆑被㆑定㆓十八雜掌㆒也八月十三日丁巳大夫判官惟信使者參著申云去四日南都衆徒稱㆑有㆓欝訴㆒奉㆑移㆓春日神木於木津邊㆒欲㆓入洛㆒之由有㆓其聞㆒之間在京士卒悉以奉㆓勅定㆒爲㆑防㆓禦之㆒向㆓于宇治勢多之兩途㆒畢云々三年四月十八日丁未京都御家人等洛中守護不法事殊有㆓其沙汰㆒就㆓忠否㆒可㆑有㆓賞罰㆒之旨今日被㆑遣㆓御書㆒四年六月十四日丙申去頃佐々木左衞門尉廣綱使者相具所㆓參上㆒之東寺凶賊已下强盜海賊之類五十餘人事今日有㆓沙汰㆒可㆑遣㆓奥州㆒之由被㆓仰下㆒云々是爲㆑放㆓夷島㆒去四月廿八日給㆓廣綱㆒於㆓一條河原㆒自㆓廷尉之手㆒請㆓取之㆒云々六年十月十九日戊午佐々木判官廣綱飛脚參著申云去十日中宮御產皇子 御誕生九日有㆓任大臣等㆒將軍家任㆓内大臣㆒給仍持㆓參彼除書㆒十一月五日癸酉大夫判官廣綱自㆓京都㆒進㆓上書狀㆒是去月十五日日吉社御幸之時供奉之間有㆑令㆑刃㆓傷尊當童㆒廣綱射㆓留之㆒訖依㆓被賞㆒同廿一日所㆑令㆓敍留㆒也朝恩之至已爲㆓無雙面

目ニ之由云々將軍家又殊有ニ御感一以ニ近江國松伏別府一被レ加ニ其勸賞一

又云承久二年四月三日壬戌大夫尉惟義使自ニ京都一到來去月廿二日造內裏木作始云々又同廿六日淸水寺本堂燒失之由申レ之五月七日丙申去月廿七日大內陽明門左近府上東門左腋齋院御所等燒亡又同十三日祇園本社燒失云々有範差ニ專使一所ニ申送一也十二月廿日戊子惟信使下著去八日建ニ大內殿舍一云々是賴茂朝臣追討時火災間所レ被ニ新造一也云々三年五月廿一日甲辰一條大夫賴氏自ニ京都一下著到ニ二品亭一二品乍ニ感悅一尋ニ京都形勢一賴氏述ニ委曲一十五日朝官軍競起同日大夫尉惟信山城守廣綱廷尉胤義高重等奉ニ勅定一引ニ率官軍一襲ニ光季高辻京極家一合戰光季幷息男壽王冠者光綱自害放ニ火宿盧一云々六月三日丙辰有ニ公卿僉議一爲ニ防戰一被レ遣ニ官軍於方々一所レ謂摩免戶能登守秀康山城守廣綱下總前司盛綱平判官胤義佐々木判官高重鏡右衞門尉久綱安藝宗內左衞門尉云々 〇按官軍敗るゝに及ひて廣綱久綱以下佐々木の一門は多く東軍の爲に殺され大內惟信は配流せられたり

尊卑分脈云藤原賴平武藤大藏丞男宗平京都守護 〇按こゝに京都守護とあるはあやまりなり此人も定綱惟義等か如くたゝ警衞をうけ給はりしなり能保親能なと同しく京都守護の長官になされしにはあらすこの宗平は太宰少貳資賴の弟なれは所領西國にありし故に鎌倉殿の仰をうけ給はり在京して警衞をつとめしなるへし

吾妻鏡云嘉禎二年七月廿四日己卯南都騷動之間在京人等近國之輩催ニ具一族一可レ抽ニ警衞忠一之旨被ニ仰下一先訖一類不ニ相從一之由近日自ニ諸家一依ニ其訴出來一向後大番以下如レ此役早可レ相ニ從一門家督一之旨今日重被レ定レ之三年三月廿一日壬申京都警衞事自ニ去々年正月一更被ニ結番一之處猶不法之輩依ニ相交一匠作左京兆殊令レ沙ニ汰之一給被レ催ニ御家人等一云々

按洛中警衞は將軍家の御家人たる輩京師にありて洛中洛外の非常をいましむるものにして京都守護の佐職なり凡京都守護たる人は武術にはさはかり長せすとも人望もあり政理にも通する人等うけ給はりけれと此洛中警衞の諸士は武藝をむねとする所職なれは各其家人等を率ゐて永く洛邊のまもりをつとめしなりはしめ義經時政等の京都守護たりしほとは文武の職をふさねしかとも能保守護をうけ給はり時政東國下向するに及ひて能保もと武備の器にあらされは北條時定を京師に留られ常陸房昌明以下の輩と共に警備の役に從はしむ是京都守護に文武の職をわけられし始なるへし又佐々木定綱の一家はその食邑近江にありて地界京師に近きのみならす一家なへて武備の器量たるによりて彼是事の便あるか故にこの一門永く京師の警衞をつとめたり大內惟義も美濃の守護にしてこれ亦京師に程近けれは佐々木の輩と共にこの役に從へり其子惟信も亦父のことく警衞の人數たりしなり其他の諸士もかはるかはる其事を勤めし者多くは其釆地西邊にある人等なりこの輩武備を專務とする事なれと守護たる人或は鎌倉に下り又は故ありて事に從はさるなとの折には武事に限らすいかなる事をもうけ給はりしなり承久に至りて制度大にあらたまり京都守護は兩六波羅となり關西の總攝府になされしによりて評定引付及諸奉行人を命するならひとなりしかは警備の法制もおのつから沿革ありて文治以後の制にはかはりたれとなほ武士を結番して京都の警衞をつとめしむることありしか曆仁元年に篝屋守護といふを定められ洛中警衞の諸士其事に從ふことゝなりぬ猶第四十六冊篝屋守護人の條を合せみるへし

武家名目抄第四十五册

塙檢校保己一編

職名部廿六中

〇六波羅探題

將軍執權次第云承久三年泰時 六波羅始也武藏守 六月十四日入洛住ニ北方一時房 相模守 六月十四日入洛住ニ南方一

北條記云泰時 武藏守 承久三年六月爲ニ六波羅北方一時房 相模守 承久三年六月爲ニ六波羅南方一自レ是京都北南兩六波羅創立時房元仁元年六月下ニ向關東一爲ニ將軍家連署一泰時元仁元年六月下ニ向關東一爲ニ將軍家執權一時氏 修理亮北方二番 元仁元年六月爲ニ六波羅北方一寬喜二年四月十一日下著時盛 越後守南方二番 元仁元年六月爲ニ六波羅南方一仁治三年六月出家同年下ニ向關東一建治元年十二月十二日時國奉ニ六波羅守護一之間又上洛同三年五月二日於ニ六波羅一卒重時 于レ時駿河守後相模守北方三番 寬喜三年三月二日爲ニ六波羅北方一上洛替ニ時氏一寶治元年七月下向爲ニ連署一長時 右近將監北方四番 寶治元年七月爲ニ六波羅北方一上洛替ニ重時一康元元年三月廿八日下ニ向關東一時茂 陸奧守北方五番 康元元年爲ニ六波羅北方一文永七年正月廿七日於ニ六波羅一卒

時輔式部大夫南方 文永元年十月爲六波羅南方同九年二月十五日於六波羅被誅義宗駿河守北方六番 文永八年十二月上洛爲六波羅建治二年十二月下向時國左近將監南方 越後守時盛孫建治元年十二月十三日上洛爲六波羅奉行弘安七年六月廿二日關東下向時村于時陸奧守北方七番 建治三年十二月廿一日上洛弘安十年八月下向兼時越後守初南方五後北方八時村下向後爲北方 弘安七年十二月二日入洛爲六波羅守護永仁元年正月十八日下向盛房丹波守南方六 正應元年二月爲六波羅永仁五年五月下向關東久時于時越後守北方九 永仁元年三月爲六波羅守護同五年六月下向宗宣上野介南方七 永仁四年十月爲京下奉行同五年七月十日爲六波羅宗方北方十 永仁五年六月廿三日爲六波羅正安二年十一月十五日下向關東時村左京權大夫 建治三年十二月廿一日爲六波羅同六年九月十八日下向關東基時于時右馬助北方十一 正安三年六月七日爲六波羅嘉元元年十月廿日下向貞顯于時中務大輔南方八 乾元元年七月爲六波羅延慶二年下向時範遠江守北方十二 嘉元元年十二月十四日爲六波羅德治二年八月十四日於六波羅卒貞房越前守南方九 延慶元年十二月爲六波羅上洛同二年十二月二日於京都卒貞顯于時前越後守後右馬權頭北方十三 延慶三年六月廿五日重上洛時敦越後守南方十後爲北方十四 延慶三年七月廿五日爲六波羅維貞上洛後移北方元應二年五月四日於京都卒維貞陸奧守南方 正和四年九月二日爲六波羅上洛元亨四年下向範貞駿河守北方 元亨元年十一月爲六波羅上洛貞將前越後守南方 正中元年八月廿九日爲六波羅上洛時益左近將監南方元德二年仲時越後守北方〇按本文に六波羅奉行六波羅守護なとあるはいつれも探題をおほよそにいへるにて別に其職ありしにはあらず尙末の按見合すへし

太平記云武家繁昌條 賴朝卿之舅遠江守平時政子息前陸奧守義時自然ニ執天下權柄勢漸欲覆四海(中略)承久ヨリ以來儲王攝家ノ間ニ理世安民ノ器ニ相當リ給ヘル貴族ヲ一人鎌倉ヘ申下奉テ征夷將軍ト仰テ武臣皆拜趨ノ禮ヲ事トス同三年ニ始テ洛中ニ兩人ノ一族ヲ居テ兩六波羅ト號シテ西國ノ沙汰ヲトリ行ハセ京都ノ警衞ニ備ラル

吾妻鏡云承久三年六月十六日己巳相州時房武州泰時兩刺史移住六波羅館如右京兆義時爪牙耳目廻治國之要計求武家之安全云々十七日庚午於六波羅勇士等勳功事糺明其淺深廿四日丁丑相州武州等任申請之旨合戰張本公卿等被渡六波羅今日安東新左衞門尉光成出關東上洛於京都可有沙汰條々右京兆直示含光成云々廿九日壬午安東新左衞門尉光成着于六波羅洛中城外謀叛之輩可被斷罪條々具申之云々七月一日癸未合戰張本衆公卿以下人々可斷罪之由宣下間武州早相具之可下向于關東之旨下知面々預人等云々九月十六日丁酉神事以後抽軍忠輩事有沙汰殊神妙之由有右京兆消息云々又可守護高陽院殿之由下知畿內家人等今日於六波羅定結番云々十月十三日癸未京中警固幷餘黨人等刑法次第有沙汰召六波羅使於當座示合云々

又云元仁元年六月十三日前奧州義時病痾已及獲麟巳刻遂以御卒去年六十二午剋被遣飛脚於京都云々廿六日未剋武州自京都下着又相州幷陸奧守義氏等同下着云々廿九日掃部助時盛相州男武藏太郎時氏武州一男等上洛去廿七日出門兩人共就世上巷說雖稱可在鎌倉之由相州武州被相談云世不靜之時者京畿人意尤以可疑早可警衞洛中者仍各首途

又云寬喜二年二月十九日將軍家令出由比濱是駿河守重時爲京都守護近日依可令上洛御餞之故也有六十四犬追物三月十一日駿河守重時朝臣爲候六波羅上洛三年四月廿一日被仰遣六波羅條々先洛中諸社祭非職輩好武勇事可停止次强盜殺害人事於張本者被行斷罪至與黨者付鎭西御家人在京輩幷守護人可下遣云々五月十三日今日有被定下條々守護地頭有領家訴訟之時不應六波羅召之由依有其聞二箇度者可相觸及三箇度者可注申關東之由先度被仰之處成偃怨之儀不申之歟自今以後無隱容可言上之旨重被仰遣云々

又云貞永元年九月一日畿內幷西國境相論事共以爲公領者尤可爲國司成敗於莊園者爲領家沙汰經奏聞可爲聖斷之由被定且以此趣被仰六波羅云々十一日武州以五十箇條式條相副和字御書被送遣于六波羅十一月廿九日今日六波羅成敗法十六箇條被仰下之云々

貞永式目追加云執權者修理權大夫平時房于時相模守入道前武藏守平泰時于時當任六波羅奉行入道陸奧守平重時于時駿河守入道越後守平時盛于時掃部助〇按こゝに六波羅奉行とあるは卽探題をいへるなり

新編式目追加云於渡部或稱入海號負累點定諸方運上物令致煩費事近多有其聞不穩便早可被加制止也但彼邊爲宗御家人中定有不知之族歟被仰付彼等爲顯其短不可致阿容也兼又彼人々京都警固事並如然之沙汰令觸催時若違背之仁出來者可被注申交名凡不可限渡邊於運上物點定輩者隨聞及可令停止給之狀依仰執達如件文曆二年五月廿三日駿河守殿掃部助殿 武藏守判 相模守判

吾妻鏡云嘉禎元年七月廿三日被仰六波羅條々事先京都及傷殺害人事爲武士聟於相交者可爲使廳沙汰犯過斷罪事爲夜討强盜張本所犯無所遁者可被斷罪枝葉聟者召進關東可被遣夷島也次大番事被定次第之處替番衆遲々之間前番衆勤仕超一兩月令遲參聟者二箇月可勤入也者又都鄙之間有急事之時相互所立之飛脚爲早速取路次往反馬騎用之條人之所愁也向後可構乘馬以下事於驛々之由今日被定云云二年十月二日丙戌六波羅飛脚參着申云自去月中旬之頃南都蜂起構城郭巧合戰六波羅遣使者雖相宥彌倍增云々五日己丑被經評議爲鎭南都騷動暫大和國置守護人沒收衆徒知行莊園悉被補地頭畢又相催畿內近國御家人等塞南都道路可止人之出入之由有議定被撰遣印東八郎佐原七郎以下殊勝勇敢壯力之輩衆徒若猶成敵對之儀者更不可有優恕之思悉可令討亡云々且各可欲致死之由於東士者直被仰含至京畿者被仰其趣於六波羅六日庚寅大和國守護職等御下文被遣六波羅云々十一月一日甲寅六波羅飛脚參着南都去月十七日夜破城郭退散是於所領被補地頭被塞關々之間失兵粮之計難聚人勢之故也云々

新編式目追加云鈴鹿山幷大江山惡賊事爲近邊地頭之沙汰可令相鎭也若難停止者改補其仁可有靜謐計也以此趣相觸便宜地頭等可被申散狀者依仰執達如件延應元年七月廿六日 相模守殿越後守殿前武藏守泰時判修理權大夫時房判

吾妻鏡云仁治元年三月十八日壬午御家人郎等任官事向後所被停止也依之關東家人之由稱申者糺明主人相觸重時可被申任之趣兼日可被示置官藏人方以下公事奉行令旨被仰遣六波羅十二月十六日乙亥御家人任官功錢事有其沙汰隨納或百貫或五十貫令進上官庫可取進反抄之由可被仰六波羅云々二年六月十八日甲戌近年西國諸社神人權門寄人好寄沙汰致狼藉令煩甲乙人之由依有其聞今日被經評議於如然之輩者相觸本所召出其身無所遁者可召進關東之旨可被仰遣六波羅云々

帝王編年記云六波羅駿河守重時仁治三年巳後一人管領

吾妻鏡云寬元二年二月十六日丁亥今日有評定條々被定其法一西國守護奉行事於鎭西者任大將家例可致沙汰必不可依式目其外西國者任被定置旨

可致沙汰之由可被仰遣六波羅三年二月十六日辛巳諸國守護人沙汰事有其定西國守護奉行事於鎭西者依爲遠國不相鎭狼藉之由任右大將家御時之例可致沙汰之由可被仰六波羅云々

又云寶治元年七月十八日己巳六波羅成敗事以相摸左近大夫將監長村所被任也於可祗候于彼第分者兼日被仰巳訖云々

又云建長二年二月五日辛丑諸國守護地頭御家人等背六波羅召符由事有其沙汰向後於如此之輩者可被罪科之由被仰出云々四年三月五日己丑京都飛脚參着于關東宮御下向事自去一日於仙洞連々有其沙汰但三歲宮(后腹)十三歲宮(大納言二品腹)兩所之間何御方可有御下向哉事依被尋仰下之兩六波羅所馳申也被經群議十三歲宮可有御下向之旨被申之仍飛脚皈洛六日庚寅藤次左衛門尉泰經爲御使上洛是宮御下向之間條々事依被仰遣六波羅大夫將監長時朝臣也彼朝臣幷可然在京人等可令供奉由云々十八日壬寅殿下被遣御馬於六波羅左親衛是爲親王御共依可被下向關東也十九日癸卯今曉三品親王關東御下向也自仙洞入御六波羅辰一點令起六波羅給四月一日甲寅寅一點親王自關本御出未一剋出御固瀨宿御迎人々參會此所自京供奉人々波多野出雲前司義重佐々木加賀守親淸長井左衛門大夫泰重左近大夫將監長時四月五日戊午六波羅(留守)飛脚(小林兵衛尉)到着是所持參將軍宣旨案文也五年四月廿五日壬申西國守護地頭御家人背六波羅命者就令注進殊可有御沙汰之由被仰遣云々六年十月一日辛未西國堺相論事有其沙汰一向可爲本所御成敗之間雖有訴訟不及召決其中一向關東御領事者可有其沙汰之由所被仰遣六波羅也

又云康元元年三月廿七日戊午左近大夫將監長時朝臣自京都着去廿日辭六波羅盤務出京云々四月十三日甲戌陸奧彌四郎時茂主(年十六)爲候六波羅上洛廿七日戊子陸奧彌四郎入洛着六波羅北亭云々

又云弘長元年二月廿五日丁巳海道驛馬御物送夫事御使上下向每度依犯定數爲土民及旅人愁之由頻達上聽之間今日所被仰六波羅也其狀云早馬事宿々被定置二匹之處雖非急事近年連々下向之輩或三四匹或四五匹申載帳煩役所於路次致狼藉之由有其聞尤不便自今以後非殊卒爾事之外可任先例之狀依仰執達如件文應二年二月廿五日 陸奧左近大夫將監殿武藏

守相模守京下御物送夫事京下御物送夫任雜掌申請無
左右依令下知人夫多々之間民之煩尤不便自今以後
申請人夫之時令見知御物多少定人數可載長帳
也且於私物送夫者一向可令停止也兼又夫役寄事於
左右於路次不可致狼藉之由可被加下知之狀
依仰執達如件文應二年二月廿五日陸奥左近大夫將監殿
武藏守相模守六月廿五日乙卯良賢事被仰遣六波羅爲
鎭部郾歷勘也其御教書云大夫律師良賢者（故前司泰村舍弟）依有謀
叛之企被召取其身訖指無與力之輩候也依此事在
京並西國御家人等令參向者如先々可被止置也隨
無殊事之由面々可被相觸者依仰執達如件弘長元
年六月廿五日陸奥左近大夫將監殿武藏守相模守三年八月
廿五日壬申春日部左衞門三郎泰實被召放美濃國指深莊
地頭職是當莊沙汰人地頭有非法之由就訴申六波羅
雖下召文泰實不應之仍註進其趣之間及此議即
所被仰遣陸奥左近大夫將監許也十二月十六日壬戌六
波羅陸奥左近大夫將監時茂朝臣歸落依最明寺殿御事參
向而不可綏御物沙汰由被仰出候間揚鞭云々
太田康有記云建治三年十二月十九日御寄合（山内殿）相太守城
務康有被召御前奥州被申六波羅政務條々一人數事因

幡守美作守筑後守下野守山城前司駿河二郎備後民部大夫
出羽大夫判官小笠原十郎入道甲斐三郎左衞門尉小笠原孫
二郎入道加賀二郎右衞門尉式部二郎左衞門尉出雲二郎左
衞門尉一寺社事一關東御教書事一問狀事一差符事一下知
符案事書開闔事五ヶ條民部大夫可奉行一諸亭事因幡守
可奉行一檢斷事出羽大夫判官可奉行一宿次過書事下
野前司可奉行一越訴事下野前司山城前司可奉行一御
倉事甲斐三郎左衞門尉可奉行一雜人事配分初條之人
數可令奉行以前之沙汰等有緩怠之聞者陸奥守越
後守越後左近大夫將監相共可加催促也此外內裏守護
事追可有御計大樓宿直事當時者如前兩人可致
沙汰也追可有御計在京人等事背六波羅下知者可
注申交名也仙洞御使幷貴所使者來臨事可被對面但
隨事體可有問答歟可書渡此事書於奥州之處仰
了一奥州上洛事爲京都守護被差上之由可申入西園
寺殿也御教書案之草進了一越後左近大夫將監（時國）奥州相
共被六波羅雜務可加署判之由可被仰也當座書之
申御判退出廿一日奥州明日進發云々廿五日評定（老）評定
以後城務康有賴綱與性被召御前有御寄合一院宣諸
院宮令旨殿下御教書因幡守可奉行一諸亭事先度因幡守

可奉行之由雖被仰改其儀下野前司可奉行一宿次
事先度下野前司可奉行之由雖被仰改其儀備後民部
大夫可令奉行一番役幷籌屋事奥州越後左近大夫將監
兩人差代官可令奉行一沙汰日之目錄孔子等事周防
左衞門尉可令勤仕此外條々者先度注文不可有相
違也
日吉社幷叡山行幸記云永仁七年四月廿五日に改元をこな
はれて正安元年になる六波羅にして一山の衆徒と妙法院
の門徒と合戰の先發放火の下手ともに糺明の沙汰侍けれ
ともとみに事ゆかす于時六波羅管領は上野介宗宣朝臣
成けるにいか成ものかよみたりけん五條のはしにたてた
りけるかうつけとうへのとひとつこゝろにてそむけうと
するむねのふしきさ
北條記云元應元年五月五日取六波羅施行六箇國以孔
子被定政所分（三河伊勢志摩）問注所（尾張美濃加賀）二年九月二日評定六箇
國被返六波羅
將軍執權次第云元德二年（庚午）仲時十二月日立鎌倉住北
方時益七月廿一日立鎌倉住南方（○按太平記に元弘二年三月五日時益仲時兩六波羅に被補て關東より上洛す此三四年は範貞一人にして兩六波羅の成敗を司とりて在しか辭し申けるによつてとそ聞えしとありされと本文及異本伯耆巻北條記等に依て考ふるに元德二年に時益仲時上洛して貞將範貞に代れりすへて太平記にはかゝるあやまり多し）

異本伯耆巻云元德二年七月廿一日左近將監時益六波羅ニ
被補上洛シテ越前守貞將ニ替ル同十一月越後守仲時上
洛シテ駿河守範貞ニ代ツテ京都成敗ヲツカサトル
又云先帝自船上起ラセ給テ關西ノ宮方京都ヲ攻ルノ由
六波羅ノ採題仲時時益頻ニ關東ヘ此事ヲ告テ脚力ヲ馳テ
加勢ヲ乞ケル
吾妻鏡目錄云或記云元弘三年五月七日六波羅被打落云
云其夜南方左近將監時益當矢死八日於番場宿六波羅
北方越後守仲時以下各自害云々
太平記云（公家武家榮枯易地條）前代相模守ノ天下ヲ成敗セシ時諸國ノ
守護大犯三箇條ノ檢斷ノ外綺フ事無リシニ今ハ大小ノ事
共ニ只守護ノ計ヒニテ一國ノ成敗雅意ニ任スレハ地頭御
家人ヲ郎從ノ如クニ召仕ヒ寺社本所ノ所領ヲ兵粮料所ト
テ押ヘテ管領ス其權威只古ノ六波羅九州ノ採題ノ如シ
沙汰未練書云採題とは關東には兩所京都には六波羅を云
ふ
庭訓往來云問注所者永代沽劵安堵年紀放劵奴婢雜人劵契
和與狀負累證文等謀實糺明之管領寄人右筆奉行人等評
判也奉行人得差符方與奪當參仁者成書下下國之時者
下奉書而無音之時者被下使者召文調訴陳狀相對

當所執事ニ管領奉行人等致ニ問答一披露沙汰就ニ探題之異見一所レ加ニ下知一也 ○按こゝに管領とあるは訴訟ある時に其事を専當する奉行をいふ右筆奉行人とはその副奉行なり探題とあるは則六波羅の探題をいへるなり

按鎌倉殿の時に執權及六波羅の管領たる人を探題と稱せしはもと釋家の探題よりうつりしとなへなり 釋家にて探題といへるはなへて僧たるものに課試及第をなさしむる時に宣旨を蒙りて其可否を辨する職掌なり其受試の者の得失にかゝひて及第落第の定あることなれは碩學の僧ならされは其任に堪さるなり さて武家にて政務を裁決することかの探題たるもの課試を判斷するに似たるか故におのつから探題の稱此重職の名にうつれるなり抑六波羅探題はもと洛中守護といへるものにひとしきつかさにて庶姓の人其職をつかさとり又長官も一人にて下司もそなはらさりしに承久の亂不意に起りしかは北條義時なほ後難あらんことを恐れおもては內裏警衞の職と稱し實は向後の變に備へんとの思はかりにて時房泰時の二將をして六波羅南北の兩亭に分居せしめ京師はもとより畿內近國及關西諸國の政務を攝せしめしより 三河伊勢志摩尾張美濃加賀なとまても管領せしことは本文なる北條記に見ゆ 其任殊に重くなりて殆關東の執權に類するいきほひとなりぬこれより後には北條一家の所職となりけれは他門の人假にも補せらるゝことなし爰において諸家これを崇敬し常には其職號をいはすして六波羅殿とのみ稱し 太平記に見ゆ 或は北殿南殿なともいへり 若狹國守護職次第に見ゆ また評定引付の兩衆及其他の諸奉行をも備へてその佐職とせしかは職員もまた鎌倉に類せりされと臨時に裁斷すへき事ある時は必關東の沙汰を經るならはしなり此職もとより分掌のつかさにあらされは其統領する諸國の政事一ッとしてあつかり聞さるはなし或はこれを六波羅管領ともよひしは當時管領といへるか長官の稱なりけれはなり 其よしは已に管領の所にいへり 鎌倉亡ふるにおよひて此職もともに廢絕せり ○たま〳〵此探題を六波羅奉行といひしこともきこゆれとそれは將軍家の命をうけたまはり沙汰するこゝろよりいへるなれはなへての奉行人とはことかはれり常にいふ奉行人もゝと君命をうけ給はるいはれにはあれと中頃よりこなたには探題の指揮をうくる奉行人といふことになれり

○六波羅評定衆

吾妻鏡云弘長三年六月二日庚戌壹岐前司基政丹後守賴景爲ニ在京一上洛

尊卑分脈云後藤基政使壹岐守從五上六波羅評定衆基政弟基隆從五上使伊勢守六波羅評定衆基政男基賴左衞門尉筑後守從五下六波羅引付頭基賴男基宗基宗男基雄壹岐守六波羅評定衆

又云藤原仲能鎗谷刑部大輔評定衆仲能男重輔水谷淡路守重輔男淸有水谷刑部大輔六波羅評定衆淸有男季有宮內權大輔六波羅評定衆

又云千秋範賴藏人六波羅評定衆

又云波多野義重出雲守從五下六波羅評定衆

遠藤系圖云備前房俊全女子六波羅評定衆島田越中權守妻

光明寺殘篇云元弘元年十月□日先帝於ニ六波羅南方一評定衆以下在京人奉レ警ニ固之一

近江國蓮華寺過去帳云元弘三稔五月九日於ニ近江國馬場宿米山麓一向堂前一合戰討死自害交名云々備後民部大輔康世 四十七歲六波羅評定衆

按評定衆は政務の席に列し探題と共に萬事を裁判する重任なり宿老の輩これに補せらるされは問注所執事引付頭人等のことき機務にあつかれる諸職皆此衆の攝する所なりもとは鎌倉にのみ置れて京師にはなかりけるを承久の亂後北條時房泰時六波羅の兩探題となるに及ひて關東の政府に准し評定衆引付衆の門族の內さるへき器量の輩を鎌倉より上洛せしめ六波羅にも評定引付の兩衆及諸奉行を定置れしなり其職掌は鎌倉に准してしるへし

○六波羅引付頭

尊卑分脈云後藤基政六波羅評定衆基政男基賴左衞門尉筑後守從五下六波羅引付頭

又云小田知宗伊賀守六波羅頭人知宗男時知和泉守常陸介從四下六波羅頭人時知弟貞知筑後守近江守六波羅頭人

又云藤原光政山城守六波羅評定衆光政男兼光土佐守圖書頭引付頭

太平記云 元弘三年三月十二日合戰條 西國ノ勢已ニ三方ヨリ寄タリトテ京中上ヲ下ヘ返シテ騷動ス兩六波羅驚キテ地藏堂ノ鐘ヲ鳴シ洛中ノ勢ヲ被レ集ケレ共宗徒ノ勢ハ摩耶ノ城ヨリ被ニ追立一右往左往ニ迯隱ヌ其外ハ奉行頭人ナント被レ云テ肥脹レタル者共カ馬ニ舁乘ラレテ四五百騎馳集リタレ共皆只アキル、計ニテ差タル義勢モ無リケリ

今川了俊書札禮云公方の御沙汰としても或は隨ニ官位一或は年老次第なとにて被レ定候時は無ニ是非一候(中略)此間われらに向て書札の禮に進上恐惶とあそはし候無ニ勿體一候堅辭退申度候得とも我等か事は既九州の管領時分に候則將軍家の身を被レ分位に被レ居候之間或體は公方に伺申候ての御禮かと心得申候間辭退所なく候今も京都にても大方の一方の引付頭人に成ぬれはそのかゝりの上衆達まして評定衆奉行人等皆々恐惶可レ書にて候間六波羅の頭人九州探題には恐惶の御禮不レ可レ有ニ子細一候云々

按引付頭は卽引付衆の頭人なり常には頭人とのみもいふ評定衆の帶する所職にして諸奉行を指揮し訴訟以下の公事を裁判する重職なり此つかさも承久以後の新置にて職掌は鎌倉の頭人におなし

〇六波羅奉行人

遠藤系圖云俊全備前房六波羅奉行

東寺文書云六波羅施行弓削島施行奉行但馬前司 東寺領伊豫國弓削島雜掌榮實與㆓地頭代佐房㆒相論所務條々事右任㆓去閏四月廿三日關東御下知㆒可㆑致㆓沙汰㆒之狀如㆑件嘉元元年九月十八日

異本伯耆卷云左近ノ藏人賴春は六波羅ノ奉行人齋藤太郎左衞門尉利行カ聟ナリケレハ賴春沈醉ノマギレニ此事ヲ妻女ニ知セケンカノ女父カ許ヘ行ヒソカニ夫ノ企ヲ父利行ニ語リケリ

太平記云賴員同忠條 謀叛人ノ與黨土岐左近藏人賴員ハ六波羅ノ奉行齋藤太郎左衞門尉利行カ女ト嫁シテ最愛シタリケルカ云々〇按賴員は賴春の誤なるへし

又云六波羅攻條 爰ニ六波羅勢ノ中ヨリ年ノ程五十計ナル老武者馬ヲシヅシヅト歩マセテ高聲ニ名乘ケルハ其身雖㆓愚蒙㆒多年奉行ノ數ニ加ツテ末席ヲ汚ス家ナレハ人ハ定テ筆トリナント侮テアハヌ敵トソ思ヒ給フ覽雖㆑爾我等カ先祖ヲイヘハ利仁將軍ノ氏族トシテ武略累葉ノ家業也今某十七代ノ末孫ニ齋藤伊豫房玄基ト云者也云々

杉原系圖云行政佐渡守六波羅奉行

又云恒清玄蕃允六波羅右筆奉行

近江國蓮華寺過去帳云元弘三稔五月九日於㆓近江國馬場宿米山麓一向堂前㆒合戰討死自害交名云々 齋藤宮內丞敎親五十七歲六波羅奉行人

按六波羅にて奉行人といひしは大方引付衆をいへるなれと鎌倉に准して思へはいまた其衆に加はらぬ寄人又は問注所に祗候の輩もありしなるへし凡引付衆は評定衆を輔助する職なれは探題及ひ頭人の旨をうけて公務を沙汰し訴訟爭論の事を裁斷奉行する輩にて後には評定衆に加はるへき族なり猶くさ〴〵の職掌ありしは鎌倉に准して考ふるへし此衆も亦承久に新に置れしつかさなり六波羅探題をたまさかには六波羅奉行といひしこともあれとそれはおほよそにいへる辭にて常にいふ奉行人にあらすなへて奉行頭人とよへる奉行は大かた引付衆なり此事は前の探題の條にもいへり合せ考ふへし

〇六波羅問注所

〇六波羅問注所寄人

吾妻鏡云仁治二年十二月十三日丙寅六波羅御沙汰之間問注奉行人緩怠遲參之由依㆑有㆓其聞㆒定㆓時刻㆒令㆑着㆓到之㆒毎月可㆑進㆓關東㆒之旨被㆑仰㆓相州之許㆒云々

葉黃記云寬元五年正月廿六日庚辰參院今日評定式日也予則參㆓御前㆒云々總四ヶ條也一高野領名手莊與㆓粉河寺領丹生屋村㆒相論堺事於㆓武家㆒遂㆓對決㆒以㆓問注記㆒送㆓關東㆒而於㆓堺事㆒者可㆑爲㆓公家御成敗㆒相論之間狼藉出來了於㆓此事㆒者就㆑被㆓仰下㆒可㆑致㆓沙汰㆒之由時賴申㆓上之㆒仍有㆓評定㆒云々

古今著聞集云興言利口部 松尾神主賴安かもとにたつみの權守といふ翁有りけりわつかに田を持たりけるに相論のこと有て六波羅にて問注すへきにさたまりにけり其日に成ていてぬ此ぬしはまうにをこがましきものなりけれはいか成事かゑいてんすらんと神主思ひゐたるに晩頭に此權守神主か家の前をとほりけり神主よひ入ていかに問注はしなしたるそおほつかなくて待居たるになと餘所には過待そといひけれは權守ゐなほりて過失なげなるけしきにてなじかはつかうまつりぞんじ候へき是程に道理顯然の事なれは一々につまひらかに申て候へは敵口を閉て申旨なく候云々

庭訓往來云抑洛陽靜謐田舍無異貴邊御本望也愚身快樂可㆑被㆑察也就㆑其御引付沙汰定被㆑行候歟所領安堵遺跡相論越境違亂之際欲㆑致㆓參訴㆒之處此間疲勞所領侘傺難㆓合期㆒候恐㆓貴方御扶持㆒可㆑進㆓代官㆒也短慮未練之仁令㆓稽古㆒之程不㆑被㆑加㆓御詞㆒者越度出來歟被㆑書㆓與草案土代㆒被㆑引㆓導奉行所㆒者恐悅候引付問注所上裁勘判之體異見議定之趣評定衆以下可㆑注㆓給之㆒御沙汰之法所務規式雜務流例下地成敗傍例律令武家相違存知仕度候雖㆓晚學候㆒螢雪鑽仰之功不㆑可㆑捐借㆓給古日記法例引付㆒加㆓一見㆒於㆓不審之事㆒者可㆑尋㆓明㆒也

又云御沙汰既嚴密所㆑被㆓執行㆒也更非㆓傍滯預儀之政道㆒訴訟若可㆓悠々緩怠之儀㆒者御在洛之費也可㆑被㆑用㆓意治持之計略㆒先被㆑進㆓擧狀代㆒者公所出仕諸亭經廻可㆑申㆓圖師㆒也奉行人賄賂衆中屬託上衆秘計口入頭人內奏最負窺㆓機嫌㆒可㆑申㆑之〇按こゝに衆中とあるは引付衆をいひ上衆とあるは評定衆をいひ頭人とあるは引付頭をいへるなり 讓狀謀實越境相論未分甲乙次第譜代相傳之武具重書等者於㆓引付方㆒可㆑被㆑遂㆓御沙汰㆒頭人上衆閫閣右筆奉行人等爲㆓終日御評定㆒雖㆑有㆓窮屈㆒更無㆓御休息㆒被㆑勘㆓判之㆒就㆓問注所賦㆒閫閣重賦㆑之執筆書㆓與問狀奉書於訴人㆒之時及㆓兩度㆒無音者仰㆓使節㆒被㆑下㆓召符㆒就㆑違㆓背散狀㆒者直被㆑下㆓知于訴人㆒令㆓召進㆒之時者被㆑封㆓下訴狀㆒番㆓三

問三答訴陳於御前遂問答對決任雌雄是非奉行人令取捨事書於引付窺御評定異見所令成敗也問注所者永代沽券安堵年紀放券奴婢雜人券契和與狀負累證文等之謀實糺明之管領寄人右筆奉行人等評判也奉行人得差符方與奪當參仁者成書下國之時者下奉書而無音之時者下使者召文調訴陳狀相對當所執事管領奉行人等可致問答披露沙汰就探題之異見所加下知也云々〇按管領寄人とあるは問注所寄人の內其訴訟をあつかる人をいふこれ本奉行なり右筆奉行人とあるは輔助の奉行人にていはゆる合奉行なり管領奉行人とかけても管領寄人と右筆奉行人とをならへいへるなり探題とは六波羅の探題をいへるなるへし

近江國蓮華寺過去帳云元弘三稔五月九日於近江國馬場宿米山麓一向堂前合戰討死自害交名云々　問注所信濃少輔外記淸近二十七歲

按問注所執事を常に問注所とのみいへり是評定衆たる輩の帶する職掌也訴訟を沙汰し財貨紛失等のことをも統攝せり凡訴訟の事は引付衆の內よりそれ〳〵に奉行人を定めて數多の訴を分配し各預り沙汰せしむることなるか問注所執事は問注所の長官なれはなへての訴訟にあつかり當所に祗候する奉行人を指揮すれは最重き職掌也此職も承久に置れしものなるへし寄人といふは即當所に祗候の奉行人なり尙問注所執事の條を合せ考ふへし

〇六波羅越訴奉行

太田康有記云建治三年十二月十九日御寄合山内殿相太守城務康有被召御前奥州被申六波羅政務條々(中略)一越訴事下野前司山城前司可奉行〇按下野前司は評定衆宇都宮貞綱なり山城前司は引付衆伊賀光政なり

尊卑分脈云藤原光政山城守六波羅越訴頭〇按越訴頭とは引付頭にて越訴奉行を帶するなり

按越訴奉行は越訴を致すものある時其事狀を糺問し是非を裁決するつかさにて隨分の重職なりもとより訴訟沙汰の事は引付衆の所職なるを其事遲々に及ふ時には間々越訴に及ふ者あるか故に文永の初鎌倉にて引付頭人の內より越訴奉行三人を置れしなり六波羅に此職を設けし事何れの時なるを志らされとも文永已後鎌倉にならひて置れしものと見ゆ猶越訴奉行の條を合せ考ふへし

〇六波羅侍所

〇六波羅檢斷

庭訓往來云侍所者謀反殺害山海兩賊强竊二盜放火及傷打擲蹂躙勾引路次狼藉鬪諍喧嘩等也管領執筆奉行人檢斷所司代賦訴狀於右筆之時以小舍人或下部等召出犯人於侍所記錄申詞依言色體之嫌疑糺明犯否之時所犯已無所遁者則召籠之或及推問拷問拷訊等尋究之可徒者禁獄之可流罪者被記流帳可誅罰者則可處死刑者也總而尋搜與同黨類追放追却以下隨辜輕重其人是非令沙汰者也〇按こゝに管領とあるは侍所の長にて下なる康有記に見ゆる出羽大夫判官のたくひなるへし執筆奉行人とあるは侍所の寄人にて糺問等のことを奉行するものとみゆ檢斷所司代とあるは叡山行幸記太平記等に見ゆる檢斷を云しにて別に所司代と云かありしにはあるへからす猶下の按見合すへし

吾妻鏡云建長六年十月十二日辛巳自公家被仰下六波羅檢斷事有其沙汰今日被遣御教書其狀云被差遣武士於所々事御成敗之後不用御下知於致狼藉者不及子細未斷之時無是非被差遣者尤申上子細可仰重者又人倫賣買事守延應宣下狀一向可停止之由云々

又云弘長三年十月十日丁巳被行評定六波羅檢斷等事有其沙汰令召出彼祗候人佐治入道爲使節向於當座被仰云强盜人事無地頭權門領以下所々自守護所隨相觸可被召出之不然者可被追放彼所無其儀者可補地頭之由兼可被申本所云々

太田康有記云建治三年十二月十九日御寄合山内殿相太守城務康有被召御前奥州被申六波羅政務條々(中略)一檢斷事出羽大夫判官可奉行〇按出羽大夫判官は當時評定衆なる二階堂賴平なりこれは六波羅侍所の長にて庭訓往來にいへる管領なるへし

日吉社幷叡山行幸記云正和三年二月廿日大宮事始四月廿六日に遷宮なる延慶已來闕如の祭禮當年適可被行迚依有其沙汰左方の馬上役は點七條室町成佛法師の家駒形神人と號して差符の榊を新日吉社に送り捨るあいた件の榊をかへしいれんかため同五月一日神人宮仕等彼社に群集し侍る所に六波羅檢斷向山刑部左衛門尉敎利富谷掃部左衛門尉秀高大道をは經すして社壇の後より俄に馳來間宮仕法師等これに驚て方々にけかくれる刻狼藉出來して敎利以下の輩疵を蒙りけり御子宮仕は其後いつちか迯かくれぬらん一人もなかりけるに今ひえに事いてきたりとて京都の武士はせ來て見物の入道法師をなんちは宮仕かおのれは田樂歟とておほく斬殺しけれは死人社頭にみちみちて血のかゝらぬ所もなし忝かしこさかしけるあまり神殿をこほち破りて神體けかれ給ひにけり

北條記云正和三年五月一日於京都新日吉神人與六波羅北方使向山刑部左衛門尉致鬪亂云々〇按向山は北方の檢斷なり

文保三年記云正月十八日申刻東大寺八幡宮御入洛依兵

庫闕違亂也十九日寅剋御京着於衆徒者自法性寺邊逃去畢神人等頂戴神輿進發之處於七條河原武士（澁谷一黨）行數檢斷奉最前馳向奉防禦

太平記云（俊基六波羅召捕條）二條中將爲明卿ハ指タル嫌疑ノ人ニテハ無リシカトモ叡慮ノ趣ヲ尋問ン爲ニ召捕レテ齋藤某ニ是ヲ預ラル先京都ニテ尋沙汰有テ白狀有ラハ關東ヘ注進スヘシトテ檢斷ニ仰テ已ニ嗷問ノ沙汰ニ及ントス六波羅ノ北ノ坪ニ炭ヲオコス事鑊湯爐壇ノ如ニシテ其上ニ青竹ヲ破リテ敷雙ヘ少シ隙ヲアケケレハ猛火炎ヲ吐テ烈々タリ朝夕雜色左右ニ立双テ兩方ノ手ヲ引張テ其上ヲ歩セ奉ント支度シタル有樣ハ見ニモ肝ハ消ヌヘシ

又云（笠置軍條）元弘元年九月一日六波羅ノ兩檢斷糟谷三郎宗秋隅田次郎左衞門五百餘騎ニテ宇治ノ平等院ヘ打出テ軍勢ノ着到ヲ看ルニ催促ヲモ不待諸國ノ軍勢夜晝引モ不切馳集テ十萬餘騎ニ及ヘリ

又云（主上御沒落笠置條）兩檢斷高橋刑部左衞門糟谷三郎宗秋六波羅ニ參テ今度被生虜給シ人々一人ツヽ大名ニ被預云々

又云（楠出張天王寺條）兩六波羅ニハ畿内近國ノ勢馳集テ楠今ヤ責上ルト待ケレ共敢テ其義モナケレハ此方ヨリ押寄テ打散セトテ隅田高橋ヲ兩六波羅ノ軍奉行トシテ四十八箇所ノ篝幷ニ在京人畿内近國ノ勢ヲ合テ天王寺ヘ被指向

又云（元弘三年三月十二日合戰條）六波羅ノ北方左近將監仲時事ノ體ヲ見ルニ何樣坐ナカラ敵ヲ京都ニテ相待タン事ハ武略ノ足ラサルニ似タリ洛外ニ馳向テ可防トテ兩檢斷隅田高橋ニ在京ノ武士二萬餘騎ヲ相副テ今在家作道西朱雀西八條邊ヘ被差向

按侍所の職掌は第廿冊にも注せしことく非違を檢察し不廃を戒め罪人を決罸する等の事すへて其うけ給はる所なり六波羅に侍所を置れしはたしかに所見なしされと建治三年評定衆二階堂頼平か檢斷の沙汰を奉行すへきよしうけたまはりし由の康有記に見ゆるは常にいふ六波羅檢斷にはあらす檢斷の職掌を統領する長官なるへけれは鎌倉の侍所の所司にあたれりされは六波羅にても常の辭には侍所とも所司ともいひしと見ゆ故に庭訓往來にも侍所と𢘟るせしならんさてこそに管領とかけるは即其所の長官をいへるなるへし（鎮西要略に蒙古防禦の爲に宇都宮貞綱か西國へ下向のことを記せし處に貞綱を六波羅侍所とのせたり尊卑分脈宇都宮系圖等に貞綱引付衆たりことは見ゆれと此職たりしことなけれは疑なきにあらすされとまた據ありてかけるならんもはかりかたけれはしはらくこゝに注せり）さて其佐職に檢斷といへるあり是はむねと檢察巡行をつとめしと見ゆこれいはゆる兩六波羅檢斷なり彼是を合せ考れは長官は一人にて檢斷をのみ兩所に置れしなるへしこの檢斷をたま〳〵には所司代とも唱へしと見えて庭訓往來に檢斷所司代と注せりこれ元より檢斷と所司代との兩職にはあらぬをかく二稱をかさね記せしは同條に右筆との云ても聞ゆへきを右筆奉行人とかさね注せしにおなしこゝろなり（既に本文に注せり又南太暦に文和二年六月八日當南有火此間檢斷侍所土岐一族長山屋云々とありこれは侍所の所司土岐か一族にて當時所司代たる長山か家そと云へるなりこれにても所司代を常には檢斷とも云ひしを知るへし）こゝの長官は大かた文官に居るもの、かぬれは巡察決罰等をは兩檢斷に委任せしにや事あるときは必兩檢斷在京の兵士を率ゐて其役に從ひ軍陣に臨みては軍奉行となりて軍兵の著到を注すこれ皆侍所の職掌なり猶第廿冊なる侍所の條に合せ考ふへし此職も承久已後に置れしものなるへしそれよりさきには絕て聞ゆることなし

○六波羅祗候人

吾妻鏡云寛元元年十一月十日壬子在京御家人等大番役勤仕免否事有其沙汰縱令就西國所領下向其所於時時指出者不可准不退在京奉公不退祗候六波羅者上尤爲奉公可免其役云々又大谷中務入道不候六波羅下向所領早可令勤仕番役之由今日被仰下云云

又云弘長三年十月十日丁巳被行評定六波羅檢斷等事有其沙汰令召出彼祗候人佐治入道（爲使節參向）於當座被仰云々

按六波羅祗候人はもと定まれる職掌とてはなかりしものと思はるれと常に六波羅亭に候らひて雜事を辨する御家人なれは折にふれては政事に從ひしこともありしならんおほかた寄人なとのたくひなりおもふに兩檢斷の聲はこの祗候人の内なとより命せられしものなるへし

武家名目抄第四十六册

塙檢校保己一編

職名部廿六下

○大内守護

平家物語云（鵼條）源三位入道頼政は保元の合戰の時も御方にてさきを懸たりしかともさせる賞にもあつからす又平治の逆亂にもすてに親類をすて丶參したりしかとも恩賞是をろそかなりき大内守護にて年ひさしうありしかとも昇殿をはゆるされす年闌齡傾て後述懷の和歌一首讀てこそ昇殿をはしたりけり人しれぬおほうち山のやまもりは木かくれてのみ月をみるかな此歌によつて昇殿ゆるされ正下の四位にてしはらくありしか云々

尊卑分脈云源頼政昇殿大内守護備後守右京權大夫從三兵庫頭右馬助藏人左將監頼政男頼兼大内守護藏人從五下院内昇殿頼兼男頼茂大内守護安房近江守右馬權頭兵庫頭正五下鎌倉右大臣薨之後有謀反之聞仍建保七七十三自仙洞被召之處不應勅定仍欲被追討之間于時依爲大内以下内裏守護忽放火燒皇居即自害了

愚管抄云頼兼は頼政をつきて猶大内の守護をさせられき久しくもなくてえ思ふ樣ならてうせにきそれか子とて頼茂と云者又つきて大内に候ける

吾妻鏡云文治元年五月廿七日己酉源藏人大夫頼兼申云去月十八日盜人令推參禁裏盜取晝御座御劔藏人并女房等動搖求之頼兼家人武者所久實追奔于左衞門陣之外生虜之奉返置御劔於御所件犯人被搦取之時欲自殺之間已半死半生之由只今有其告云々如然之勇士殊可被加賞之由一品被感仰則取出劔稱可與彼男賜頼兼云々六月九日庚申廷尉（義經）此間逗留酒匂邊今日相具前内府（宗盛）歸洛又重衡卿自去年在狩野介宗茂之許今被渡源藏人大夫頼兼同以進登任衆徒申請可被遣南都云々四年六月四日戊辰所々地頭沙汰之間事注條々令付帥中納言（經房）給之處御返報今日到著所副獻權右中辨定長朝臣奉書也（中略）大内守護事頼兼申狀尤不便他人結番可被守護樣只可被申攝政殿云々

又云建久元年六月廿六日己酉大内守護事日者相副北國御家人等於散位頼兼可令勤仕之由二品被定申訖而以彼國許不可叶之旨頼兼申之間被奏聞其趣云々二年五月二日己酉遠江守義定朝臣飛脚參申云當時禁裏守護番也

去月廿六日神輿入洛之時家人等仍相禦不可發鬪戰之由頻有別當宣之間謹愼處家人四人同所從三人忽爲山徒被及傷依仰朝威怖（中略）神慮已如忘勇士之道可殆招入之嘲歟云々三日庚戌被付奏書於高三位（泰經）其狀云言上云々遠江守義定依奉大内守護差置郎從等而衆徒亂入之時爲官兵被召付歟依勅定仰神威不懸手於衆徒之處濫行之餘乘勝及傷彼郎等四人同所從三人之由依義定申狀所承也（下略）五年四月七日戊戌源藏人大夫頼兼使者自京都參著獻書狀大内守護之間去月廿八日於仁壽殿前搦獲犯人推問之處欲燒大内云々此上不及子細則梟首之由載之度々顯勵功於武勇頗不恥父祖之由將軍家殊感給

又云承久元年七月廿五日戊午伊賀太郎左衞門尉光季使者自京都到著申云去十三日未剋誅右馬權頭頼茂朝臣虜子息下野守頼氏訖云々頼氏依背叡慮遣官軍於彼在所昭陽舍（頼茂守護大内問住此所）合戰頼茂并伴類等入籠仁壽殿自殺放火郭内殿舍以下悉以爲灰燼云々（○按光季は京都守護なり）

承久記云都ニハ又源三位頼政カ孫左馬權頭頼持トテ大内守護ニ候ケルヲ是モ多田滿仲カスヱナレハトテ一院ヨリ西面ノ輩ヲ差遣シカハ是モ難遁トテ腹搔切テソ失ニケル院ノ關東ヲ亡サント被思召ケル事ハアラハナリ（○按已上尊卑分脈以下六條は鎌倉將軍家の時の大内守護なり）

太田康有記云建治三年十二月十九日御寄合（山内殿）相太守城務康有被召御前奧州被申六波羅政務條々（中略）内裏守護事追可有御計（○按此一條も鎌倉殿の時の事なれと是は沙汰ありしのみにて當時其任ありしにはあらす）

園太暦云觀應元年十二月四日入夜風聞江州凶徒押寄勢多宿燒拂也橋同燒之已可入洛之旨風聞依武家進守護衞於仙洞但此事無殊子細歟云々耆三年二月廿一日雅仲卿來仙洞守護事先日勅定之趣申入南方御所勅答之趣無相違依申遣武家也云々

花營三代記云應安二年四月廿日日吉社神輿去年所四口基入洛奉振捨之剋佐々木大夫判官入道崇永内裏警固之處山徒等著兵仗擬令亂入禁裏之間依令防戰兩方討死手負數十人在之仍衆徒引退剋所々放火然間翌日（廿一）勅書云崇永一人依參入玉座之邊無爲可謂拔群之勵功衆徒已超先蹤放火已了頗朝敵之分歟尚々依一將之警衞防百鬼之災難其功難謝之（此外略之）由被染宸翰以二條前關白家被傳仰崇永畢

三内口決云綸旨事綸旨者職事書出候勅裁ト號スル此事候地下堂上并諸寺諸社へ被成下候事勿論之儀候此外守護

武士之中或依㆓勳功之賞㆒或就㆓所帶㆒被㆑成㆓勅裁㆒之儀連綿在㆑之事候以㆓此推擧㆒近代猥被㆑成㆓下綸旨㆒之沙汰共承及候一向不㆑打任㆓儀候條不㆑可㆑然候（○按以上二條は足利家の時ことあるおり臨時に定められし守護にてつれに警備をつとむるものにあらす但初の一條は院內守護なれと其趣同しき故にこゝにのす）

按大內守護はもと公家の命せられしつかさなり但し其起源をたしかに記せるものなけれは何れの御世にはしまれりといふ事知かたし今當時のさまに依て推考るに大かた天曆以後の制にて近衞兵衞なといふ警備の職たる輩やうやく柔弱になりて其所職に堪すなりにし後置れしにやあらんさて其名目のものに見えしは賴光そはしめなりける（賴光の大內守護をうけ給はりしことは尊卑分脈に見ゆ）思ふに賴光の父滿仲は殊に武勇の器にあたり家人も多かりけれは公家にも爪牙の臣とたのませ給へりされは此人はしめて其所職にはあたれるならむこれ元より定まりたる司にあらされはたゝ禁內を守護しまつるへき由の仰ことなとありしのみなるへけれはその名目も傳はらさりしなるへし（滿仲朝廷の爪牙として多くの家人をもてる由は今昔物語古事談續卷なとに見えたり）賴光も武勇の器たりしかはやかて父の業をつきて大內守護を守遺給はりしより源家の家業となりて賴政賴兼等にいたるまて其役に從ひしなるへし（但賴光の子孫賴國賴綱仲政の三代はこの職たりしこと分脈にはみえす仲政は賴政の父なり）

鎌倉右大將家國權をとらるゝに及ひて賴兼已か一家の所從のみにては大內守護のつとめに堪さる由なけき申けれは北國の御家人等をもて賴兼につけられしかとも猶堪さりけれは他の大名をも結番せしめて賴兼の副となされしかは禁裏守護番なといふとなへもありしなり承久に賴兼誅せらしかはいくほとなく世の亂いてきて北條の家族兩六波羅に居をしめ畿內西海の警衞をすへつとむることゝなりしかはさらに大內守護をは置れさりしなるへし足利殿の世となりても世のさはかしかりしほとは臨時に大內院內守護の輩を定むることもありしかと鹿苑院殿よりこなたには其事さへまれ〳〵になれりとそ

○大內夜行番

吾妻鏡云文治四年五月廿日丙辰八日左衞門尉朝家郎從庄司太郎被㆑遣㆓大內夜行番㆒之處懈緩之由依㆑令㆓風聞㆒早可㆑召㆓進其身於使廳㆒云々

按大內夜行番は夜ことに禁內を巡行して非常を警むる司なりこれとも衞府の職掌なれと中頃にいたりては其つとめに堪すなりしにより武家よりはからひ申さるることゝはなれるなるへし

○大番番頭

○大番

平家物語云（信連合戰條）平家の侍ともあつはれ剛の者や是等をこそ一人當千の兵ともいふへけれと口々に申けれは其中に或人の申けるはあれか高名は今にはしめぬ事そかし先年所に有し時大番衆の者ともの留かねたりし强盜六人に只一人をつかゝり二條の邊にて四人切伏二人生捕て其時なされたりし左兵衞尉そかし云々

又云（朝敵揃條）はたけ山のしやうしけよしをやまたのやつとうありしけうつのみやのさゑもんともつなこれらは大はんやくにてをりふしさいきやうしたりけるか云々

吾妻鏡云治承四年六月廿七日戊申三浦次郎義澄千葉六郎大夫胤賴等參㆓向北條㆒日來依㆓番役㆒所㆓在京㆒也武衞對㆓面件兩人㆒給云々

源平盛衰記云（賴朝義經中違條）此昌俊ト云ハ本大和國住人ナルユヘ奈良法師也當國ニ針庄トテ西金堂ノ御油料所アリ不慮ノ沙汰出來テ當庄代官小河四郎遠忠ト云者カ西金堂衆ニ敵シテ年貢所當ヲ打止間堂衆又昌俊ヲ語ヒテ大勢ヲ引卒シ針庄ニ押寄テ遠忠ヲ夜討ニス（中略）大衆憤深シテ就㆑經㆓天奏㆒昌俊ヲ召ケレトモ敢テ不㆑從㆑勅依㆑之衆徒之訴訟雖㆓欝深㆒兩方ノ理非未㆓開召開㆒急企㆓參洛㆒被㆑申㆓道理㆒者可㆑有㆓聖斷㆒之由被㆓宥仰下㆒ケレハ昌俊卽上洛可㆔召誡之旨仰㆓別當兼忠㆒兼忠昌俊ヲ召捕テ大番衆土肥次郎實平ニ被㆑預ケリ月日ヲ送リケル程ニ心樣甲斐々々敷者ナリケレハ實平ニ親クナリヌ隨又公家モ御無沙汰ナリケレ共南都ハ敵人强ケレハ還住セン事難治ニテ實平ニ相具シテ關東ニ下兵衞佐殿ニ奉公ス云々

平家物語云（土佐房被斬條）土佐房一旦の害をのかれんかために居なから七枚の起請を書或は燒て飮或は社の寶殿に籠なとしてゆりて歸り大番衆の者共催し聚めて其夜襲く與せんとす判官は磯禪師と云白拍子か娘靜といふ女を寵愛せられけり靜申けるは大路は皆武者て侍なる御內より催のなからんに是程まて大番衆の者共か噪へき事や候へきいか樣にも是はひるの起請法師かしわさと覺え侍ふ云々

吾妻鏡云建久三年六月廿日庚申前右大將家政所下美濃國家人等可㆔早從㆓相摸守惟義催促㆒事右當國內庄之地頭中於㆘存㆓家人儀㆒輩㆖者從㆓惟義之催㆒可㆑致㆓勤節㆒也就㆑中近日洛中强賊之犯有㆓其聞㆒爲㆑禁㆓遏彼黨類㆒各企㆓上洛㆒可㆑勤㆓仕大番役㆒而其中者不㆑可㆓家人㆒之由在々早可㆑申㆓子細㆒但於㆓公領㆒者不㆑可㆑加㆑催兼又重隆（佐渡前司）郎從等催召可㆑令㆑

勤其役於隱居輩者可注進交名之狀所仰如件云云十一月廿五日甲午早旦熊谷次郎直實與久下權守直光於御前遂一決(中略)直光者直實姨母夫也就其好直實先年爲直光代官令勤仕京都大番之時武藏國傍輩等勤同役在洛此間各以人々代官對直實現無禮直實爲散其鬱憤屬于新中納言(知盛卿)遂多年畢云々

古今著聞集云(興言利口部) 順德院御位の時ある所の格勤者よりあひ雜談しけるに內裏の番替此たひは思外にきひしくてなと云を獨りがいふやういかにきひしくとも我はたかあしたはきとほりてん少もとゝめらるましといひけれは殘りの輩なりかゝりてをこつきけりさらはあらかい給へかし只今に見えんずることをと云を與ある事なりとて皆の輩一方にて此主一人にかゝりてあらかひかためてけりわきまへのあるへきやう引出物のほとらいなとさためてさらはおの〳〵陣口へいさたまへとて引ぐしていぬ人々目をすましたるに此主ことに高きあしたはきて二條油小路を南へとほるに案のことく大番のものあの男のあしたはなといふを少も聞入ぬさまにてにらみまはして猶行を大番のものはしり出てとらへむするとき此ぬしけしきかはりたる事もなくてさもあらすあたらしき事いふ大番かな南圓堂の寄人の陣口ものはきてとほることをはしらさりけるか大番を承ほとにていかてかわか氏をは存せさりけるといひてことゝもせさりけれは主人の武士やそれ〳〵南圓堂の寄人は物はきてとほるくるしからぬ事それとゝまれとなまり聲にて高聲にいひけれは走立てとゝめけるもの歸りにけり

吾妻鏡云正治元年九月十七日丙午京都大番役依有懈緩之聞可加催促之旨被仰諸國守護人等云々廣元朝臣幷景時等奉行之 十二月廿九日丁亥以小山左衞門尉朝政補播磨國守護職畢住國家人等相從朝政勤仕內裏大番總可致忠節也朝政可沙汰事者謀叛殺害人事也相交國務不可成敗人民訴訟凡觸事不可煩國中住人之旨被仰含

承久軍物語云二位殿もしかるへしとりやうしやうし給いかに侍ともたしかにきけ日本こくのさふらひはむかしは三とせの大はんとていとをしゆこする事一この大しと思ひいへのこらうとうまてはれらかに出たちてのほるといへとも三とせのさいきやうにちからつきくに〳〵くたる時はかちはたしにてかへりしを故う大しやう殿これをあはれませ給ひ三とせを六月につゝめふんにしたかひ人のたつせるやうにしはいし給へはよろこふ事かきりなし云云

吾妻鏡云寬喜元年九月十日駿河次郎泰村相具妻室(武州御息女)上洛是爲大番勤仕也

又云貞永元年四月四日京都大番事有其沙汰國中地頭中雖令居住他國於先々勤來之輩者催加代官可令勤之由被仰守護人等云々十二月廿九日在京御家人者大番不能勤仕之由被定又於禁中節會之時大番衆下人等爲見物參入之間喧々狼藉之由依有其聞可停止之云々

貞永式目云諸國守護人奉行事 左右大將家御時所被定置者大番催促謀叛殺害人(付夜討强盜山賊海賊)等事也

新編式目追加云西國御家人所領事 右西國御家人者自右大將家御時守護人等注交名雖令催勤大番以下課役給關東御下文令領知所職之輩者不幾依爲重代之所帶隨便宜或給本家領家下知或以寺社惣官之下文令相傳歟而今就式目多違亂出來云々是則承久兵亂之後重代相傳之職中挿奸心之族模新地頭之所務奉蒙如國司領家之由有其聞之間爲斷如然之猥唳於本所御成敗事者不及關東御口入之由被定畢就之何忽可及御家人等之侘傺哉但爲本所現奇怪蒙其咎者可謂勿論歟然者訴訟出來之時各觸申本所可被注申罪科之有無於關東者也兼又於自今以後者被觸仰子細者可有尋沙汰之由面々可被申置抑雖假名於下司職非御家人列者守護人更不可令催促大番役若充催其役者可爲本所之鬱訴之故也以此旨可致沙汰之狀依仰執達如件 天福元年五月一日 駿河守殿 武藏守判 相模守判

侍所沙汰篇云就天福元年八月十五日六波羅御注進十七ヶ條被加關東押紙內一大番衆令逃失召人事右召人出來之時令預大番衆又在京輩處令逃失畢然而其科依輕重難定申候歟今不致沙汰候之間或强盜或殺害人大略十之七人令逃失候也爲自今已後尤可被定下候歟押紙云可令修造淸水寺橋也

北條記云文曆元年京都大番御教書云爲京都大番人自明年以六ヶ月定一巡被結十二番畢早爲一番自明年正月至六月可被在京狀依仰執達如件 文曆元年正月日某殿右京權大夫修理權大夫

新篇式目追加云西國御家人中於所領知行之輩者隨守護所催可勤仕京都大番之處致自由對捍空涉日月

之族有其聞於自今以後者就守護人注申爲償其過怠隨彼分限可令召付清水寺橋修理給之狀依仰執達如件
文曆二年正月廿六日　武藏守判
相模守判

貞永式目追加云京都大番事被定月充之處替番衆遲々之間前衆勤越之條尤不便也一月令遲參之輩者二ヶ月可勤入也守此率法可令精好給之狀依仰執達如件
文曆二年七月廿三日　駿河守殿（重時）掃部助殿（時盛）　武藏守判
相摸判
〇按吾妻鏡にも又この事あり但一月令遲參とあるを一兩日令遲參に作れり

又云京都大番衆事遁有限之役寄事於左右懈怠之輩者假令一ヶ月令遲參者爲其過怠可被充未作彌作用途錢十貫文其已下之日數者以之可被仰充之狀依仰執達如件
仁治元年十一月廿八日　相摸守殿　前武藏守判

吾妻鏡云寬元二年六月十七日戊戌新田太郎爲令勤仕大番在京是爲上野國役之故也而稱所勞俄遂出家但不相觸事由於六波羅竝番頭城九郎泰盛等之由依有注進狀今日評定之次被經沙汰任被定置之旨可被召放所領之由被定云々

新篇式目追加云西國京都大番役事新補地頭等被充段別課役之條不可然長門國大峯庄條々下知可充被用途之由被載之上者縱雖有如然下知於自今以後者如譲狀畢件譲之時後家所分者一期之由難載之くひかくして正元二年三月十五日彼田畠限永代譲畢於所役者京都大番役錢壹貫五百文畠役色々合錢三百八十七文四箇年一度檢注役者如先々鎌倉大番免除畢このしやうをそむいていらんさまたけいたし候は、賴長の子息等者各の譲狀のするところの田畠にあたるへからす仍證文後判譲如件
正元二年三月十五日　源賴長
永長源有長
嫡子源隆長

吾妻鏡云文應元年二月三日辛丑依山門蜂起園城寺定有火災歟可警固彼寺之由可相觸大番衆之旨被仰遣六波羅云々

東寺文書云若狹次郎兵衞入道跡大番役事可令參勤役所新院御所殿上口之由被載關東御注文了而寄事於走湯造營雖被口子細不及六波羅沙汰歟所詮任被仰下之旨不日企上洛可被勤仕也仍執達如件
文永六年二月廿四日　陸奧守在判
若狹四郎入道殿

又云東寺御領若狹國太良庄雜掌重言上地頭若狹四郎入道號大番役用途切宛段別錢貳百五拾文致苛法責間先例不勤仕由令謝申處彼代官忠賴構百曲陳狀無謂子細事
副進
一通　段別宛錄注文案
一通　關東平均御下知狀條々（西國京都大番段別課役停止事建長六年十月五ヶ條御下知內）
謹返上地頭請文（副陳狀）
彼代官忠賴狀

先々夫役雜事之外一向所停止也以此趣可加下知也云々

吾妻鏡云寶治元年十二月廿九日丁未京都大番勤仕事結番之各面々限三ヶ月可令致在洛警巡之旨被定下云
一番　小山大夫判官
二番　遠山前大藏少輔
三番　島津大隅前司
四番　葛西伯耆前司
五番　中條藤次左衞門尉
六番　隱岐出羽前司
七番　上野大藏權少輔
八番　千葉介
九番　宍戸壹岐前司
十番　足立右衞門尉跡
十一番　後藤佐渡前司
十二番　伴東大和前司
十三番　佐々木隱岐前司
十四番　三浦介
十五番　名越尾張前司
十六番　秋田城介
十七番　大友豐前前司跡
十八番　足立左馬頭入道
十九番　天野和泉前司跡
二十番　信濃民部大夫入道
廿一番　宇都宮下野前司
廿二番　甲斐前司

又云建久二年十月七日己亥京都大番間事有其沙汰諸御家人等或褊總領或背守護人之間屬其方可令勤仕之由近年頻望申綺已濫吹之基也於向後者若隨守護之催若屬一門上首可勤之任雅意事不可有免許之由云々

萬澤家文書云譲渡平井郷屋敷名田事後家分（櫻島一所名田一町）坪付總日記狀在之右件田畠者源賴長相傳所帶也然而後家分限永代譲渡所實正也但正嘉二年八月日子息等始後家分之云譬雖不勤先例始自關東六波羅殿可令勤仕彼役之由於被仰下者云雜掌云地頭何可令違背哉云々此條先例不勤仕大番役之條已以炳焉也其上以新儀張行之條太無道也彼役不勤仕之例委可申之當地頭親父若狹次郎兵衞尉忠季建久六年補任當國守護正治二年遠敷郡三方郡被補二郡惣地頭雖然人夫召仕之外無別煩建仁三年出羽前司家長遠敷郡同給九ヶ所地頭（太良庄此內也）十七ヶ年雖令知行無其煩承久二年次郎兵衞入道忠時守護地頭共以返給之其時當地頭舍兄兵衞尉忠時大番勤仕之是又人夫召仕之外無煩三代之例如此其上關東度々御下知狀云承久兵亂以前本地頭者有所務之先例更不可有新儀兵亂以後新地頭者被定置率法畢何背彼狀哉云々而當地頭定連請繼親父之跡經往年畢而違背彼例而忝付數多使煩百姓等安堵御計也而違背彼御下知狀任雅意切宛段別二百五拾文致苛法責之條爭可無其咎哉幷仰上裁者也同狀云關東六波羅殿於御下知者爲雜掌之身何輙可被停止哉自由之企諸事仰御遐迹者也凡者就大番勤仕宛催段別雜事之條傍例也所詮早被止雜掌非分之濫訴於大番雜事等者任傍例可致

沙汰之由欲蒙御裁許云々此條存外之申條也其故者關東六波羅殿御下知狀者可守護新院御所殿上口之由被仰下歟其外可宛段別課役子細所不見也且平均御下知狀云西國京都大番役事新地頭等宛段別課役之條不可然於自今以後者如前々夫役雜事之外一向可被停止云々而就大番勤仕宛催段別雜事之條傍例也云云傍例者何傍例哉尤以不審若狹國中大番勤仕之例人夫召仕之外一向無其煩之條委細令申先段畢仍不及重申所詮早任當國之例人夫役之外於別煩者可令停止之旨欲被仰下矣以前兩條就地頭陳狀重言上如件文永六年八月二日

北條記云、建治元年四月十五日大元使著長門國室津浦八月件牒使五人被召下關東九月七日於龍口刎首其後警固事有沙汰鎭西撰補守護人器用發遣海邊國々止京都大番役被差置在京人公家武家減省公事行儉約休民庶皆是爲軍旅用意也(○按この時異賊の備あるか故に西邊の御家人は大番役をゆるされその替に在京人をもて京師の警備にあてられしなり)

正安元年六波羅下知狀云、如二月十三日(不記年號)越後禪門狀者丹波國波々伯部保下司盛經折紙如此於官兵幷大番者任先例可令勤仕云々如寬喜四年二月十九日守護代具々部左衞門尉施行者官兵幷大番役者任先例勤仕之由御敎書十五日所下給也(○按官兵とあるは非常の事ある時公家の召に應し弓箭兵仗をとりて事に從ふ武士をいへるなり)

沙石集云(藥師利益條) 世に有はひたるわかき女はうありけり淸水へ常にまうてけるかやかて下向するほとに五條の橋に大番衆とおほしき武士せい〳〵として行あいぬいかなる人そたゝ一人ましますはといへは物もうてのけかうのよしこたふいさゝせ給へゐ中へくしまゐらさんとなほさりにいひかけられてたよりなき身にて侍れは御あはれみあるへくはいつくへもまいらんといふさてはとてやかて引馬にうちのせてくたりぬたかひの心さしあさからすしてとしへ子息なともいてきたのしくさかえて奥州にありけりさて十年はかりすきて次の大番にこの女房あひくしてのほりけり(○按源平盛衰記巳下廿五條は鎌倉殿の時の大番衆なり)

伯耆卷云、元弘三年二月始比にや自京都供奉仕ける成田入道を召て被仰下けるは思召立るゝ事あり此番衆の中に誰をか可有御賴と勅定有けれは土屋又四郎と申者を召て參る以六條少將殿汝を賴被思召由被仰下けれは小分限者にて難叶候但伯耆國奈和庄地頭に村上又太郎長高と申者こそ弓箭を取ては樊噲張良にも劣らしと思仁にて候其上家富一族も多く手柄の者共にて候是を可有御賴候近國にて自是外には候はすと申て御前を罷立ぬ大番勤て候ける地頭御家人等の中に御志有者多かりけれは彼等に如前有御尋けれは廿四人迄如土屋そ申ける偖は子細有とて長高を賴みに被思召けり六條少將忠顯を召て奈和庄地頭村上又太郎長高を彌可有御賴由勅定有けれは去專候警固の武士とも申候しは長高か舍弟村上六郎行氏と申者適大番勤て是にさふらへは可被仰下候とそ申ける(○按此一條も鎌倉將軍の時のことなれと御醍醐帝隱岐國に遷幸ましまし〳〵し時の大番なり京師の大番にはあらす)

建武年間記云、大番條々(建武二三一)
一寺社一圓領事先々被免許之所々者今更不能駈催近年御寄附之地者任舊規可勤仕
一本所進止地幷領家預所職事於所務之地者雖地頭職平均可相觸至請所者不及充課就田數可支配事遠國三十町中國二十町近國十町別一人分面々可參勤當知行之地不足之輩者可沙汰渡課役於總領若無總領者可辨其郡催促之役人
一所領數个所相傳輩事懸命之所者自身可勤仕自餘所々者可進代官
一町別錢貨人夫傳馬事稱先例被懸百姓之條不可然向後以撫民之儀可爲領主之所役
一鎰直垂已下武具事各存儉約可止過差之儀所詮於直垂者蜀錦吳綾金紗金襴紅紫之類不可著用可爲布又金銀裝束太刀唐皮尻鞘同可停止之可用疎品
一番渡次第事云奉行人云役人等正員參役所可致嚴密之沙汰

和田文書大塚惟正狀云、吉野殿惣門大番役事兵衞次郎相共自來月一日至同五日可被勤仕候仍執達如件
十一月十八日　惟正花押
和田修理亮入道殿
(○按以上二條は建武中興已後の大番なり惟正は楠正成の一族にて南朝に仕へしものなり)

建內記云、嘉吉元年四月十二日、先日竊盜連々發禁中或亂入內侍所神殿或伺入臺盤所或欲入局邊(去六日頃云々)此事門々大番無警衞之所致歟可被申室町殿哉可爲何樣哉之由先日被仰談中山宰相中將者尤可然但門々番事者奉行人加下知事也先相尋彼卿申歟之由相公申之飯尾大和守歟肥前守歟云々相談之處忩可仰付門々向後無凌爾之儀者可爲簡要歟若猶有無沙汰者其時可被申歟之由被奉行人申由相公令奏聞云云尤可然事也六月廿四日己丑今夕有前代未聞珍事赤松彥次郎敎康依諸敵御退治嘉禮成申渡御未斜室町殿渡御彼宿所五獻之時分開御座後障子著甲冑武者數十人亂入之奉弑之云々所詮大事若出來歟無心元云々

於門々大番者嚴密可候之由仰付了 ○按此一條は武家のうけ給はりし大番にはあらす公家にての事なれと其稱も同しくつとむる筋も相似たるによりてこゝにをさむ

二判問合云大番役右何御代被始之又何比中絶候哉武家番役大略自鎌倉右大將如此事始歟 ○按この書に鎌倉右大將家の比より起れりといへるはわろしされと文明の頃は全く大番役の中絶せしことこれにて明なれはこゝに出せりこの書は文明十年二階堂政行の問によりて一條禪閤の答へられし事を記せるなり

大友興廢記云 杉繩親誅罰例條 同國筑後高崎は義鑑公の御城なり高山なる故に常は大番を籠おかるゝ

増補家忠日記云慶長元年松平右京亮康親ヲ大番頭ニ補セラル四年此年大神君ノ命ヲ奉テ 水野三左衞門尉分長 後備後守 ト大番頭トナル

板坂卜齋慶長記云慶長四年家康公九月七日大坂秀頼へ九月九日の禮にて御下候 中略 伏見に被爲置候人衆共召れ罷下候へと御意にて平岩主計頭を大將にして大番衆御家人不殘九日夜通し大坂へ急速罷下候

又云慶長五年七月廿一日江戸御立岩附へ渡御江戸御立鐵炮弓御乘物先へ法師武者四騎御前には廣袖の御道服御持筒御持弓あとはなしいつもの鑓貮本長刀一御跡小性衆百騎計其次に大番衆一組々々めん／＼の馬しるしに二行に組の馬上は跡に岩附へ渡御候而は上方よりの飛脚も狀も不來

慶長年錄云慶長十七年四月土岐山城守大番頭被仰付十八年七月廿一日松平忠左衞門大番頭被仰付

土屋知貞私記云慶長十九年大坂御陣之節權現樣御供衆大御番水野備後守松平石見守 西尾丹後守松平忠左衞門 後出雲守 寺社奉行 台德院樣御供大御番高木主水正 阿部備中守牧野豐前守渡部山城守

又云慶長十九年大坂御陣之節所々御番大御番二組松平丹後守 丹後守事雨御陣伏見御番 井伊掃部頭 掃部頭冬之御陣より佐和山人數を召連御先手江被遣

元和年錄云元和元年極月廿七日御僉議之上爲御褒美御加增拜領又討死之衆覺高木主水正組五百石組頭山田清太夫三百石組頭寛助兵衞

按大番の稱は何れの世よりとなへそめしにや由來たしかならすされと古き世よりいひしと見えて小右記に天元中中宮の大番侍といふを置れし事あり 小右記天元五年三月十一日の記に云今日以女御從四位上遵子立皇后云々今夜奉令旨以藤原詮子爲宣旨以藤原近子爲內侍以下官及右中辨朝道爲侍所別當大進輔成朝臣奉令旨男女房簡今夜始書下官右中辨侍所長藤原長忠同季弘等同着簡而以四人付籍頗有諱忌仍如阿波守任朝臣侍所長云々十五日丁未參中宮大夫同被參被定所々別當預下部等又定女房屎遠侍者大番侍者とあり下官と有は記者藤原實資の事にて此時皇后宮亮なる故に其事に預りしなりこの文によれは遠侍者大番侍者なとは輕からぬ番衆にて遠侍者は遠侍に宿直し大番侍者は諸門の警衞をつとめしものとみゆ其趣は遠侍者のつきに大番侍者を列せしにて推はかるへし これ大番といふ稱のもの

に見えたる始めなりこれは中宮の番衆なれは禁裏警衞の者にあらさるは勿論なれと元公家に其稱あるによりて中宮にも設られしものとみゆれは猶はやくより大番といふとなへはありしなるへし 古今著聞集に一條院御時御秘藏の鷹のいまた鳥を取得さるを粟田口十禪師の辻につなぎ置て人に見せられしことないへる所にたゝの直垂上下にあみ笠着たるのほりうと思よりなりて此鷹をみてあはれ逸物や上なきものなり但いまた鳥かはれぬ鷹なれは鳥をはよもとらしと云て過るもの有けり云々叡感甚しく所望何事かある申さんに從ふへき由仰下されけれは信濃國ひちの郡に屋敷田園なとをそ申請けるひちの檢校豐平とはこれか事なり大番役にのほりける時の事なりとありさて小右記にみゆる中宮の大番侍者を定められし天元五年より寛和二年一條帝即位まてはわつか五年なりされは天元の頃既にこの名ありしからは一條帝の頃には專此役ありしをしるへし 思ふに此番役は古の軍團のなかれなるへし凡諸國の軍團の兵士はくさ／＼の番役ある中に先京都守護の爲に上番して一年の間宿直をつとむるをは衞士といふ次に筑紫の鎭に赴くをは防人といへり又其國內にありても上番の役ありすへてこれを番役といふならひなり其中にも京師の上番は禁闕守護の爲なれはことに大事の番役なる意にて私には大番役といひけんかやかて常のとなへとなりておほやけにも大番衆とよはるゝことゝ成しなるへし 曾我物語相撲條に俣野はすまうの大番勤に都へのほり三年の間都にてすまうになれ一度もふかくをとらぬものなりとありこれも禁內の相撲節をつとむる爲なれは大はんとかけるなるへしされとこれは俗間のことはなれはうちまかせてしかいひてはたかへり さて鎌倉殿天下の兵權をとられ諸國の武士悉く御家人となりて大番役勤仕のことも武家より指揮せらるゝこととなりしかは諸國の守護各國の地頭御家人を催促して其役に從はしむるか常のならひとはなりぬ尤所領の多少に准して勤役の等差あり其中にさるへき權勢の人を以て頭人とし番役の輩を統領せしむこれを番頭と稱せりもと軍團の上番は一年を限とせしかいつの頃よりか三年の間上番することになれるを鎌倉殿六ヶ月に改定せられし由は承久記及北條記にみえたるかことし其後三ヶ月を限りとせしことは吾妻鏡に見えたりいつれも本文にひけりさて又鎌倉の府にも頼經將軍下向の後大番役を設けて諸國の武士京都と同しく番役をつとむることゝなりぬこれひとへに京師の風をまなひて置れしなるへし 鎌倉大番は別册に載たり伯耆卷には後醍醐帝隱岐國にをはせし時當國の番役をつとむる武士を大番とかきたり其頃はいつれにありても警衞宿直の者をは大番といひし成へし 建武一統の御代に新政を行なはれし時大番役篝屋守護等の事まて制度ありて施行せられしかといく程なく南北の爭ひ起りしかは南朝には吉野の行宮にさへ大番役を置れしかと北朝にては更に設らるゝことなかりしかは此番役はすなはち中絶せりたま／＼非常のことあるをりなとに門戶警衞の者を大番ととなへし事はありしとみゆされとこれは名のみにして古の大番役のたくひには

あらす後々諸家にも大番といへる番士の聞ゆるはもと鎌倉大番といふかありしよりの准據とみえたり尙彼條をも合せみるへし

○篝屋守護人

吾妻鏡云曆仁元年六月十九日壬戌爲洛中警衞出辻々可懸篝之由被定仍被充催役於御家人等云々

同島津家本云仁治元年十一月廿三日壬子爲清左衞尉奉行洛中未作篝屋等事有議定被省充其用途於御家人等而本新補地頭不敍用御下知者可被召所領之旨先日雖被載式目被召所領者就之所々訴訟無盡期歟仍可被召篝屋用途也假令五十町可召錢五貫文之由被定但地頭得分也不可成土民煩云々廿八日丁巳京都大番勤否事被經沙汰是有遲參不法輩之由依有其聞也假令一ヶ月令遲參者被召過怠用途千疋可被充未作篝屋料云々廿九日戊午洛中群盜蜂起之由依有風聞說篝屋守護者幷在地人等有懈緩御疑間今日於前武州御亭評定右馬權頭攝津前司佐渡前司秋田城介出羽前司太宰少貳加賀民部大夫等參入各意見雖區分所詮每篝辻置大鼓於事出來之時隨發其聲每在家令用意續松不經時剋可指出松明之由保官人可申沙汰於不相從下知之在家者可被處罪科於大鼓者可被充京幾御家人等云々以此趣可被仰遣六波羅云々二年九月十一日丙申洛中警衞事及嚴密沙汰可懸篝於辻々續松料物用途每年一所別千疋被付之於彼用途辨償者可停止關東公事等守護人部之由云々

葉黃記云寬元四年十月十三日戊戌自關東時賴使(安藤左衞門光成)上洛關東申次可爲相國之由是定云々可被行德政之由又申入院云々依故泰時朝臣之計此八九年洛中要害所々有守護終夜擧篝火間人高枕而皆停止云々不知是非(○按此時一度篝火を停止せられしかと猶儀ありて又さらに篝屋を置れしとみゆ)

太田康有記云建治三年十二月十九日御寄合(山內殿)相太守城務康有被召御前奥州被申六波羅政務條々(中略)一番役幷篝屋事奥州越後左近大夫將監兩人差代官可令奉行

沙汰未練書云篝屋トハ在京人役所也(○按此未練書は弘安元年に北條時宗の纂記せしなり)

竹林院左府記云弘安六年七月一日昨日東使御問答次第續左使者申詞前座主最源治山之間山門衆徒等奉振上神輿於中堂及大訴候罪科雖遁候乎神輿入洛之時不及防禦之沙汰剩及狼藉候之條併武家緩怠之故候歟京都之守護頗似無其詮候然者云六波羅云門々幷篝屋守護之武士不可遁其科候云々

增鏡云(けふの日かけ卷)このをとこをはあさはらのなにかしとかいひけりからくして夜のおとゝへたつねまゐりたれとも大かた人もなし中宮の御方のさふらひのおさかけまさといふ物名のりまはりていみしくたゝかひふせきけれはきすかうふりなとしてひしめくかゝる程に二條京極のかゝりやみこの守とかや五十餘騎にて馳參て時をつくるにあはすることはつかに聞えけれはこゝろやすくて內にまゐる御殿とものかうしひきかなくりて見たれ入にかなはしと思ひて夜のおとゝの御しとねの上にてあさはら自害しぬ太郞なりけるをのこは南殿の御帳の中にてしかはしぬをとの八郞といひて十九になりけるは大隱子のをんのしたにふしてよるものゝあしをきり〳〵しけれともさすかあまたしてからめむとすれはかなはて自害するとてもはらはたをはみなくりいたして手にそもたりけるそのまゝなからいつれをも六原へかきつゝけていたしける

太平記云(笠置囚人死罪流刑條)殿法印良忠ヲハ大炊御門油小路ノ篝小串五郞兵衞尉秀信召捕テ六波羅ヘ出シタリシカハ云々五條京極ノ篝加賀前司ニ預ケラレテ禁籠シ重テ關東ヘ被注進ケル

又云(楠出張天王寺條)隅田高橋ヲ南六波羅ノ軍奉行トシテ四十八ケ所ノ篝幷ニ在京人畿內近國ノ勢ヲ合テ天王寺ヘ被指向

又云(摩耶城合戰條)摩耶ノ城ヘ推寄テ赤松ヲ可退治トテ佐々木判官時信常陸前司時知ニ四十八ケ所ノ篝火在京人幷三井寺法師三百餘人ヲ相副テ以上五千餘騎ヲ摩耶ノ城ヘソ被向ケル(○按以上十條は鎌倉將軍家の時の篝屋守護なり)

建武年間記云口遊二保河原落書云々此比都ニハヤル物夜討强盜謀綸旨召人早馬虛騷動(中略)町コトニ立篝屋ハ荒涼五間板三枚幕引マハス役所鞆其數シラス滿々タリ

太平記云(山門牒送南都條)四國ノ勢ヲ阿彌陀カ峯ヘ差向テ夜々篝ヲソ燒セラレケル或夜東寺ノ軍勢トモ樓門ニ上テ是ヲミケルカアラヲヒタヽシ阿彌陀カ峯ノ篝ヤト申ケレハ高駿河守トリモ敢ス多ク共四十八ニハヨモ過シ阿彌陀カ峯ニトモス篝火ト一首ノ狂歌ニ取成シテ戲シケレハ滿座皆エツボニ入テソ笑ケル(○按これは全く篝屋武士の役せしにはあらされとも四十八といへる據あるは依てこゝにのす)

又云(高倉殿京都退去條)御前ニ有逢タル人々計ヲ召具シテ七月晦日ノ夜半計ニ篠峯越ニ落給騷カシカリシ有樣也是ヲ聞テ御內ノ者ハ不及申外樣ノ大名國々ノ守護四十八ケ所ノ篝三百餘人在京人畿內近國四國九州ヨリ此間上リ集リタル軍勢共我モ我モト跡ヲ追テ落行ケル

室町日記云（京都物忩條）一此節洛中洛外よとふしみこはた山崎八幡をはしめて往反のともからをとらへてはきとり荷物を追落し洛中へ夜ことに亂れ入て財寶をうはひ取事なゝめならさるに依て日暮かゝれは門戸をとちてかゝりたき番等きひしくしけれは人のゆきかひ自由ならす迷惑せしむるに依て檢斷所へ方々より訴訟申けれは所々に高札を擧られける一今度洛中洛外へ徒黨の者徘徊し追はき辻斬又は在家へ押込資財雜具をうはひとるの條甚以諸人の忩劇不レ過レ之所詮町中兼て手合を仕候てあやしき者共於レ有レ之者卽時に討留此方へ可レ被レ參候時之依二首尾一輕重は不レ知御褒美可レ有レ之者也　永祿五年八月三日貞親長高

〇按已上三條は建武以後の篝屋なり

按北條泰時執權たりし時京洛なる惡徒等の横行を鎭めんか爲に曆仁元年始めて京中の街衢に四十八ヶ所の篝屋を構へ京畿の武士京都警衞の役に從ふ輩に配當して非常を守らしむこれを篝屋守護人とも篝屋武士ともよへりさるは夜中をいましむる爲なれは終夜篝を燃て警衞をつとむる故にこの名ありしなり（古衞士の禁宮の警固を役せし時篝を燒しに同し）然に時賴執權の時にいたり寛元四年一たひこの事を停止せしかとかく靜謐なりかたかりしにや再ひこれを復せり京畿の武士各篝屋一所を預り其門族家人を率ひて守護を勤め非常の事あれは直に事に從へり建武一統の御世にもそれにも准して篝屋を四十八ヶ所に置れたり後醍醐帝吉野に移らせ給ひし後も足利殿なほ舊規にならひて篝屋をは設置れしかと全く京師に永住せらるに及ひて更にこの事を停止せられしとみえて鹿苑院殿の頃よりこなたには常には篝屋を設け置れし事見えされともことある時は街衢に篝をたきて警固せし事まれ〳〵にはありしとみゆされともそれは臨時の事にてさし定りたるにはあらさるへし

〇在京人（又稱在京武士）

八坂本平家物語云（ほうしやう寺かせん條）しやうの中にはをりふしふせいなりゑつ中の二郎ひやう衞かつさの五郎ひやうゑ惡七ひやうゑこれらをはしめとして二十よ人にはすきさりけり去程にさいきやうのふしともこれをきゝてはせむかふその邊なるせうけともをこほちよせ堀をはへいちにうめてけり

吾妻鏡云文治元年十二月一日庚戌前中將時實去夏雖レ含二配流宣下一不レ向二配所一今度同二意義經一赴二西海一之由風聞仍是彼早尋二取之一可レ召二預在京御家人一之由今日被レ仰二遣

北條殿一（去月廿五日入洛）四年十月十七日己卯叡岳惡僧中有二後章者一年來與二豫州一成二斷金契約一仍今度牢籠之間數日令レ隱二容之一又至下赴二奥州一之時上者相二率伴黨等一送二長途一歸洛之後企二謀叛一之由有二其聞一仍內々窺二彼左右一可レ召二進其身一之旨被レ仰二在京御家人等一

又云建久四年二月廿八日乙丑京都警衞勤厚御家人等者其賞可レ超二過關東近士一之趣被二仰下一云々

又云正治元年三月十二日甲辰姬君追レ日憔悴御依レ之爲レ奉レ加二療治一被レ召二針博士丹波時長一之處頻固辭敢不レ應レ仰今日被レ差二上專使一猶以令レ申レ障者可レ奏二達子細於仙洞一之旨被レ仰二在京御家人等一云々二年七月廿七日六波羅書狀等到來佐々木中務丞經高作レ爲二帝都警衞人數一奉レ輕二朝威一條々也是於二洛中一稱レ生二虜强盜人一以二其次一追二捕近隣民居等一加レ之令レ守二護淡路國一之間蔑二如國司命一妨二國務一之上去九日催二聚淡路阿波土佐等國軍勢一各著二甲冑一令二騷騷一依レ奉レ驚二天聽一被レ尋二問濫觴一之處爲レ敵欲レ被レ襲之由雖レ申レ之更無二實證一所行之企奇怪非レ一早可レ達二關東一之旨及二勅命一云々八月二日佐々木中務丞經高蒙二御氣色一淡路阿波土佐以上三ヶ國守護職以下所帶等被レ召二放之一以二其趣一所レ被レ申二京都一也

又云建保元年五月九日己酉爲二廣元朝臣奉行一被レ送二御教書於在京御家人之中一是在京武士不レ可レ參二向於關東一者令二靜謐一畢早可レ守二護院御所一又謀叛之輩廻二西海一之由有二其聞一可レ致二用意一之由旨被レ仰二佐々木左衞門尉廣綱一云々三年四月十八日丁未京御家人等洛中守護不法事殊有二其沙汰一就二忠否一可レ有二賞罰一之旨今日被レ遣二御書一云々

又云貞永元年十二月廿九日在京御家人者大番不レ能二勤仕一之由被レ定

侍所沙汰篇云就二天福元年八月十五日六波羅御注進一十七个條被レ加二關東押紙一內一大番衆令レ迯二失召人一事右召人出來之時令レ預二大番衆又在京輩一處令二迯失一畢然而其科怠輕重依下難二定申一候上于レ今不レ致二沙汰一候之間或强盜或殺害人大略十之七八令二迯失一候也爲二自今以後一尤可レ被二定下一候歟押紙云可レ令レ修二造淸水寺橋一也

新編式目追加云諸社神人等付二在京武士宿所一或振二神寶一或致二狼藉一事動有二其聞一事實者尤不便也於二理訴一者縱雖レ不二濫惡一何無二其沙汰一至二無道寄沙汰一者永存レ懲二傍輩一可レ被レ召二下帳本於關東一也存二此旨一可レ被レ申二沙汰一之狀如レ件延應元年四月十三日相摸守殿越後守殿前武藏守判修理

權大夫判

吾妻鏡云寛元元年十一月十日壬子在京御家人等大番役勤仕免否事有其沙汰縱令就西國所領下向其所於時指出者不可免唯不退在京奉公不退祗候六波羅者尤為奉公可免其役云々

石見文書云六波羅無人數之間所被差上人々也早為其內可令在京者依仰執達如件弘長二年三月十七日庄四郎入道殿　武藏守判　相模守判

北條記云建治元年四月十五日大元使著長門國室津浦八月件牒使五人被召下關東九月七日於龍口刎首其後警固事有沙汰鎮西撰補守護人器用發遣海邊國々止京都大番役被差置在京人皆是為軍旅用意也

太田康有記云建治三年十月廿五日御寄合山内殿相太守康有業連頼綱京都本所領家等被申兵粮料所并在京武士拜領所々可被返付之由事有御沙汰十二月十九日御寄合山内殿相太守城務康有被召御前奥州被申六波羅政務條々內裏守護事迄可有御計大樓宿直事當時者如前々兩人可致沙汰也追可有御計在京人等事背六波羅下知者可注申交名也廿七日評定早旦被召之間馳參之處山門事院宣只今到來云々評定云合戰事云根元云下手尋究實犯可召出其身且於張本者御使歸參之時可召具之於與黨者預在京人等可令配流也

新式目云弘安七五廿卅八ヶ條一在京人并四方發遣人之進物一向可被停止也其外人々進物可被止過分事一在京人并四方發遣人所領年貢可有御免事

光明寺殘篇云元弘元年十月□日先帝於六波羅南方評定衆以下在京人奉警固之

梅松論云去春より楠兵衛尉正成金剛山の城を圍み關東の大勢一戰も功をなさす利を失ふ所に將軍已に君に賴まれ奉り給て近日洛中へ攻入給ふよし金剛山へ聞えけれは諸人おとろき騷事斜ならすかゝるに付ても關東に忠を存する在京人并四國西國の輩彌思ひ切たる事の體誠に哀にそおほへし

太平記云頼員回忠條齋藤急キ六波羅へ參テ事ノ子細ヲ委ク告申ケレハ則時ヲカヘス鎌倉へ早馬ヲ立テ京中洛外ノ武士トモヲ六波羅へ召集テ先著到ヲソ付ラレケル其比攝津國葛葉ト云處ニ地下人代官ヲ背テ合戰ニ及事アリ彼本所ノ雜掌ヲ六波羅ノ沙汰トシテ莊家ニシスヘン為ニ四十八个所ノ篝并ニ在京人ヲ催サル丶由ヲ被披露是ハ謀叛ノ輩ヲ落サンカ為ノ謀也土岐モ多治見モ吾身ノ上トハ思モ寄ラス明日ハ葛葉へ向フヘキ用意シテ皆己カ宿所ニソ居タリケル○按土岐多治見何れも在京人なり

又云元弘三年三月十二日合戰條六波羅ノ北方左近將監仲時事ノ體ヲ見ルニ何樣洛外ニ馳向テ可防トテ兩檢斷隅田高橋ニ在京ノ武士二萬餘騎ヲ相副テ今在家作道西朱雀西八條邊へ被差向○按以上十七條は鎌倉將軍家の時の在京人なり

又云佐渡判官入道流刑條道譽聞之何ナル門主ニテモオハセヨ此比道譽カ內ノ者ニ向テ左樣ノ事翔ン者ハ覺ヌ物ヲト忿テ自ラ三百餘騎ノ勢ヲ率シ妙法院ノ御所へ押寄テ則火ヲソ懸タリケル中略夜中ノ事ナレハ時ノ聲京白河ニ響キ渡リツヽ兵火四方ニ吹覆在京ノ武士共コハ何事ソト遽騷テ上下ニ馳セ違フ事ノ由ヲ聞定テ后ニ馳歸ケル人每ニアナアサマシヤ前代未聞ノ惡行哉山門ノ嗷訴今ニ有ナント云ヌ人コソ無リケレ

又云高倉殿京都退去條御內ノ者ハ不及申外樣ノ大名國々ノ守護四十八个所ノ篝三百餘人在京人幾內近國四國九州ヨリ此間上リ集リタル軍勢共我モ〳〵ト跡ヲ追テ落行ケル○按以上二條は足利家の時の在京人なり

按在京人はもとより職掌の名にはあらす幾內關西すへて都に近き國々なる地頭御家人等の內京師に在住して警備の役に従ふものをよへる稱呼なりさて篝屋武士大番衆なと大かた同し品秩なれと各其差別ありておのつから一門の黨をなせるものなり此輩は大番役并鎌倉祗候をゆるされひたすらに在京して六波羅の指揮に従ひ非常のことある時役せらるゝを其つとめとせり但しはしは下國するものは番役をゆるされさるよしは吾妻鏡にみえたるか如し弘安に異賊警衛の為に西國の地頭御家人を西邊の番役にあてられし頃は在京人なとも大番役の代りをつとめしめし事あり初めは其國々の守護在京して其輩を指揮せしこともありしか兩六波羅を置れし後は幾內西邊のことは悉く六波羅の所置に任せられしかは在京人も其管する所となれりこの職掌鎌倉右大將家の時に始りて北條家滅亡するまて絕ることなかりしなりさて足利殿の世となりても篝屋武士と同しくはしめの程は在京人の稱ありしかと幕府を京都に定められし後は諸國の武士等在京するか常のならひとなりしかは其黨をわくる事はなくなりしなり但關八州及陸奥出羽は鎌倉公方家管領の所なれはこの國々に住居の輩は京都に祗候せしことなし

武家名目抄第四十七册

塙検校保己一編

職名部廿七上

○九州探題

帝王編年記云九州探題前上總介實政（越後守實時三男）建治元年十一月爲異賊征伐下向鎭西（十七歳）弘安六年九月八日任上總介同十月遷長門國警固（○按當時いまた九州探題の名ありしにはあらす異賊征伐の長官として下向せしなり本書にかく記せしは後の探題の職にあたれる故なれはなり）

鎭西要略云弘安八年十月十七日將軍家之書曰鎭西御家人等雖有所用而不可參向於鎌倉是爲令勤蒙古武備石垣築地以下課役也以遠江守爲時（又曰時定）奉行之（○按時定爲時は共に時氏の子にていつれも遠江守に任するよし尊卑分脈にみゆこゝに一人兩名のことくにかけるはよろしからす且鎭西に下りしは時定にして爲時にあらす此要略は古書にあらすといへともこゝの文は古文書によれる所なれは引用せり下に引たる二條これに准すへし）

島津文書云異賊防禦事鎭西地頭御家人幷本所一圓地輩從守護之催且令加警固用意且可抽防戰忠功之由先度被仰下畢而被定鎭西奉行人等之間若不從守護命之族出來歟如然之輩縱雖致合戰不可有其賞可被處不忠也早存此旨可令相觸薩摩國中之狀依仰執達如件弘安九年十二月卅日島津三郎左衛門尉殿相模守在判陸奥守在判（○按こゝに鎭西奉行人とあるは時定のことなといへるなり）

尊卑分脈云北條時定（遠江守）正應二於筑前國卒（○按時定卒して後永仁元年に兼時補せらるゝまての間は此職なかりしと見えたり）

帝王編年記云九州探題越後守兼時永仁元年三月七日下向同三年四月參關東

北條系圖云宗頼男兼時（越後守）行鎭西永仁三年九月八日卒卅二歳（○按兼時の父宗頼は異賊防禦の爲に長門に鎭して西國のことをもふされしものなり兼時も異賊警固の爲に弘安六年五月三日播州に下向し同七年十二月二日入洛して六波羅守護となりこゝに至て更に鎭西に下向せし由北條記に見えたり）

帝王編年記云九州探題兵庫頭時家（尾張守公時男）永仁元年七月廿四日下向同三年四月參關東

島津文書云爲異賊警固所下遣兼時時家於鎭西也防戰事加評定一味同心可運籌策且合戰之進退宜隨兼時之計次地頭御家人幷寺社領本所一圓地輩專背守護人之催促不一揆者可注申殊可有其沙汰之由可相觸薩摩國中之狀依仰執達如件正應六年（永仁元）三月廿一日島津下野三郎左衛門尉殿陸奥守在判相模守在判

太平記云（武家繁昌條）承久三年ニ始テ洛中ニ兩人ノ一族ヲ居テ兩六波羅ト號シテ西國ノ沙汰ヲトリ行セ京都ノ護衞ニ備ラル又永仁元年ヨリ鎭西ニ一人ノ探題ヲ下シ九州ノ成敗ヲ司シメ異賊襲來ノ守ヲ堅ス（○按永仁元年には兼時時家二人下向せしかと時家は佐職のさまにてありけるにやこゝには一人と記せり兼時軍務を專にせしことは前なる島津文書に合戰之進退宜隨兼時之計とあるにて知へし）

北條系圖云時定男定宗（修理亮）永仁三年八月十九日於鎭西卒（○按定宗はこの年兼時時家關東下向の後はしはらく鎭西の政務を攝せしなるへし編年記にもらしゝは在住の間久しからさる故なるへし）

帝王編年記云九州探題前上總介實政永仁四年亦遷鎭西（四十八）御家人等沙汰止注進可成敗之由被仰畢正安三年九月日出家上總介政顯（實政男）正安三年十一月二日鎭西奉行（三十三○按北條系圖に政顯任鎭西探題とありさるをこゝに奉行と記せるは六波羅の探題を奉行とも記せしに同し）

鎭西要略云正安元年七月將軍家書令曰探題上總介實政勉異賊防禁事幷可沙汰西國境論等之事云々

新式目云一西國境相論事以下弘安八年六月十一日被仰六波羅條々內於領家一人之所有地頭相論事者任舊儀可被沙汰次關東御一門御領與京都御領堺事可爲聖斷條不可違式目之文云々條々法事所被書遣也早守法可被成敗之狀被仰執達如件正安二七五上總前司殿陸奥守判相模守判

又云一西國堺相論之事任弘安八年御教書可致其沙汰且按所被寫下也一讓所領妻女事任式目可有其沙汰事一七十以後讓事不可有其難矣一肥後國臼間野道山次郎惟房與野依越前房愚信相論賄賂事任式目可令成敗矣一肥前國五島內盛島前住食垈謀書事有所職迄者可被改替無所職者可被罪科之由可申入公家之旨相觸六波羅矣一構不實致濫訴輩事右誣僞罪名不輕之處近年致濫惡之輩動企謀計爲世人不可誡然則訴訟之趣甚奸曲者可被沒收所領無所帶者可處流刑至郎從以下者可召禁其身但隨事之體可有輕重歟正安二七七

又云一牒使來者着時在所幷問答法事任先例可令斟酌矣異賊防禁條々以大藏五郎入道惠廣依田五郎左衛門尉行盛所仰遣也者依仰執達如件正安二年七月十日上總前司殿陸奥守判相模守判

又云條々一可被崇敬佛神事九州爲宗寺社破壞以下所遂檢見且可令注進損色之由所被仰使者也但於遠所者使者檢見爲難澁者可計沙汰一次香椎社造營事筑前國怡土庄爲料所可造營之由被宣下年記之處于今不終其功云々云未作之分限云當社之處土可爲注進一次肥前國沙上社事如高木伯耆彥六家定代申狀者當國段錢米被寄附之處或奉行人借用或領主米借間有名無實云々仍云借用云未進催嚴納之急速可令送之一城墎事次岩門幷寄附構城墎之條爲九州

官軍ニ可ㇾ得ニ其構ニ云々早爲ニ領主所之沙汰ニ可ㇾ致ニ其構ニ云々一寄ニ役所ニ致ニ自由合戰ニ事縱雖ニ拔群之忠ニ不ㇾ可ㇾ被ㇾ行ニ其賞ニ所詮隨ニ大將命ニ可ㇾ令ニ進退ニ由嚴密可ㇾ被ㇾ相ニ觸九州守護幷御家人以下輩ニ也一兵粮米事先々下行無ニ其儲ニ歟加ニ談議ニ可ㇾ令ニ沙汰進ニ一警固結番事爲ニ諸人煩勞基ニ之由有ニ其聞ニ仍同前一兵船事海上合戰更不ㇾ可ㇾ有ニ其利ニ歟同前一大隅日向兩國役所今津役濟事先度雖ㇾ除ㇾ之爲ニ要海ニ云々如ㇾ元警固一沽却地事於下不ㇾ載ニ國名守於證文ニ之地上者引ニ返本錢ニ可ㇾ令ㇾ進ニ退ニ地主ニ之

鎭西要略云嘉元元年探題遠江守隨時糺ニ異賊防禁之神祇ニ以有ニ奉幣之勅使ニ（○按隨時は政顯に代りて探題になれるなり）

尊卑分脈云北條定宗男隨時（遠江守）元亨元六廿三於ニ鎭西ニ卒
久時男種時（修理亮）元亨元下ニ向鎭西ニ

北條系圖云政顯男種時（英時とも云左近將監修理亮）九州下向元弘三年亡（○按種時實は武藏守久時の子にて政顯の子となれるなるへし）

太平記云（筑紫合戰條）京都鎌倉ハ已ニ高氏義貞ノ武功ニ依テ靜謐シヌ今ハ筑紫ヘ討手ヲ被ㇾ下テ九國ノ探題英時ヲ可ㇾ被ㇾ責トテ二條大納言師基卿ヲ大宰帥ニ被ㇾ成テ既ニ下シ奉ラントセラレケル云々

又云（長門探題降參條）長門ノ探題遠江守時直鳴渡ヨリ舟ヲ漕モトシテ九州ノ探題ト一所ニ成ント心ツクシヘソ赴キケル赤間ケ關ニ著テ九州ノ樣ヲ伺ヒ聞玉ヘハ筑紫ノ探題英時モ昨日早小貳大伴カ爲ニ被ㇾ亡テ九國二島悉公家ノタスケト成ヌト云ケレト云々

龍造寺記云元弘年中家親官軍ニ屬ス一族龍造寺左衞門次郎入道善智鑰尼行心坊增秀等探題平英時ヲ誅伐ス

太平記云（公家武家榮枯易地條）前代相模守ノ天下ヲ成敗セシ時諸國ノ守護大犯三箇條ノ檢斷ノ外綺ノ事無リシニ今ハ大小ノ事共ニ只守護ノ計ヒニテ一國ノ成敗雅意ニ任スレハ地頭御家人ヲ郎從ノ如クニ召仕ヒ寺社本所ノ所領ヲ兵粮料所トテ押ヘテ管領ス其權威只古ノ六波羅九州ノ探題ノ如シ（○按以上廿二條は鎌倉將軍家の探題なり）

武田系圖云信宗男信武孫六陸奧守伊豆守從四位下九州探題康永年中天龍寺供養隨兵（○按信武九州探題のこと太平記其他當時の書に見えされは疑はしけれとも一色道猷仁木義長等の前に兩國の政務をあつかりけんもはかりかたけれはしはらく本書のまゝを爰には引るなり）

阿蘇大宮司惟澄申狀云延元二年四月十九日一色少輔入道下國ノ時武重相共馳ニ向犬塚原ニ致ニ散々合戰ニ一色入道舍弟右馬助入道其外橘薩摩彌八國分十郎以下於ニ當手ニ討取畢（中略）延元三年十月賴尙率ニ數千騎ニ攻ニ來甲佐城ニ之時惟澄僅以ニ卅餘騎ニ懸ニ出城外ニ或討死或被ㇾ疵畢次押ニ寄郡浦ニ

討ニ取一色少輔入道代由井間三郎ニ其後又攻ニ落宮郷城ニ仁木右馬助義長代立田七郎甥立田十郎生ニ取之ニ其外數十人討取畢（○按是より先尊氏將軍西國へ沒落の時一色入道道猷仁木義長共に功あるを以て二人をして西國の成敗を司とらしめしと見ゆ是即探題の任にあたれるなり）

祇園執行日記云觀應元年十月十七日鎭西兵衞佐殿（直冬）被ㇾ擧ニ義兵ニ仍少貳大友與力之由飛脚內々到來云々就ㇾ之來廿五日將軍可ㇾ有ニ御發向ニ之由有ニ其沙汰ニ鎭西探題一色入道籠ニ于肥前國草野城ニ云々

菊池武朝申狀云與國以後者武光率ㇾ成ニ故大王入御ニ最初於ニ八代城ニ自ㇾ令ㇾ對ニ治一色入道道猷父子ニ之後申ニ沙汰大小彌策ニ令ㇾ服ニ大友少貳等於御方ニ廿餘年之陣鎭西一統之大功者也

太平記云（崇德院條）今年（延文三）ノ春筑紫ノ探題ニテ將軍ヨリ被ㇾ置タリケル一色左京大夫直氏舍弟修理大夫範光ハ菊地肥前守武光ニ打負テ京都ヘ被ㇾ上ケレハ少貳大友島津松浦阿蘇草野ニ至ルマテ皆宮方ニ順ヒ靡キ云々（○按直氏は道猷の男なり）

又云（九州探題下向條）筑紫ニハ少貳大友以下ノ將軍方ノ勢トモ菊池ニ追スヘラレテ已ニ又九州宮方ノ一統ニ成ヌト見エケレハ探題ヲ下シテ少貳大友ニ力ヲ合セテハ叶マシトテ尾張大夫入道ノ子息左京大夫氏經ヲ九州ノ探題ニ成テソ被ㇾ下ケル

今川記云了俊は範氏御早世の後心省の御跡繼として京都に祗候有ㇾ之寶篋院殿樣に昵近し康安貞治の頃侍所にて御座有し也鹿苑院殿の御時西國の御敵の蜂起せしかは九州の探題に了俊を被ニ仰付ニしに已に發向のとき遠江國の守護職を惜く思召けるにや管領細川殿へ（岩栖院）かくよみてつかはされけり何となく心に懸て思ふ哉濱名の橋の秋の夕暮と有りしかは御分國ゆめ〳〵相違不ㇾ可ㇾ有との御返事有とかや

阿蘇宮文書云鎭西大將事不ㇾ可ㇾ依ニ此御逝去ニ可ㇾ有ニ嚴密之沙汰ニ候其間有ニ堪忍ニ可ㇾ被ㇾ待ニ付彼下著ニ候不ㇾ可ㇾ有ニ等閑之儀ニ候恐々謹言十二月八日　謹上阿蘇大宮司殿右馬頭賴之（○按これは貞治六年義詮將軍薨せられし時の狀なり鎭西大將軍とは今川貞世の事にて卽了俊なり次條も亦同し）

又云鎭西大將軍先立被ㇾ仰訖既治定候間發向可ㇾ爲ニ近日ニ也且累年忠切異他候條尤所ㇾ令ニ感悅ニ也相構令ニ堪忍ニ可ㇾ被ㇾ相ニ待彼下著ニ之狀依ㇾ仰執達如ㇾ件應安元年十月廿八日阿蘇大宮司殿武藏守判

花營三代記云應安三年十月二日今川豫州禪門爲ニ鎭西下向ニ自ニ遠州ニ歸洛云々十一月廿六日大宰少貳冬資下ニ向鎭西ニ云々十二月十六日同伊豫入道下向云々

又云永和元年九月十四日、去八月廿六日午刻於二肥後國軍陣一太宰少貳冬資爲二探題今川伊豫入道一被レ誅之由使者到來

大内義弘退治記云九州一統トシテ御敵數萬騎中國ニ打越へき企アリ仍今川伊豫入道ヲ爲二探題一雖レ被二差遣一其勢僅ニ三百餘騎微力ニシテ不レ能レ令レ渡二海九州一然間致二合力一可レ發二向九州一之由蒙二上命一其十六歲ニシテ率二四千餘騎一探題相共渡二海九州一二十箇年ノ間此彼ニ宗徒ノ合戰トモ二十八箇度滅レ敵致二無二忠節一所二世知一也

今川了俊書札禮云公方の御沙汰としては或は隨二官位一或は年老次第なとにて被レ定候時は無二是非一候 中略 此間はれはれに向て書札の禮に進上恐惶とあそはし候無二勿體一候昔はむかし今は今にて候之間堅辭退申度候へ共但我等か事は既に九州の管領時分に候即將軍家の身を被レ分位に被レ居候之間式體は公方に向申候ての御札かと心得申候間辭退所なく候今も我々當職上表申候者自他等輩之儀たるへく候間相互に恐々謹言たるへく候今も京都にても大方の一方の引付の頭人に成ぬれは其かゝりの上衆達まして評定衆奉行人等皆々恐惶可レ書にて候間六波羅の頭人九州探題には恐惶の御札不レ可レ有二子細一候

難太平記云世人の申なるは了俊九州にはなるゝ事は人二人のたくみに落と云々大内入道探題の大望故と云々又は澁川を可レ爲二探題一ために勘解由小路方便云々 ○按勘解由小路とは斯波義將なり

大友系圖云親世修理大夫探題未補之間親世宜レ致二九州之成敗一之由有二鹿苑院義滿將軍之御判一竭二忠於將軍家一野戰攻城其威振二九州一 ○按これは了俊退職の後澁川滿頼未補の間の事なり

澁川系圖云滿頼右兵衞佐左近大夫將監九州探題兩度應永三年下向同三十二年上洛應永十三歲八月三日落髮滿頼男義俊左近大夫將監應永廿五年探題職同三十二年沒落

神明鏡云應永廿六年七月十五日九州探題澁河左京大夫滿範注進狀云蒙古高麗引合兵船五百餘艘對馬國ニ押寄彼島ヲ打取之處探題幷少貳以下兵共押寄及二散々合戰一之刻天地震動大風吹雷鳴神變種々中ニ女人御方ノ船ヨリ出多ノ敵船ヲ覆ス剩蒙古大將ノ弟ヲ虜ニスト少貳注進ス不思議ノ神變云々 ○按後崇光院御記に滿範を持範に作るともに澁川系圖に見ゆる所なし但滿頼をあやまれるにやたしかならす又按に一色氏に滿範ありて左京大夫は其家の例にて代々任せらるゝ官なれはもししはしかはと一色滿範其祖父範光の例にて探題に補せられしにやと思へと滿範は應永十六年に卒せし人なれは此時世にあるへきいはれなし又滿範の子義範をはしめは持範とも云しにやとおもへと若狹國守護職次第に義範か傳をのせたれと探題になりしことは見えす澁川系圖によれは滿頼義俊父子節度を司とりし間なりかたく疑ふへし

後崇光院御記云應永廿六年八月十三日抑異國襲來事去六日探題注進狀不虛被見記レ之畏言上抑六月廿日蒙古高麗一同に引合て軍勢五百餘艘對馬島に押寄彼島ヲ打取之間我等大宰少貳か勢計にて時日をうつさす浦々泊々の舟著にて日夜之間合戰を致之間敵味方死する者其數を知らす既難儀の間九箇國の軍勢を相催同廿六日各手をくたき安否之合戰を致之間異國の軍兵三千七百餘人討取打弃其外數をしらす 中略 如レ此急速に落居併神明の威力に仍也上様御運も殊目出畏入候委細猶略して注進狀如レ件七月十五日探題持範判

澁川系圖云滿頼弟滿行滿行男滿直中務大輔武藏守正長元年探題永享六年正月廿日於二肥前神崎一爲二少貳一討死滿直男敎直右衞門佐永享六年十月十六日年十三探題御敎書下文明十一年於二綾部一卒敎直男萬壽丸文明十一年六月一日家相續長享元年十二月於二岩門龜尾城一郎等足助森戸齋藤害レ之萬壽丸弟尹繁右兵衞佐探題明應九年八月十二日任之 ○按敎直傳に永享已下書下りいたるまて九字を脫せり今異本によりて補ふ

蜷川親元記云文明十年九月三日辛酉大内殿狀 六月八日日附 到來九州探題澁川右衞門佐殿 敎直 舊冬大内下國之時御奉書御請文 三月十八日日附 被レ執二進之一十五年五月廿六日戊午大内殿より貴殿へ太刀 金 貳千疋被レ進レ之九州探題合力御下知早々申御沙汰之御禮也對二少貳一合戰儀也

澁川家譜云鎭西探題職事所二補任一也彌任二先例一可レ致二沙汰一之狀如レ件明應九年八月十二日澁川右兵衞佐殿判 義尹將軍

又云義滿將軍之御代澁河滿頼に九州探題職始而被二仰付一應永三年に筑前國に罷下滿頼ヨリ尹繁迄五代は九州之致レ押天文二年ニ筑紫殿謀叛ニヨリ致二合戰一一門大略討死仕候其砌森戸板倉右二人之家老共某親堯顯ヲ相扶ケ筑前ヲ遁出有馬殿ヲ賴申肥前國藤津郡ニ致二牢人一其後天正三年龍造寺隆信之代罷來手ニ付申于レ今存命罷在候事 ○按堯顯は尹繁の男なり

大舘常興記云天文十年十一月七日佐方より承候九州たんたい澁川殿 今迄之名乘貞基 御禮被二申上一候御太刀御馬靑銅二千疋進二上之一次御字義事官途 左兵衞督 事被レ申レ之次肥前國人々御敵同意御下知事次諸寺出世事條々伊勢守方へ申狀也 八月十五日日附也 何茂大内左京兆より副狀 八月廿四日日附也 有レ之仍各被二尋下一間御字幷官途事何も無二別義一存候御敵同意御下知事は以二證狀一重而可レ有二言上一次諸寺出世事是又以二證跡一可レ有二書上一之由可レ被二仰下一哉之由各存分也廿九日日行事 豆州 より各へ御折紙在レ之如レ此也九州澁川殿御内書幷御太刀等可レ被レ下哉否段左京大夫殿御局文仁如レ此被二仰出一候各

存分可レ有二御申一候御太刀被レ遣可レ然候哉御内書之事何茂一途被レ申可レ爲二專一一候恐々謹言十一月廿九日御内談御衆中日行事高久判　九州澁川殿へ御内書幷御太刀等可レ被下候哉否之段被二仰聞一候畏存候　一廉有之樣大内都督執被レ申候儀與二尤可一レ然存候但ケ樣之御事は大舘與州御存分肝要存候元造伊勢守被レ申趣無二餘義一存候自餘に相替仁體候かた〳〵以伊勢被レ申旨にまかせられ可レ然奉レ存候尤同前に存候晴光常興　○按澁川尹繁天文の初沒落の後大内義隆澁川の一族を迎立して九州探題と稱せり本文にいはゆる澁川殿はこれなりされと澁川の家衰弊せしことなれは治術なほとこすへき勢もなく遂には大内氏ひとり兩國に跋扈せしとみえたり

大友興廢記云　大友三姓條　九州探題職人數之事一色左京大夫直氏今川伊豫守貞世大友修理大夫義右澁川右兵衞佐滿頼澁川左近大夫義俊　大夫備前守　親治大友修理大夫義鑑　義鎭公之御父

○按義右宜しく親世に作るへし親世は貞世と滿頼との間しはらく九州の成敗なつかさとりしことあり故にこゝにつらねしなり義右は明應頃の人にて時代遙に後れたり但親世も實の探題にはあらす探題未補の間しはしかほと九州の事を沙汰せしのみなり又親治義鑑の探題になりしといふことは系圖にみえすこれをよろしとすへし當時澁川氏なほ在職のほとなれは別に此職を置ろへきいはれなし但大友氏は代々鎭西奉行の家なれは澁川氏沒落の後彼家にては探題なと僭稱せしことはありしならんかいつれにも正しき探題にはあらさるなり

大友記云　大友給九州之探題職條　能直ヨリ九代ノ後胤修理權大夫源親世ヨリ以來九州ノ探題ニ備リタマフ彼親世ト申奉ルハナラヒナキ仁義ノ名將ニテオハシケル御世ツキタマヒ肥後國菊地ト對陣事七十一度中略菊地ウタレシカハ豐筑肥六箇國事故ナク御手ニ入九國二島親世御旗下ニソナリニケル世シツマリ官位ノタメ上洛マシマシ奏聞シタマヒケレハ御門叡覽アリテ九州ノ探題タル院宣ヲナシ下サレ其ヨリ以來筑紫ノ探題ニ備リ給ヒケリ　○按本文大かた矯飾にしてことことく信受すへからす且前にも云しことく親世全く探題となりしことなし本書大友氏を褒揚せることかくのことし姑く引用して博覽に備ふ下二條是に准すへし

又云　義鎭公成立條　其後事故ナク義鎭公大友十八代目ノ探題トアフカレタマフ若クマシマセトモ御仕置宜クシテ豐筑肥六箇國ノ上下萬民トモニ此君ヲ渇仰スル事不レ斜

又云　石松源五郎立花城に被參條　其比天下ニハ前ノ羽柴筑前守秀吉關白職ヲタマハリ四海治レト威ヲフルマヒ給フ是ニヨッテ宗麟公御上洛ナサレ秀吉公ニ御目見ナサレ抑大友ハ代々九州ノ探題職ニテ候ニ此八九年カ間龍造寺秋月等ソレカシヲ背キ己カホシイマヽニ所領ヲ妨ケ候云々

按九州探題は異賊防禦のために鎭西に下向して警固せしつかさなりしかるに後に至りては二島九國の機務すへてあつかりきく事となりぬ其職名の起源を考るに太平記に永仁元年より鎭西に一人の探題を下し九州の成敗を司とらしむと見え又帝王編年記に九州探題越後守兼時永仁元年下向とあれは當時より此職を置れしと見えたり　探題の文字釋家より出たる事はすてに六波羅探題の條にのへたり　其後探題北條英時に至り元弘の亂に官軍の爲に亡されし後一色仁木等を以て其任とせしかと菊地武光と戰ひ敗走せしにより又尾張左京大夫氏經を九州の探題となして下され相繼て今川澁川なと此職を司とれり其後大友代々探題と唱けれともこれは鎭西の奉行たるにより自稱せしにて其職は實に澁川にて廢せるなり龍造寺秋月等大友の所領を妨しより其名目も絕たるなり

○鎭西奉行　又稱鎭西守護

鎭西要略云文治元年八月參河守範頼辭二鎭西一頼朝卿以二土肥二郎實平一令レ兼二行鎭西之事一　○按實平鎭西に下りしは平家追討の後九國の成敗として下向せしなれと鎭西奉行の職にあたれるか故に引るなり當時いまた鎭西奉行といえる名目ありしにはあらさるなり

吾妻鏡云　文治元年九月廿一日辛丑　參河守範頼使者參着既出二鎭西一在二途中一今日相構可二入洛一八月中可二參洛一之由雖レ蒙二嚴命一依二風波難一遲留恐思云々十月廿日己巳御堂供養導師本覺院僧正坊公顯下着所レ相二具廿口龍馬一也參河守範頼朝臣相伴參着云々彼朝臣今夜卽參二二品御所一申二日來事一去月廿七日自二西海一入洛二年十二月十日　癸未今日藤原遠景爲二鎭西九國奉行人一又給二所々地頭職等一三年九月廿二日庚申所衆信房　號二宇都宮所一　爲二御使一下二向鎭西一是天野藤内遠景相共可レ追二討貴海島一之旨依レ含二嚴命一也件島者古來無二飛船帆一之者云々今度同二意豫州一之輩隱居歟之由依レ有二御疑貽一有二此儀一又去年河邊平太通綱到二件島一之由聞食之間殊所二思召企給一云々遠景元來在二鎭西一云々、十一月五日壬寅鎭西守護人天野藤内遠景申云浴二恩澤一當所住人等事任二御下文旨一去八月十八日加二施行一畢四年二月廿一日丁亥天野藤内遠景去月狀昨日自二鎭西一參著去年窮冬令二郎等渡二貴賀井島一窺二形勢一訖令二追捕一之條定不レ可レ有二子細一但雖レ相二催鎭西御家人等一不二一揆一之間頗以無勢重可レ被レ下二御敎書一云々五月十七日壬子遠景已下御使等渡二貴賀井島一遂二合戰一彼所々已皈降之由所二言上一也而宇都宮所衆信房殊施二勳功一云々

又云建久二年正月十五日甲子被レ行二政所吉書始一中略　鎭西奉行人内舍人藤原朝臣遠景　號二天野藤内一左兵衞尉

古今著聞集云　武勇部　右大將高麗國を責し時の追討使にあまの式部大夫遠景向けり大將家のきり物にて西國九國を知行之間其威いかめし高麗國うちしなへて上洛の時渡部にて番か妹にとつきにけり　○按こゝに高麗國といへるは卽貴賀井島のことなり

武藏系圖云資頼筑後守法名覺佛建久二年ニ被レ充二賜太宰府守護一岩門少卿種直跡三千七百町拜領了　喜祿元年ニ宇佐八幡宮ノ依二遷宮一任二大宰少貳一始ハ武藤小次郎ト號畢

尊卑分脈云武藤資頼少卿筑前守鎮西守護法名覺佛

百錬抄云安貞元年七月廿一日於關白直廬有議定事左大臣以下參入去年對馬國惡徒等向高麗國全羅州奪取人物侵陵住民可報由緒之由牒送太宰少貳資頼不經上奏於高麗國使前捕惡徒九十人斬首偸送返牒云々我朝之恥也牒狀無禮云々

吾妻鏡云貞永元年八月十三日筑後前司資頼入道法名是佛辭鎮西奉行事彼狀去比到著今日有其沙汰以石見左衞門尉資能被補其替云々○按資能は資頼の男なり

大友系圖云能直豐前守建久四年賜豐前豐後守護同七年六月十一日豐後下向貞應二年鎮西奉行ト成十二月二十七日於大野郡藤北死去○按能直鎮西奉行となりて資頼と同時に此職を攝せしこと吾妻鏡に記せられは疑なきにあらされとも其子孫は遂に鎮西奉行となりて少貳と同しく九國の政務をつかさとりしなれは能直もやゝ政務にあつかりしことありけんもはかり難けれは家說のまゝをこゝに引たるなり

又云能直男親秀大炊介號出雲路鎮西奉行親秀男頼泰初名泰忠北條時頼賜一字姓改平氏兵庫頭出羽丹後等守鎮西奉行

尊卑分脈云大友能直使豐前守鎮西奉行能直男親秀大炊助鎮西奉行親秀男頼泰兵庫頭出羽丹後守鎮西奉行

吾妻鏡云寛元二年二月十六日丁亥今日有評定條々被定其法一西國守護奉行等於鎮西者任大將家例可致沙汰必不可依式目其外西國者任被定置旨可致沙汰之由可被仰遣六波羅

東寺文書云明年三月比可被征伐異國也梶取水主等鎮西若令不足者可省充山陰山陽南海道之由被仰太宰少貳經資了仰安藝國海邊知行之地頭御家人本所一圓地等兼日催儲梶取水手等經資令相觸者守被配分之員數早速可令送遣博多也者依仰執達如件建治元年十二月八日武田五郎次郎相模守在判武藏守在判○按經資は資能の子にて資頼の孫なり

貞永式目追加云鎮西爲宗神領事甲乙人等稱沽却質券之地猥管領之由有其聞尋明子細如舊爲被返付所差遣明石民部大夫行宗長田左衞門尉敎經兵庫之助三郎政行也大友兵庫頭頼泰法師越前守盛宗太宰少貳經資法師可爲合奉行或帶康元前後之下知或雖經知行年序爲沽却質券之地之條無異儀者可沙汰付之云云○按盛宗はしめは秋田城次郎と稱す蒙古襲來の事に依て鎮西に下向し肥後國の守護となりて警衞をつとめし人なり

尊卑分脈云藤原泰盛秋田城介陸奥守弘安八年十一十七被誅泰盛男盛宗越前守於鎮西同時被誅

新編式目追加云六波羅幷鎮西守護人註進狀事訴人雖不參向隨到來早速可申沙汰

又云鎮西神領幷名主等所領事弘安九如日來無相違各可領縱雖有御使下知先如元可令沙汰付但非分押領儀濫妨事者各寄合尋明可令注進之由可被仰少貳入道兵庫入道薩摩入道河內權守入道等○按少貳入道は經資兵庫入道は大友頼泰河內權守は澁谷重郷なり薩摩入道はいまた考得されとも大かたは日向の伊東氏なるへし

又云鎮西輩訴訟事弘安九七十六守護人可令尋沙汰之由先日被仰畢然於地頭御家人等寺社別當神主供僧神官所々名主庄官以下企參訴云々於自今已後者非別仰之闕文

大友系圖云頼泰男親時或親官因幡守鎮西奉行親時男貞親出羽守鎮西奉行弘安四年蒙古人襲來時司軍令抽戰功貞親弟貞宗近江守鎮西奉行元弘建武兵亂之時從尊氏將軍勵武功爾來子孫相傳於九州以當家爲隨一

志賀文書云當年麥地子事去年十一月十七日關東御敎書幷今年三月廿九日鎮西御施行案文如此早任被仰下之旨不可被充課士民候仍執達如件元亨二年四月一日三奈木志賀次郎殿大宰少貳花押○按こゝの少貳は貞經の事にて經資の孫盛經の子なり

阿蘇宮文書云肥後國凶徒退治如去正月八日太宰少貳注進狀忩重猶致軍忠云々尤以神妙彌可勵忠節之狀如件貞和三年三月九日阿蘇前大宮司殿判尊氏○按こゝなる少貳は貞經の子頼尙なり

野上文書云屬太宰少貳直資手致忠節之條尤神妙也彌可抽戰功之狀如件觀應二年七月十八日野上次郎三郎殿花押尊氏○按直資は頼尙の子なり

按鎮西奉行は九國の成敗を司とる奉行にして鎮西守護とも稱せり此職鎌倉殿の頃命せられしより少貳大友の兩氏代々此事をつかさとれり或は他家にも命せられて少貳大友と共にあつかり聞しことも見ゆれとそれは臨時の所職にて定まりたる事にはあらすしかるに弘安のはしめ北條家の一族のうちを鎮西にくたし又永仁の頃一人の探題を九州におかれ足利殿の時に至りても一色仁木等を其任となされしより九國の成敗はすへて探題の預りきくこととなりぬ終に鎮西奉行の職をは設け置れぬことゝなれるさまなり九國の事探題のすへて預りきく事と成り後も奉行とは稱へされとも鎮西の事はしはらくか程は少貳家にて尙預り聞しと見えたりさて九州探題澁川尹繁のときにいたり家おとろへしよりこのかた又大友家鎮西奉行の家なりし故に威を九國に振ひ自稱して探題といひしよりいよ〳〵鎮西奉行の號は絕しなり

○鎮西評定衆

○鎮西引付衆

大友系圖云貞直太郎左衞門尉元弘三年四月四日逝去鎌倉殿御敎書云越後九郎豐前前司武藤盛氏澁谷河內權守重郷伊勢

民部大夫戸次太郎左衞門尉可爲鎭西評定衆者依仰執達如件永仁七年正月廿七日相模守貞時判

新式目云條々一召文事止問狀御使催促共可爲三ヶ度事一召文事停止國雜色可被仰當國守護幷近隣地頭御家人等事一於引付可有御下知取捨事一評定事書頭付幷縫目封事當日可令申沙汰事一急事外於引付座不可書御敎書以下事一自評定被勸返沙汰事不日加談儀後日覆勘申事一頭人幷開闔仁退座沙汰事可渡他方引付事一諸人代官除退座方分限可令停止事一對問時一方人數兩三堅可禁制事一京下幷無足訴人及經年序沙汰急速可申沙汰事一淸書仁令書上御下知者頭人封裏直可下訴人事條々法事可被書遣事早守此旨可被成敗之狀依仰執達如件正安二年七月五日上總前司殿陸奥守判相模守判

又云評定衆殊可致忠勤之所多以下參云々甚無其謂於如然輩嚴密可致注進之狀依仰執達如件正安二七七上總前司殿陸奥守判相模守判

按鎭西の評定衆引付衆は永仁中に始めて置れし所なり前にもいへることく鎭西探題はもとは全く異賊防禦の長官なりしか兼時以後には九州二島の機務すへて預りきくことゝなりしゆゑ御家人等の訴訟裁判の事よりはしめて土貢以下のつとめ悉くこゝにて沙汰すへき由に定められしかは鎭西なる御家人の内さるへき名家の輩をもて此兩衆を設置き博多の府に在勤せしめて職務をたすけられしなり其つかさとる所は六波羅の兩衆に准してしるへし北條家亡ひし後も足利家にては九州探題をは置れたれと此兩衆をは設けられさりしなり

○鎭西警固番

島津文書云蒙古人可襲來之由有其聞之間所下遣御家人等於鎭西也早速差下器用代官於薩摩國阿多北方相伴守護人且令致異國之防禦且可鎭領內之惡黨者依仰執達如件文永八年九月十三日阿多北方地頭殿相模守在判左京權大夫在判

野上文書云肥前筑前兩國要害警固事幷豐後國中惡黨沙汰事今年三月廿五日守護所御書下如此子細被載狀候早且守狀且無左右不可棄件要害役所給候仍爲其沙汰景泰令下向候也恐々謹言文永九年卯月廿三日野上太郎殿(資直)藤原景泰花押

北條記云建治元年四月十五日大元使著長門國室津浦八月件牒使五人被召下關東九月七日於龍口刎首其後警固事有沙汰鎭西撰補守護人器用發遣海邊國々止京都大番役云々皆是爲軍旅用意也

志賀文書云大友殿御下知案蒙古人用心番就惣名志賀太郎可被勤仕由事可存其旨候仍執達如件文永十二年五月十二日前出前守

島津文書云箱崎役所築地事滿家院內比志島西俣河田前田以上四ヶ名分伍丈壹尺肆寸被勤仕候了仍之狀如件建治三年正月廿七日比志島太郎殿久時(○按久時は島津氏なり)

鎭西要略云弘安三年九月十二日少貳經資在判牒曰異國警固石築地袖濱內貳丈五尺被築終之條承畢又曰異國警固博多番役事自八月廿七日至九月十二日被勤仕畢六年五月十一日肥前國住人岸川次郎兵衞平野左近入道定樂三郎左衞門入道多久彌太郎島田三郎笠寺三郎入道等依有肥前執行於保四郎種宗之下知不相勤博多警固石垣築地以下之役今日於奉行所遣列糺明之及嚴重沙汰云々

野上文書云條々一賊船事難令退散任自由不可有上洛遠行若有殊急用者申子細可被隨左右矣一異國降人等事各令預置給分沙汰未斷之間津泊往來船不謂晝夜不論大小每度加檢見如然之輩輙浮海上不可出國云海人漁船云陸地分內可有其用意矣一從他國始來入異國人等事可加制止矣一要害修固幷番役事如日來無懈怠可致勤仕候矣條々及緩怠之儀者定後悔候歟仍執達如件弘安四年九月十六日野上太郎殿左近將監花押

島津文書云箱崎警固番役事自今年正月一日至四月晦日以代官被勤仕候畢仍執達如件弘安八年五月一日滿家院比志島入道殿忠宗在判

又云異賊防禦事鎭西地頭御家人幷本所一圓地輩從守護之催且令加警固用意且可抽防戰忠功之由先度被仰下畢而被定鎭西奉行人等之間若不從守護之命之族出來歟如然之輩縱雖致合戰不可有其賞可被處不忠也早存此旨可令相觸薩摩國中之狀依仰執達如件弘安九年十二月卅日島津三郎左衞門尉殿陸奥守在判相模守在判

龍造寺記云弘安年中ニ蒙古來襲ス龍造寺季時壹岐島瀬戸浦ニ於テ合戰有功家益季友相共ニ勤博多警固番(○按家益季友は季時の弟なり)

鎭西要略云永仁二年探題兼時令九州諸士代番勉博多警衞蓋是由異賊鎭全武備故也

新式目云條々法事所レ被二書遣一也早守レ法可レ被二成敗一之狀依レ仰執達如レ件正安二七五上總前司殿陸奧守判相模守判

條々一城郭事岩門幷宰府構二城郭一之條爲二九州官軍一可レ得二其構一云々早爲二領主所之沙汰一可レ致二其構一云々一寄二役所一致二自由合戰一縱二拔群之忠一不レ可レ被レ行二其賞一所詮隨二大將命一可レ令二進退一由嚴密可レ被レ相二觸九州守護幷御家人以下輩一也一兵粮米事先々下行無二其虛一歟殊加二談儀一可レ令二注進一一警固詰番事爲二諸人苦勞基一之由有二其聞一仍同前一兵船事海上合戰更不レ可レ有二其利一歟同前一大隅日向兩國役所今津役沒事先度雖レ除レ之爲二要海一云々如レ元警固

志賀文書云讓與相傳所領豐後國大野庄志賀村南方在家田畠等幷勳功賞事中略右件所領等者所レ讓二與末子袈裟鶴丸一也於二次第證文等一者依レ爲二類驗一所レ副二渡嫡子貞朝一也公家關東御公事番役以下合戰事可レ付二總領之手一不レ可レ有二別族一蒙二勳功一之時者當二配分一可レ令二知行一不レ可レ背二嫡子之命一中略仍讓狀如レ件正安三年十二月廿日沙彌阿法在判

又云ゆつりわたすせんくま丸かところふんこのくになはかりからのうちにしたはんふん大くまのむら付くほたのむら事やうしとしてゆつりあたふるところ也關東御くうしい公事けいこくけいこの事嫡家大友まこ太郎さたむねかめいにしたかひてきんしすへきやう如レ件延慶三年六月五日貞親花押

鎭西要略云應永十九年十一月探題道鎭上洛筑前肥前近邦諸士勉二博多留守番一探題之一族滿秦爲二留守一

按文永に蒙古のうれへ起りしより九州二島はもとより西偏緣海の諸國なる地頭御家人は京都の大番役をとゝめられて邊要の地を警衞する事となりぬこれいはゆる警固番なり中にも博多の津は探題鎭衞の府なるか故に箱崎に役所を構へ西州の諸士詰番してむねと此所の警備をつとめたり其筑前の今津又肥前日向大隅等の國にも邊要の津々泊々には警固の番役を置れしなり蒙古既に滅して窺窬の患なかりければにや足利殿よりしては九州探題をは置れたれと更に博多の番役をは置れすなりされとも探題在落の時なとは近國の御家人等をして博多の留守番を勤めしめ非常に備へられし事はありしと見ゆ

〇長門探題又稱中國探題

長門國守護職次第云相模修理亮殿宗頼 建治二年正月十一日當國下著御代官太郎殿茂綱

一代要記云弘安二年六月十日鎭西守護修理亮宗頼死去之由飛脚到來

長門國守護職次第云越後守殿兼時 弘安三六五御代官長井出羽太郎其後岡田次郎左衞門入道淨蓮

北條記云兼時弘安五年十一月五日任二修理亮一同六年五月三日爲二異賊警固一下二向播州一同七年十二月二日入洛爲二六波羅守護一〇按兼時は弘安四年に長門探題を去て師時其代に補せられたりされと此文による時は倘異賊警衞の事によりて中國邊のことをうけ給はりしとみゆ

長門國守護職次第云武藏守殿師時 御代官駿河三郎殿弘安四閏七晦日下國又代官平內左衞門尉

又云萬壽殿武藏守殿御子息後武藏十郎申 御代官嵐野五郎左衞門家盛弘安五八廿四著府

帝王編年記云上總介實政 建治元年十一月爲二異賊征伐一下二向鎭西一弘安六年九月八日任二上總介一同十月遷二長門國警固一永仁四年又遷二鎭西一〇按實政は長門にありし間も鎭西の事を掠せしこと新式目にみゆ其文は九州探題の所に引たり

長門國守護職次第云上總介實政 弘安七正十七下國守護代平岡三郎左衞門尉爲時

又云左京權大夫殿時村 御代官左近將監永仁六八十一著任近江守又尾張守守護代吉良殿又小笠原入道蓮念下國

又云上野殿守護代橫溝小三郎濟村〇按上野殿とは北條時直の事なり

異本伯耆卷云四國ニハ河野一族土居二郎得能彌三郎味方ニ成リ河野ヲ背テ旗ヲ擧ケレハ河野ハ在京候間中國探題北條時直小島ヨリ押渡合戰シ悉打負行方ヲ不レ知落行ケレハ四國皆土居ニ付

太平記云河野謀叛條 後二月四日正慶二伊豫國ヨリ早馬ヲ立テ土居二郎得能彌三郎宮方ニ成テ旗ヲアケ土佐國ヘ打越處ニ去月十二日長門ノ探題上野介時直當國ヘ推渡リ星岡ニシテ合戰ヲ致ス處ニ長門周防ノ勢一戰ニ打負テ手負死人其數ヲ不レ知剩時直父子行方ヲ不レ知云々御用心有ヘシトソ告タリケル

又云長門探題降參條 長門ノ探題遠江守時直京都ノ合戰難儀ノ由ヲ聞テ六波羅ニ力ヲ戮セントテ大船百餘艘ニ取乘テ海上ヲ上リケルカ阿波ノ鳴渡ニテ京モ鎌倉モ早皆源氏ノ爲ニ被レ滅テ天下悉王化ニ順ヌト聞エケレハ鳴渡ヨリ船ヲ漕モトシテ九州ノ探題ト一所ニ成ントテ心ツクシヘソ赴キケル赤間カ關ニ著テ九州ノ樣ヲ伺ヒ聞玉ヘハ筑紫ノ探題英時モ早少貳大友カ爲ニ被レ亡テ九國二島悉公家ノタスケト成ヌト云ケレハ此マテ屬順タル兵共モ心替シテ落行ケル間時直五十餘人ニ成テ柳浦ノ浪ニ漂泊ス彼浦ニ帆ヲ下サ

ントスレハ敵鏃ヲ支テ待懸タリ且ク命ヲ延ン爲ニ郎等ヲ一人舟ヨリアケテ少貳島津カ許ヘ降人ニ可レ成由ヲソ傳ヘケル（中略）不日ニ飛脚ヲ以テ此由ヲ奏聞アリケレハ則勅免有テ懸命ノ地ヲソ安堵セラレケル（○按以上十三條は鎌倉殿の時の探題なり）

園太暦云貞和五年四月十一日傳聞右兵衛佐直冬今日進發向二長門國一於二彼國一可レ成二敗八ケ國事一之由風聞

長門國守護職次第云兵衛佐殿（直冬）御代官仁科左近大夫將監

守護代柳田太郎左衛門（○按守護代は長門一國の代をいへるなり御代官といふは中國諸州の代官なり上にいへる代官もみな同し）

太平記云（直冬西國下向條）西國靜謐ノ爲トテ將軍ノ嫡男宮内大輔直冬ヲ備前國ヘ下サル抑此直冬ト申ハ古ヘ將軍ノ忍テ一夜通ヒ給タリシ越前ノ局ト申女房ノ腹ニ出來タリシ人トテ始メハ武藏國東勝寺ノ喝食ナリシヲ男ニ成テ京ヘ上セ奉シ人也紀伊國ノ宮方共蜂起シテ事及二難儀一ケル時將軍始テ父子ノ號ヲ被レ許右兵衛佐ニ補任シテ此直冬ヲ討手ノ大將ニソ被二差遣一ケル紀州暫靜謐ノ體ニテ直冬皈參セラレシヨリ後ハヤ人々是ヲ重シ奉ル義モ出來レリ而ヲ今左兵衛督ノ計ヒトシテ西國ノ探題ニナシ給ヒケレハ早晩シカ人皆皈服シ奉リテ付順ノ者多カリケル備後ノ鞆ニ座シ給テ中國ノ成敗ヲ司トルニ有レ忠者ハ望サルニ恩賞ヲ給リ有レ咎者ハ罰セサルニ其堺ヲ去ル云々

又云（直冬鎮西沒落條）斯シ後ハ彌師直權威重ク成テ三條殿方ノ人々ハ面ヲ低レ眉ヲ顰ム中ニモ左兵衛佐直冬ハ中國ノ探題ニテ備後ノ鞆ニ御座ケルヲ師直近國ノ地頭御家人ニ相觸テ討奉ント申遣シタリケレハ同九月十三日（貞和五）杉原又四郎二百餘騎ニテ押寄タリ云々右兵衛佐殿ハ河尻肥後守幸俊カ船ニ乘テ肥後國ヘソ被レ落ケル

江濃記云（六角京極合戰條）明應永正の頃畠山細川合戰の頃には京極殿は政元と一味し六角殿は畠山と一味にて義尹公方を取立被レ申けり此時中國の探題大内左京大夫義興せめのほり公方を御供申京都に備へ奉り大内十三年の間管領に任しけり

見聞雜錄云兼而は禁中より信長方へ被二仰下一候は天下の支配いたし候共中國十六ケ國の儀は毛利家を以て探題とすへし其子細は當今人皇百七代正親町院と申奉るは永錄元年戊午先帝後奈良院より讓を受させ給乍レ去今年天下大旱魃にて三月末より六月末まて一滴も不レ降依レ之五畿内は不レ及レ申大飢饉にて士農工商巷に餓死する輩多し依レ之其年卽位の大禮可レ被レ行樣なし足利家十三代公方源院義輝たりといへとも三好一黨か支配にて國々王化に不レ服將軍家之命を不レ用不レ及二是非一御位を被レ讓たる名計にて永祿三年まて卽位の儀を施行もなきは伊勢大神宮を奉レ始宗廟の神社へ奉幣使を不レ被レ立故なり日本前代未聞禁中の御無念不レ有二此上一長門國にて毛利元就此由を傳聞て大に驚き浪人分にて客臣たりし冷泉民部少補冷泉中納言息を差上せ奉レ窺二天氣一御卽位の御賄を勸め事を訴ふ大内に於て御感不レ斜目錄を被レ下是を勘辨して見る處白米二千石黄金五百枚料足八千貫にて十分の大禮無二殘所一に依て則相調正月廿七日目出度卽位の規式相濟畢叡感の餘り從三位宰相兼大膳大夫受領は陸奥守に被レ任奇代の兼官なり殊更翌年正月人日に長府へ下著せしめ候樣にと有て冷泉中將壬生大外記を以て御紋の菊桐の金紋を下し給り蒔染の御衣裏山明の浮線綾の指貫を下し給三公の名家へは御恩賜の古例ありといへとも納言已下へは是始なり如レ此の御樞機を被二思召一て信長は五十ケ國の東西南北支配は仕候へ中國十六州は毛利家との勅定たり

武林雜話云（黑田父子羽柴殿へ被二呼出一條）毛利を可レ被レ成二御退治一とて木下藤吉郎を羽柴筑前守に被レ成播磨一國被レ下中國十六ケ國の管領職に被レ爲レ備浮田無二敗亡一内にと被二仰出一急播州へ被レ遣けり（○按此一條は探題の名目なけれとも中國十六ケ國の管領職といへるか探題の職にあたれるか故にこゝにをさむ）

按長門探題はもとは長門守護といひて其一國の事のみを預りき、て守護代一人を置れたるか中國の事を總て預りきくに及ひて守護代の外に吏務に長せるものを擧て代官として其事を攝せしむるに至れるより守護の名を改めて探題とせられしなりその事の蹟にものに見えたるは伯耆卷太平記等はしめなれとも建治中北條宗賴此國に下著の後代官を設け置しは中國の事をはやく沙汰せし故なるへきか上に九州探題を永仁中に置れしなとをおもへは建治後弘安永仁比此職の名目に改められしなるへし建武一統後足利直冬此任にあつかりし後は此職中絶せしか大内義興長門及ひその他の國までをも領するに至りて又探題の稱あり大内亡ひて毛利元就彼國所領と成し比又其名目聞ゆれとも必しも其任にあてられたるにあらすとみゆれは僅に探題といへるは大内を限りにて其後は名目のみ殘れるなるへし

○長門國警固番

東寺文書云長門國警固事御家人不足之由信乃判官入道行一令二言上一之間所レ被レ寄二周防安藝一也異賊襲來時者早三

ヶ國相共可レ令二禦戰一之狀依レ仰執達如レ件建治元年五月十二日武田五郎次郎殿相模守在判武藏守在判

又云長門國警固事無勢之由被二聞食一之間所レ被レ寄二周防安藝備後一也且四ヶ國結番警二固要害之地一且異賊襲來者相共可レ令二防戰一之狀依レ仰執達如レ件建治元年五月廿日武田五郎二郎殿相模守在判武藏守在判

又云異國用心事以二山陽南海道勢一可レ被レ警二固長門國一也於二地頭補任之地一者來十月中可レ差二遣子息一被二仰下一畢早催二具安藝國地頭御家人幷本所一圓主地住人等一可レ令レ警二固長門國一之狀依レ仰執達如レ件建治二年八月廿四日武田五郎次郎殿相模守在判武藏守在判

按長門警固番役は蒙古襲來の不虞に備へんか爲に建治の初より中國なる地頭御家人に課せて勤役せしむる所なり前にも云しことく長門國は古くより船舶輻湊の要地なるか故に異賊窺窬の患ありしより探題を置て警衛の長官とし番役に從ふ所の諸士を進止せしむることいてきしなり此番役北條氏の世を終るまで設置れしにや又は其前に廢せられしにやたしかに見る所なしといへとも長く探題を置て警備せしを思へは番役も元弘まては停廢の事なかりしなるへし足利殿の世となりてもしはしのほと足利直冬を以て中國の探題になされたりしかと此時は元より異國に備ふへき爲にもあらすことにかしこの制度定まる間もなかりし故に此番役をは置れさりしなり

武家名目抄第四十八册

塙檢校保己一編

職名部廿七下

○奥州總奉行

吾妻鏡云文治五年九月廿二日己卯陸奥國御家人事葛西三郎清重可二奉行一參仕之輩者屬二清重一可レ啓二子細一之旨被二仰下一云々廿四日辛巳平泉郡內檢非違使所事可二管領一之旨葛西三郎清重賜二御下文一於二郡內一諸人停二止濫行一可レ糺二斷罪科一之由云々凡清重今度勤功殊拔群之間匪レ奉二此等重職一剩伊澤磐井牡鹿等郡已下拜二領數箇所一云々

又云建久元年三月十五日己巳左近將監家景號二伊澤一可レ爲二陸奥國留守職一之由被レ定住二彼國一聞二民庶之愁訴一可二申達一之旨所レ被二仰付一也四年七月廿四日戊子横山權守時廣引二一匹異馬一參二營中一將軍覽レ之有二其足九一前足五後四是出二來于所領淡路國國分寺邊一之由去五月之頃依レ有レ告乍レ怪召寄之旨言上仰二左近將監家景一可レ被レ放二遣陸奥國外濱一云々五年六月廿五日甲寅獄囚數輩自二京都一被レ召二下其身一可レ流二遣奥州一之由被レ仰二左近將監家景眼代一之是强盜之類云々六年九月廿九日庚戌故秀衡入道後家于レ今存生殊可レ加二憐愍一之由被レ仰二付葛西兵衛尉清重伊澤左近將監等一云々兩人者依レ爲二奥州總奉行一也

又云建長二年十一月廿八日己丑放遊浮浪之士寄二事於雙六一好二四一半博弈一爲レ事就レ中陸奥常陸此三箇國之間殊此態盛也隨レ有二風聞之說一今日有二懃御沙汰一於二自今以後一者圍碁之外至二博弈一者一向可二停止一之由所二仰出一也陸奥國留守所兵衛尉常陸國宍戶壹岐前司下總國千葉介等可レ加二制禁一之由各含二仰旨一云々○按留守所兵衛尉は伊澤氏にて家景の裔なり

又云康元元年六月二日辛酉奥大道夜討强盜蜂起成二往反旅人之煩一仍可レ致二警固一之旨今日被レ仰二付于彼路次地頭等一所レ謂壹岐六郎左衛門尉同七郎左衛門尉出羽四郎左衛門尉陸奥留守兵衛尉宮城右衛門尉和賀三郎兵衛尉同五郎左衛門尉自餘十七人姓名略之已上廿四人御敎書云奥大道夜討强盜事近年爲二蜂起一之由有二其聞一是偏地頭沙汰人等無沙汰之所レ致也早所領內宿々居二置直人一可二警固一只有二如レ然之輩一者不レ嫌二自他領一不レ可二見隱一之由被レ召二住人等起請文一可レ被レ致二其沙汰一若倘背二御下知之旨一令二緩怠一者殊可レ有二御沙汰一之狀依レ仰執達如レ件建長八年六月二日○按壹岐六郎左衛門尉同七郎左衛門尉は何れも葛西清重の後にて陸奥の人なり

新篇式目追加云、一近日出羽陸奥國夜討强盜蜂起之間、往還之輩有二其煩一之由風聞、尤不便、是偏郡鄕地頭等背二先御下知一無沙汰之所レ致也、甚無二其謂一、早柴田郡內知行宿宿直屋令二結番一、殊可レ令二警固一也、且籠二置惡黨一之所々、不レ可二見聞隱一之旨、可レ被レ召二沙汰人等起請文一者、依レ仰執達如レ件、正嘉二年八月廿日　武藏守判　相模守判〇按已上五條は鎌倉將軍家の奉行なり

花營三代記云、應安五年二月十八日、奧州奉行事、被レ仰二松田左衛門尉詮〇按此一條は足利將軍家の時の奉行にて京都に在なから奧州のことを沙汰すへき爲に命せられし所なりもとより武備等の事をうけ給はるものにあらされは鎌倉殿の時の奉行葛西伊澤等とはその司とる所同しからされとも名稱同しき故にしはらく爰に載す此後明德三年に至りて陸奧出羽兩國とも鎌倉公方の指揮たるへき旨定められしかはさらにこの奉行なとも置れすなりしなり

按、奧州は東極邊陬の地にして、德化覃ひ難けれは、公家政務のほとは、鎭守將軍を置れて警衞をいたさしめしに、鎌倉右大將家兵權をとられし後、其事とゝまりぬ、さて文治中に藤原泰衡を誅して奧州を平定ありし後、其地を割て有功の諸將士を封せられ、警備となされし中に、葛西淸重には氣仙、膽澤、磐井、牡鹿、江刺等の諸郡をあたへて、奧州の惣奉行となされ、衆國の諸事を沙汰せしめ、又伊澤家景はもとより陸奧の留守職なりけるを、右大將家の命によりて、倘其舊職を守るのうへに、淸重と共に國內の大小事を奉行せる故に、兩奉行とはなれるなり、留守職といふは、元國守の下司にして、一國の公務をすふるつかさなるを、爰に至りて又武家の命令を施行し、勢威いにしへに越たり、此兩家の子孫世々職をかさねて、其事をうけ給はれり、尊卑分脈に武藤大藏丞賴平の弟左衛門尉氏平奧州守護たる由見ゆこの人は大かた鎌倉右大將家の頃にあたれり然れともこの事吾妻鏡等の諸實錄に見る所なけれは疑ひなきにあらす依て本文にはもらせり然るを足利殿天下を掌握せられし始に、一族石堂義房を奧州の探題に定められしより、足利一門の輩かはる〳〵其職をうけ給はりしかは、兩家の子孫國務を攝することは絕しなり、尙次の條を合せ考ふへし、

〇奧州探題又稱奧州管領

佐竹文書云、陸奧國雅樂庄地頭職之事、任二御下文一可レ被レ沙二汰付佐竹上總入道道源代官一之狀、依レ仰執達如レ件、建武四年三月廿六日　武藏守
少輔四郎殿〇按少輔四郎は石堂義房なり此時陸奧の鎭將たりし故に國中の事をふされしなり武藏守は高師直なり

阿蘇宮文書云、抑此境事、自二去年六月一凶徒寄來、連々合戰也、雖二早可レ被レ決二雌雄一、奧州勢進發可レ爲二近々一候間、依レ被レ相二待從到來一、及二數月一候、於二此方城々一者、云二要害一云二兵粮等用意一、縱雖レ送二年月一、不レ可レ有二子細一候、然而凶徒者多勢也、御方は各城守候之間、被レ申二談奧州一、暫被レ押二先途一候、於二奧州一者、大路歸伏候、凶徒方大將石堂入道楯被二打落一候了、於レ今者不レ可レ有二異儀一候云々、五月廿六日　刑部大輔秀仲〇按此狀は康永元年の書なり石堂入道とは義房の事なり
阿曾大宮司殿

白河文書云、結城大藏少輔、同彈正少弼、式部少輔、伊達一族等事、參二御方一可レ致二軍忠一之由、先日被レ成二御教書一訖、可レ存二其旨一之狀如レ件、康永二年四月十九日　御判尊氏〇按結城伊達ともに奧州の將士なり
宮內少輔四郎入道殿

尊卑分脈云、畠山高國上野介觀應二二十二於二奧州一爲二貞家一被レ誅、高國男國氏中務大輔、左馬權頭、奧州管領、與レ父同時被レ討、國氏男國詮修理大夫、奧州探題、國詮男滿泰修理大夫、奧州探題、

又云、吉良貞家修理大夫、奧州一方管領、貞家男滿家中務大輔、奧州一方管領〇按一方管領といふは畠山國詮等と國をわかちて預る故の稱なり

白河文書云、奧州郡々檢斷奉行事、任二先例一不レ可レ有二相違一、但於二安積郡一者、追可レ有二其沙汰一之狀如レ件、貞和二年六月廿七日　右馬權頭花押〇按右馬權頭は畠山國氏なり分脈に左馬權頭とあるは誤なるへし
結城大藏大輔殿

又云、陸奧國白河庄、岩瀨郡小野保檢斷事、京都御左右之程、守二先例一可レ被二奉行一之狀如レ件、貞和二年七月十六日　右京大夫花押〇按右京大夫は吉良貞家なり
結城大藏大輔殿

陸奧國會津示現寺文書云、三浦大炊小太郎左衛門尉盛通妻平氏申陸奧國耶麻郡內下利根川村當知行分安堵事、申狀壹通謹進二覽之一、子細載二於狀一候、以二代官一令二言上一候、可レ被レ經二御沙汰一候哉、以二此旨一可レ有二御披露一候、謹言、貞和四年八月十二日　右馬權頭國氏在判　左京大夫貞家在判
進上　武藏守殿

陸奧國下河邊八幡文書云、石川板橋掃部介高光申所領陸奧石川庄之內千石板橋八幡宮神領下河邊村澤尻等之事、右於二彼所一者、高光重代相傳之所、舍兄千石大和權守時光、爲二宮方一之時、令二押領一畢、而時光降參之後、畠山右馬權頭管領之時、雖レ及二爭論一、高光被二裁許一、當知行云々、爰時光所レ令レ同二意顯信卿一、當時凶徒隨一也、於二高光一者、自二最初一爲二御方一、去々年度々致二軍功一、至レ今抽二戰功一上者、當所等本領當知行無二相違一、可レ預二安堵御下文一之旨申レ之、急速被レ經二御沙汰一候哉、高光軍忠若僞申候は、八幡大菩薩御罰可二罷蒙一候、以二此旨一可レ有二御披露一候、恐惶謹言、觀應三年卯月十三日　右京大夫貞家判
進上　遠江守殿

又云、陸奧國石川庄下河邊八幡宮者、伊豫大守八幡殿御時被レ奉二崇敬一社壇也、然者今度凶徒對治事、令二祈請一之所、依レ爲二嚴重一、當國會津河沼郡內佐野村令レ奉レ寄レ之候、就レ其可レ預二公方御寄進狀一之旨、神主石川掃部助高光申レ之候、急

速可有申御沙汰候以此旨可有御披露候恐々謹言
觀應三年七月八日 進上 仁木兵部大輔殿 右京大夫貞家判

白河文書云陸奧國會津蜷川庄半分事公方恩賞申沙汰之程所充行也守先例可被致沙汰之狀如件
文和三年十一月九日 結城三河守殿 中務大輔花押 ○按中務大輔は吉良滿家なり

尊卑分脈云斯波家兼 本時家 伊豫守 左京大夫 奧州管領 延文元六十三卒 四十九歲

上杉系圖云刑部大輔憲春弟憲英 藏人 大夫 陸奧守 奧州管領 法名常與 大宗號國濟寺

武衞系圖云家兼 伊豫守 左京大夫 出羽陸奧大將 號斯波

大崎系圖云斯波家兼 左京大夫 伊豫守 依勅命與舍兄高經下向於北國而退治於義貞故賜出羽陸奧探題下向時光明院御綸旨幷金淵太刀從高氏賜之而退治石堂殿安定羽奧國祖先領總州大崎故於當國曰大崎也家兼男直持 左京大夫 刑部大輔 二男兼賴 羽州最上祖 延文三年八月三日下向最上山形

奧州那須釜大安寺文書云大寺安藝入道道悅竹貫參河四郎光貞相論石川群吉村之事道悅所申頗有其謂云々早任代々可致領掌狀如件
明德五年七月一日 左京大夫判 ○按左京大夫は斯波直持なり

上杉系圖云憲英男憲光 歷與和左馬助 奧州管領 法名光山道盛 雲龍軒

白河文書云內々承候名取北方內本知行地事今度於其方被致忠節候者不可有子細候一向忩存候也
十一月十二日 謹上 結城三河守殿 左京大夫直持花押

大崎系圖云直持男詮持 左京大夫 詮持男滿詮 左京大夫 於田村大越討死 滿詮男滿持 左衞門督 父滿詮討死時得伊達氏恩故付屬名取郡於伊達 滿持男持詮 左京大夫 持詮男敎兼 左衞門佐 爲上使太田殿下向次依媒妁使息女嫁伊達氏

蜷川親元記云奧州探題左衞門佐殿へ御所氏家三河守同州斯波治部大輔殿 斯波卅三郷領主 瀧浦□□羽州探題右京大夫殿氏家伊豫守以上三ヶ所事太田上野介光注申分如此 ○按左衞門佐は大崎敎兼なり治部大輔は其同族にて別に一家をなし高水寺城による人なり右京大夫は最上義春なり

石川文書云 探題與富澤河內守近日及弓矢云々太不可然候不日可被宛無爲計略縱雖有意趣關東進發之間者惣別閣諸事早速令出陣可被致忠節之由所被仰下也仍執達如件
寬正六年五月十九日 石川治部大輔殿 尾張守

大崎系圖云敎兼男政兼 陸奧守 政兼男義兼 左京大夫 依屋奧亂走伊達伊達氏金澤氏加勢三百餘騎而被送大崎故嗣家上洛而從公方義尙義之一字幷包平之御太刀拜領焉

蜷川親俊記云天文七年六月十五日丁巳奧州探題大崎殿より御狀アリ黃金二兩大筐雅樂允黃金一兩大崎殿

大崎系圖云義兼男高兼 彥三郎 立一年而早世依無嗣子請於伊達左京大夫稙宗末子小僧丸而爲聟冠而號義宣住岩手澤城翌年八月三日大風起屋室廢壞此時息女不幸壓死其後義宣出奔葛西於桃生辻堂病死

伊達文書云就奧州探題職之儀爲禮大鷹一本馬一匹 雲雀 黃金三十兩到來目出候猶晴光可申候爲其指下孝阿候也
九月廿四日 伊達左京大夫とのへ 義輝 ○按左京大夫は稙宗なりこれた其子小僧丸大崎家をつきし時のことなり

大崎系圖云高兼男義直 左京大夫 上洛時公方發向越前國御對面無之故翌年大崎惣先達山伏狐澤上野下向之次自公方御書幷鎧拜領義直男義隆 左衞門督 秀吉公發向于關東而北條家族御退治之時遊國遲參之諸家皆被令去其城天正十八年八月十九日退賀美郡中新田城移同郡小野田城同月廿四日經最上路而上洛寓千本其後依秀吉公命被屬長尾景勝於奧州會津卒

按足利殿兵權をとられし初め奧羽は僻遠の地にして權勢の及ほし難きのみにあらす北畠家官軍の首將として奧羽の二州を統領ありし故に二國の兵士倂其指揮に從ひしかはそれを壓せらるへきために等持院殿一族石堂義房を陸奧の鎭將としてかしこに置れ國內の大小事を沙汰せしめ且は奧羽の將士を招誘して歸伏せしめ且は軍兵を催督して官軍を討しむこれいはゆる奧州探題の始めなり其後義房か職をとゝめて畠山國氏と吉良貞家二人に命して陸奧探題とせられしか國氏は故ありて貞家に殺されしかは其後は貞家ひとり國事を執行せり貞家所職を子國家に傳へし後又畠山國氏の男國詮を探題に補せられ滿家と供に國務に從はしむ然るにいくほとなく斯波家兼奧羽二州の探題に任せられて下向し專二國の成敗を司とりけれは其勢遂く二將の上に出たりさて畠山家は國詮の子滿泰か時まて一方の探題をうけ給はり吉良家は滿家までにして職をさり上杉家も又管領たりしかといくほともなくして奧羽の地すへて斯波一家の管領する所となれり 藤田系圖には吉良滿家を治氏に作る後に改名せしとみゆ同系圖に治氏の子治部大輔治家か時に鎌倉基氏朝臣奧州より召返して上州の內にて采地を給ひし由みゆ 家兼の子直持の時に至て弟兼賴を出羽探題に定めおのれひとり奧州の成敗

を擁せりこれより二人の子孫永く各國の成敗をふさねて他門の族此任にあたらさる事となりぬもとより足利家にて置る重職にして九州探題にひとしきつかさなり大崎義隆職を失ひし後はまたこれを置るゝ事なしといふ

○羽州探題

最上系圖云斯波家兼二男兼賴修理大夫出羽大將延文元丙申年八月六日出羽國最上郡府中山形入部康曆元年六月八日卒兼賴男直家右京大夫應永十七年正月六日卒直家男滿直修理大夫應永卅年八月三日卒滿直男滿家修理大夫嘉吉三年五月廿八日死滿家男義春右京大夫文明六年二月廿七日死義春男義秋修理大夫文明十二年十二月廿六日卒義秋男滿氏治部大輔明應三年七月十四日卒滿氏男義淳左衞門佐永正元年九月九日卒義淳男義定修理大夫永正十七年二月二日卒義定男義守天正十八年五月十七日死義守男義光出羽守天正十九年任二侍從一慶長十六年三月廿三日任二少將一同十九年正月十八日死（○按出羽大將を一本に出羽按察使とするは誤なり）

蜷川親元記云奧州探題左衞門佐殿へ御所氏家三河守羽州探題右京大夫殿 氏家 伊豫守 以上太田 上野介光注申分如レ此（○按右京大夫は義春なり氏家伊豫守は其家長なり）

奧羽永慶軍記云（白鳥十郎被討條）羽陽谷地ノ住白鳥長久カ嫡子十郎義國ト云シ者イカニモシテ山形ヲ滅シ最上三郡ヲ手ニ入國中ノ大將ニナラハヤト明暮心ニカクケルカ兎角信長將軍ニ見ヘ媚ヲナシ其後一揆ヲ起サント擬セラルレトモ時シモ亂タル世ナレハ左右ナク通ルヘキ事難ケレハ先白鳥隼人ヲ使者トシテ尾州安土ノ御所ヘソ遣シケル（中略）此事最上義光ノ臣氏江尾張守ハルカニ聞テ義光ニ申ケルハ白鳥十郎ヒタスラ信長公ヘ媚ヲナスト承ル今ノ世ノ習ヒニテ若ソシリ企テ君ヲ討奉ント議スル事モ有ヘシ是ヨリモ使者ヲ以仰ラレ然ヘウ候ト申ケレハ義光ケニモトテ志村九郎兵衞ヲ使者トシテ信長公ヘ遣シケリ九郎兵衞國々亂通路心ニ任セネト越後國ヨリ北國ヲ經テヤウ〳〵トシテ到著ス山本彥三郎ヲ以テ白鷹一居獻シ其序ニ申ケルハ義光今度某ヲ差上セ候事別義ニアラス是マテハ未シロシメサレヌ事モ候ハン義光先祖按察使足利修理大夫兼賴ヨリ今義光迄八代出羽ノ國ノ大將ニテ候日外白鳥十郎使者ヲ以テ己羽州ノ大將タルヨシ訴ヘ奉ルト承ル是極メタル僞ニテ候此旨ヨク〳〵申セトテ某ヲハル〳〵差上セテ候ト申ケレハ信長公キコシメシテ扨ハ白鳥十郎僞リケルコソ心得ネソノ義ナラハ義光出羽ノ大將タル事疑ヒナシト

テ剩其時四位ノ少將ニソ補セラレケル九郎兵衞ニモ御對面有テ御暇給リケレハ急キ本國ニ歸ケリ義光大ニ喜ヒサアラハ軍兵ヲモヨホシ谷地ノ城ニ取カケ十郎ヲ討ントソ宣ヒケル（○按義光少將となるは慶長十六年なり本書の說誤れり）

又云（山北前田氏斷絕條）北奧州北羽州ノ邊ヘハ國中ノ事サヘ音信不通ノ時ナレハ何事モ僞ノミ多カリシカ最上會津ナト使者ヲ上セテ國中ノ探題職ヲ蒙リシナト、アラヌ虛說唱ヘケレハ油斷スヘキニアラス云々

按羽州探題は斯波家兼奧羽二州の探題となりしに權輿せしかと其時は一人して二國をかねふさねたりしなり然るを家兼か子直持父の職を繼て後出羽の管領をは弟兼賴に讓りしにより奧羽の鎭分れて兩家の所職となれりそれより以降兼賴か子孫永く最上郡に居住して國內の成敗をつかさとり最上義光か時にいたるまて其職を世々にせしかとも文明明應の際より天下悉く亂れて何れの地も鬪爭の界ならぬはなかりしかは奧羽の兩探題ともに古のことく治術をはとこすへきいとまなく其勢漸く衰微せしなるへし然れとも義光頗英武の才ありけれはにや家聲をは落さりしに世の轉變に准ひ探題の職はこの時に至りて廢せしなり其職掌と其重任なりしことは奧州探題に准してさとるへきなり

○陸奧出羽管領

鎌倉大草紙云應永五年十一月四日氏滿四十二歲にて御逝去なり若君滿兼公從四位下左兵衞督御補任にて鎌倉に備り給ふ御年廿一管領は上杉中務禪助承レ之應永六年春より陸奧出羽兩國のかためとして鎌倉殿御弟滿貞滿眞二人御下向稻村篠川兩所に御座同九年奧州宮方の餘黨伊達大膳大夫政宗法名圓孜隱謀を企て篠川殿の下知にしたかひ申さす一味同心の族蜂起しける間同五月廿一日上杉右衞門佐入道禪秀爲二大將一發向す伊達かねてより赤館と云所に城をかまへ合戰して鎌倉勢を追返し悉討取ける然とも近國の大勢重て馳向ひ九月五日伊達打負降參す

又云禪秀病氣のよし披露して引籠謀叛を起す新御堂殿の御內書に禪秀副狀にて廻文をつかはし京都よりの仰にて持氏公幷憲基を可レ被二追罸一由賴み被レ仰けれは御請申人人には云々陸奧には篠河殿へ賴申間芦名盛久白川結城石川南部葛西海道四郡の者とも皆同心す

又云應永卅一年三月三日京都より照西堂爲二御使一下向あり是は京都の御下知もなくして大名數多御誅伐之事條々御とかめの儀也 持氏大におとろき給ひ奉レ對二京都一一切

不レ致二私曲一自今已後は可レ抽二無二忠勤一由告文を以被二申上一西堂五月十日上洛九月重て下向有て都鄙御和睦ありて目出度事限りなし同十一月廿日御舍弟奥州の稻村殿鎌倉へ御上り是は今度御和談事無二御心許一被二思召一奥州には眼代殘置御上りの由にて永安寺に御座同廿四日持氏御悅の餘りに永安寺へ御出御重代の中の御目貫を被レ進同廿七日重て御重代の鐺通の御腰物を給りけり何も御當家嫡々御相傳之御寶也

喜連川系圖云滿兼弟滿直稻村殿持氏同時自害滿直弟滿貞篠川殿於二報國寺一與二義之一同自害

喜連川判鑑云持氏永享十年六月十六日憲實御退治トシテ鎌倉ヲ御立武州高安寺ニ御陣三浦介時高鎌倉ノ御留守タリ因レ茲憲實京都ニ訴フ京都ヨリ鎌倉退治トシテ上杉中務少輔持房大將トシテ綸旨ニ御敎書ヲ添テ諸勢ヲ差下サル九月廿八日早川尻ニテ合戰持氏ヲ背ク者多クシテ敗北御陣ヲ相州海老名ノ道場ニ移シ玉フ十二月二日鎌倉ノ警固三浦時高心替シテ三浦ニ退去同月十七日鎌倉兵火十一月朔日三浦時高二階堂ノ一族上杉持朝大藏谷ニ亂入ス近習殘出合テ合戰其間ニ義久稻村滿貞報國寺ニ入テ御自害同月五日海老名ヘ義久御生害ノ由聞ユ持氏急キ鎌倉ニ歸リ入リ玉ヒ長尾芳傳カ陣中ヘ憲實ト和睦ノ義ヲ仰下サル芳傳謀ヲ領掌シ奉テ金澤ノ稱名寺ヘ供奉同十一日永安寺ニ移シ奉リ御剃髪ナリ十一年二月十日於二永安寺一御自害近臣數十人自害

按足利殿の時奥羽の成敗は斯波兩家の世職として沙汰せる所なれは別に管領を置るへき謂れなきに似たりといへとも明德中鹿苑院殿の定めにて奥羽の二國とも關東八州とひとしく鎌倉公方家にて管領あるへき由命せられしかは應永六年上杉禪助のはからひとして當時の公方滿兼朝臣の弟滿直滿貞を奥羽の管領になして稻村篠川の兩町に居らしめ二國の政務をとらしめたり斯波氏もとより二州の統領たりといへとも世職となりては器用にあたらさる人もおのつから其職に居るか世のならひなれは警備と、のはさる事なとあるか故に鎌倉より別にこの兩將を下して國務をとらしむる定もいてきしなり然れとも此つかさを置る、事四十年はかりにして鎌倉の持氏朝臣京師と不快の事ありて滅亡の時に滿直滿貞も同しく自殺せしかは此職も共に斷絕せり鎌倉公方の連枝としてうけ給はりし所職なれはその重任なりしことしるへし

○蝦夷管領又稱蝦夷代官

諏訪大明神繪詞云元亨正中の頃より嘉曆年中に至るまで東夷蜂起して奥州騷亂する事ありき蝦夷か千島と云るは我國の東北に當て大海の中央にあり(中略)根本は酋長もなかりしを武家其濫吹を鎭護せんために安藤太と云者を蝦夷管領とす其子孫に五郎三郎季久又太郎季長と云は從父兄弟也嫡庶相論の事ありて合戰數年に及間兩人を關東に召て理非を裁決之處彼等か留守の士卒數千夷賊を催集之外濱内未郡西濱折曾關城郭を構て相爭ふ兩の城嶮岨によりて洪河を隔て雌雄互に決しかたし因レ茲武將大軍を遣て征伐すといへとも凶徒彌盛にして討手宇津宮の家人紀清兩黨の雖多以命を隕漸深雪の頃に及ひぬ貞任追討の昔のことく年序をや累んと衆人怖畏をいたす所に季長か從人忽に城郭を破却して甲をぬき弓の弦をはつして官軍の陣に降す三軍萬歲を稱して則關東に歸りける

地藏靈驗記云往日鎌倉ニ安藤五郎トテ武藝ニ名ヲ得タル人アリケリ公命ニヨリテ夷島ニ發向シ容易夷敵ヲ亡其貢ヲソナヘサセケレハ日本ノ將軍トソ申ケルサレハ夷トモ年每ニ貢ヲソ奉リヌ

保曆間記云元亨二年ノ春奥州ニ安藤五郎三郎同又太郎ト云者アリ彼等カ先祖安藤五郎ト云者東夷ノ堅メニ義時カ代官トシテ津輕ニ置タリケルカ末也此兩人相論スル事アリ高資數々賄賂ヲ兩方ヨリ取リテ兩方ヘ下知ヲナス彼等カ方人ノ夷等合戰ヲス是ニ依テ關東ヨリ打手ヲ度々下ス多クノ軍勢亡ヒケレトモ年ヲ重テ事行ス〇按高資は北條家の内管領長崎左衛門尉なり

異本伯耆卷云奥州津輕ノ住人安東又太郎季長同郎從季兼ト同又三郎ト云者所領ノ事ヲ論スル子細アリ兩方訴ヘケルニ高資賄賂ニフケリ理アルヲ非トシテ惡サマニ下知シケレハ兩方下知ヲ背及二合戰一コトアリ此安東ト云ハ義時カ代ニ夷島ノ押トシテ安藤カ二男ヲ津輕ニ置ケル彼等カ末葉也

北條記云元亨二年出羽蝦夷蜂起度々及二合戰一自二去元應二年一蜂起云々正中二年六月六日依二蝦夷蜂起事一被レ改二安藤又太郎一以二五郎三郎一補二代官職一訖嘉曆元年三月二十九日工藤右衛門尉祐貞爲二蝦夷征罰使一進發七月廿六日祐貞虜二季長一歸參二年六月宇都宮五郎高貞小田尾張權守高知爲二蝦夷追討使一下向三年十月奥州合戰事以二和談之儀一高貞高知等歸參

按鎌倉右大將家いまた武家を興されさりしほとは鎭守

府將軍及秋田城介たるもの奥羽の邊界を守りて蝦夷鎭撫の職たりしか右大將家兵權をとられし後は鎭守府の官職を廢せられて夷狄の叛亂に備ふるつかさとてはなかりけるを北條義時武家の執權たりし時に安藤氏を津輕の夷地に居らしめて奥羽及渡島の蝦夷に備へ夷人を管領せられしより其子孫相傳へて蝦夷鎭衞の代官をうけ給はれり然るに北條高時の執權の時に至りて奥羽の蝦夷叛亂の事ありしに鎭衞安藤季長これを制する事能はさるによりて高時かれか職をとゝめ季長か一門季久を以て津輕の守護とせり其所置正しからさるによつて果には安藤一家の鬪爭に及ひしかは鎌倉より征討使を遣して一度は平定せし如くなりけれといくほとなく北條の族亡ひはてしかは此職永く絕しなり

武家名目抄第四十九册

職名部廿八

塙検校保己一編

〇堺代官又稱堺奉行堺政所堺檢斷

室町日記云堺中の酒屋より訴訟條 堺南北より訴訟申けるは此節他所より御酒あまた到來仕候而少宛下直に賣申候に付酒屋かたおさへに罷成めいはく仕候間向後南北へ入さるやうに被二仰付一候者可レ忝由申ければ則兩檢斷より堺の奉行所へ書狀を以申されける此頃南北へ他國より御酒持參にて堺中の酒屋迷惑仕之由訴訟申候間如二在來一堅令二停止一候由被二仰出一候間其心得を被レ仕候て可レ被二座中相觸一事肝要候なり七月六日加持權之助殿長方長秋〇按長方長秋は京都の兩檢斷なり

又云御臺所入用條 御借用申料足合百貫は御下女衆御中間衆小者衆江御扶持方に被レ遣候なり御返辨之儀は來秋十七ヶ所之內を以加二三文子利一御藏納以前に返辨可レ申候若御公物於二相違一者可レ令二他納を以納所一者也仍如レ件天文十二年十二月三日楢屋町小島屋堺大小路柏屋堺大小路淡路屋堺目口町笠原宗印參加地權助久勝塙田若狹守高景御借用料足百貫文は六郎殿御內方御借用被レ成候來秋以二十七ヶ所之內一加二三文子利一急度御返辨可レ有レ之候縱被レ行二德政一候共此借錢においては無二相違一御返辨可レ有レ之候仍狀如レ件天文十二年十二月八日堺大小路天滿屋宗淸老同博多屋又右衞門參楢村市右衞門長高小杉日向守長近〇按高長は京都の檢斷なるへし長近は堺代官にて加地久勝の同勢成へし長高は京都の檢斷なり

又云御借用米條 御借用米之事御判有合貳百石は御臺所入用之ために被レ成二御借一候來秋十七ヶ所之以二御公物一加二四割一先規のことく返辨可レ有レ之候若御公用相違之儀候共以二他足一納取可レ申候幷惣國之德政を行申候共此借米においては無二別儀一返辨可レ申候仍如レ件永祿五年十月三日堺目口町橋屋彥左衞門殿へ同町島屋彌惣右衞門殿へ楢村長高塙田高景加持久勝飼田長近〇按長近は堺代官にて久勝の同務とみゆ前に小杉長近といへるありたまく其名を同くせしにや疑ふへし

又云御借錢條 御借錢之事料足合貳百五拾貫文は御家中御給方之ために被レ成二御借申一候來秋十七ヶ所之內をもつて加二三割一急度返辨可レ申候若德政其外何事にても滯事候は以二他足一無二子細一相濟可レ被レ成候爲レ其狀仍如レ件永祿五年十一月七日市小路宗雲老龜屋壽齋老飼田長近加持久勝塙田高景楢村長高

又云奥振賈條 京都座之魚屋振賈のために堺へ打越町中をふりありくの處南北の魚賈ともとらへて檢斷所へあけゝれは則荷物を打上其者をいましめらるゝ京都魚賈あつまり訴訟申けるは頓て狀をそ出されける洛中を魚の振賈仕事先年より座の入賈來候に付而南北をも振賈致之處に理不盡に荷物を被レ押其上被二搦置一事太不レ可レ然所詮早々以二登城一可レ被二申分一候不レ可レ有二遲參一候仍如レ件八月廿九日森田彥左衞門殿貞親長高〇按長親長高は京都の檢斷脇屋惣右衞門楢村市右衞門なり森田堺の奉行なり下なる加持與三兵衞小森孫左衞門もまた同し

又云御臺所入用條 御臺所入用之事干蛸五十入一干烏賊百入一鰯鰛二桶貳斗入右上せ申候可レ有二御受取一候巳上西宮彌七郎御海上之儀に付切々訴訟申候于レ今埒明不レ申候何様あとより可二申達一候十一月三日岡村忠右衞門殿加持與三兵衞當所菊屋酒三石之代米として三石九斗渡申候馬大豆貳石之代米七斗五升渡申候御家中之算用未レ遂二結解一候之間跡よりの使に可二申上一候以上十一月廿日岡村忠右衞門殿加持與三兵衞

又云御用等條 中間衆之木綿三十五疋買取御役舟にて彥三に上と申候可レ有二御請取一候に妻もめんは今程一疋に付壹匁六分七分の賣買にて候是も小妻にをとらぬもめんにて御

座候壹匁三分つゝに定申間其御心得可レ有レ之候以上十一月廿五日岡村忠右衛門殿加持與惣兵衛御局方はした衆の切米十二石うりはらひ可レ申よし被二仰越一候此頃兵庫の買かひ壹石に付六匁三分五分の由すいた屋新右衛門申候其御心得可レ有レ之候十二月二日岡村忠右衛門殿加持與三兵衛

又云（御臺所入用條）肴物之覺 一雉子三番 一薄塩之大鯛廿獻 一鯨一桶 一塩五拾俵右差上せ申候可レ被レ成二御請取一候將又先日は御六ヶ敷候はんに上下三具紬之表二被レ下慥請取申候重而之便に代物登せ可レ申候以上返々別紙に可二申入一候へとも手前取込候によつて其儀無二御座一候何様跡よりの便に具に可二申達一候十二月十一日岡村忠右衛門殿小森孫左衛門

又云（呉服物條）呉服物之事 一若君様御召料（表白綾裏つむぎ一重） 一御前様御召料（おもてゆりすゑすこし一ツ） 一公方様御羽織（表ころこたん裏紺の生きぬ一つ） 一御乳母人（奥つむぎ表うら共なかはかまそめ一つ） 一御小姓衆の羽織（但紬うらは丹田山紬地あさき五所紋） 一御侍衆大紋（右十五通十五具） 一御小人衆（但信濃さらし唐もめん羽織三十） 右は去年十二月に調上申候也

又云（御肴物條）御肴物之事 一生鯛十五こん 一小鯛廿俵内（廿五枚は中鯛残廿八な） 一鰤百内（廿八小鰤有り） 一廿鹽の大蚫五十 一海月十桶右は去冬十二月廿三日に上せ申候なり 一雉子十番 一眞鴨七羽 一鶉卅羽 一酒樽五ツ（但貳斗入兵庫の亀屋の酒なり） 御家中へ被二取申一候酒一貳斗入樽十三 一六方樽卅五（但五升入也） 右いつれも當春のほせ申候分也御服屋宗林か注文樽肴の小日記とも相添候て上せ申候此儀米小俣飼納二百三十石御座候間以レ是皆濟可レ申由先度之便に老中より被二仰越一候彌其分に御座候哉爲レ念加筆候以上二月廿七日村下野守殿山榁之助殿加持與三右衛門（○按巳上九條は室町殿の有司なり）

義秋公方記云永祿十一年十月廿四日信長歸國ノ御暇申サレケレハ今度大忠ノ至リ逆臣ヲ不日ニ追罰シ將軍家再興ノ事信長一身ノ所爲也トテ御內書御感狀ヲ給リケル（中略）今度打取國々近江山城攝津和泉河內以上五箇國望次第可二知行一由雖レ有二御使一辭シ申サル和泉堺江州大津草津計代官ヲ付ラル

安土日記云元龜元年三月五日御上洛上京驢庵ニ至テ御寄宿（中略）爰天下無隱名物天王寺屋宗及菓子之繪所持候幷藥師院小松島油屋常祐カ柑子口松永彈正鐘ノ繪何モ覺ノ一種トモ候被二召置一度之趣友閑丹羽五郎左衛門御使ニテ被二仰出一候非レ可レ申候間無二異儀一進上候則代物以二金銀一被二仰付一候キ（○按友閑は松井法印なり當時堺政所なるゆゑにこの事を奉行せしなり堺鑑にも此事有）

多聞日記云天正十四年六月十四日堺ノ政所祐閑曲事トテ取替一及ト云ヲ被口畢云々（○按此文によれは友閑は織田家の時より豐臣家まて堺の政所たりしなり）

太閤記云（呂宋壺條）泉州堺津菜屋助右衛門と云し町人小琉球呂宋へ去年の夏相渡（文祿三甲午）七月廿日歸朝せしか其頃堺の代官は石田木工助にて有し故奏者として唐の傘蠟燭千挺生たる麝香二疋上奉り御禮申上則眞壺五拾懸二御目一しかは事外御機嫌にて西之丸の廣間に並へつゝ千宗易なとにも御相談あつて上中下段々に代を付させられ札を押所望之面々誰々によらす執候へと被二仰出一なり依レ之望の人々西丸に祗候いたし代付にまかせ五六日の內に悉く取候て三つ殘りしを取て歸り侍らんと代官の木工助に菜屋申けれは秀吉公其旨聞召其代をつかはし取て置候へと被レ仰しかは金子請取奉りぬ助右衛門五六日之うちに德人と成にけり

板坂卜齋慶長記云慶長四年九月七日大坂秀賴へ九月九日の禮に御下候云々備前島御座所にいかゝと申增田右衛門尉所へかりに移し申二日過て大坂城中に石田木工頭家を立退其身は堺へ被レ參候（元來堺町奉行）木工頭壹萬石の身上にて候へ共當座被レ成二御座一候にせはくもなく候

成瀨系圖云正成初名小吉隼人正慶長五年六月征二伐奧州景勝一正成預二根來百人同心一爲二旗下先鋒一有二石田謀叛之告一廻レ駕九月十五日戰二于關原一在二旗下一有二軍功一石田就レ禽天下歸二大權現一其後補二泉堺政所一政治明整士人懷レ之不二數歲一而被レ召二還旗下一給二事幄中一叙二從五位下一任二隼人正一

役人譜云堺政所成瀨隼人正正成慶長五年庚子自二御使番一（照个原御陣より）同十七年壬子迄十三年勤細井喜三郎慶長五年庚子自二御使番一米津淸右衛門淸勝（○按本書淸勝の年紀なし慶長十七八年の間勤役せしなるへし）

成瀨系圖云正一吉右衛門慶長五年天下一統之後爲二伏見城留守居奉行一所講板倉伊賀守勝重日下部兵左衛門定好米津淸右衛門及正一四人也後米津爲二泉堺政所一伊賀守亦住二帝都一定好正一勤レ之

役人譜云朝倉藤十郎宣正慶長十八年癸丑柴山小兵衛正和（副役也）慶長十九年甲寅自二伏見奉行一（大坂亂一年勤）長谷川左兵衛藤廣十九年甲寅自二長崎奉行一兼帶

駿府記云慶長十八年十二月六日從二京都一板倉伊賀守飛脚到來堺政所細井喜三郎頓死之由言上云々

當代記云慶長十九年三月柴山小兵衛爲二堺代官一自二去年一江戸朝倉藤十郎被レ遣堺ニ在ケルカ渡二小兵衛一東へ下十月十日比堺町人屬二大坂一鹽硝以二千斤一遂二禮于秀賴公一朱

印申請是ヲ爲閉居自茨木市正人數少々相遁處ニ大坂衆是ヲ討捕堺町人宗薫親子ハ家康公得厚恩間同令討死堺代官柴山小兵衛ヲ町人爲心得泉州岸和田ヘ送二十年正月長谷川左兵衛ヲ堺ノ被補代官分〇按左兵衛を堺政所となさるゝ事十九年十二月二十四日なるに駿府記松原自休手錄秀賴記等にみゆるをよろしとす山本豐久私記には柴山小兵衛を堺奉行としるせり

駿府記云慶長十九年十月十五日板倉伊賀守飛脚到來其狀之趣去十二日從大坂堺之津可破由申ニ付町人以下不及異儀秀賴依致歸伏鐵炮玉藥武具大坂城中自堺取運堺政所芝山小兵衛依爲無勢不及了簡堺立退岸和田引除云々十二月廿四日長谷川左兵衛藤廣堺政所可仕由今朝自岡山被召被仰付由本多上野介披露之二十年閏六月三日小豆島者長崎與堺津海路舟之往來得便所也長谷川左兵衛可致代官由被仰出〇按長谷川藤廣は元和三年迄堺の有司にてありしなり

按泉州堺津はいにしへはさのみ繁華の地にてもなかりしか鹿苑院殿の時に山名氏淸和泉守護となり此地に居館を構へしよりや、都會の地となり氏淸亡ひし後大内義弘亦其所を宿館とせしかはいよ〱大都會のさまをなせり元より舟船輻湊の要津なりけれは商賈の輩漸々に居をしめて富豪の民家あまたになりしまゝ義弘滅亡の後細川氏守護の國となりても尙更繁榮して異邦の船舶も此津に來着することゝなりて守護より此所に代官を置市中の事を沙汰せしなるへし〇按此事たしかにみる所なけれは詳にさためかたしといへとも此廳を政所といふことの天文永祿の際にいてきし稱とも思はれさるに殊に繁花の地となりて異國の船舶すら著岸する所なれはいつれにも其事を沙汰すへき司なくてはかなはさるいはれなりよりて今しはらくしかいふなり足利殿の季世となりては三好の一家漸く攝河泉の地を併領せしかは其はからひとして堺にも奉行二人を居て市政を沙汰せしなり其後三好は織田氏の爲に亡ほされしまゝ織田家より松井友閑を置て堺の代官職をうけ給はらせたり豐臣家の時になりても友閑尙其職たりしか其後改補せられて石田氏なと其事を奉れりさて關原の役より後には關東より有司二人を置せ給ひそれより遂に連綿の職とはなりぬ凡政を布く所をもて政所とよへるは奉行所といふに同しけれと此地に限りてしか稱せることくになれるは古き世よりとなへならひし故なるへし凡代官といふは其主たる人にかはりて事を執行する稱なり詳なることは代官の條にいふへし

〇奈良代官又稱奈良奉行奈良所司代

多聞院日記云文明十六年三月廿九日圓城坊坊主良覺逆得業被出被申云山城國寺社領之事畠山右衛門佐殿不可被成綺之由去年成敗之間珍重之由存處又御内人齋藤方近

日可致知行云々去年旣兩三人奉行令入國當社當寺之事別而不可成煩之由奉行蒙貴命候由申候則爲寺門山城國寺門領被取日記之處又如此不幾令相違之條言語道斷也四月廿七日近日山城國之事畠山右衛門佐殿可有知行云々仍而春日八幡之御領事は寺社本所領不可成綺之由被申候間昨日寺門之使者承仕道乘下向山城右衛門佐方代官方令對面當寺社領諸院諸坊領不可被成其綺之由被申候畢則隨御日記之面不可有緩怠之由慇懃返答在之右衛門佐殿代官豐岡又代官百田掃部小柳又代官一井大炊助花田又代官大塔三郎右衛門五月六日自畠山右衛門佐殿方山城國宇治より南分押而知行於春日八幡之領不可成綺全以可致本知行之由自當年楯以被言出者也則三奉行自右衛門佐殿被居置之間自舊冬三奉行ヨリ又代官兩三人山城國ニ入被致所務中略三奉行は小柳豐岡花田ナリ又代官之體如上記五月廿七日河内國譽田邊畠山右衛門佐殿近年相構城郭與正覺寺之城左衛門督殿對陣之間御樽十荷折三合御卷數自學侶被進之同寺門奉行譽田三郎左衛門尉方へ樽三荷折二合譽田之內物取繼之體仁へ百疋被遣之畢今度御禮之事は山城國右衛門佐殿知行之處寺社本所領悉以雖被抑留於春日社興福寺領幷八幡領は不可成其綺之由承之間且爲御禮相副神人被申賀禮畢以次當國所々幷河内山田庄以下之事以指示相副神人祖先大岡被申畢連々可仰御成敗之由先申入可歸洛之由神人ニ申含了六月二日去月廿七日被進河内畠山右衛門佐殿方樽之使今日令歸洛中略譽田三郎左衛門殿方寺門奉行取繼之了但今度折節譽田ハ若江ニ在陣之間相副若黨花田小柳ニ申含取繼了畠山殿返事趣祈禱卷數則頂戴候祝着候次樽十荷折三合送給賞翫無極候委細譽田可申候恐々謹言六月二日興福寺義就判十一月廿日山城幷當國兩國寺社領諸院諸坊領之事號畠山右衛門佐下知彼被管衆等或致抑防或相懸新儀非分課役致亂惡事は追年追日候て增倍之條非削神國稱號寺社滅亡法會懈怠之至極也仍學侶評定而可及訴訟云々先河州畠山右衛門佐殿方へ遣書狀幷事書次第々々可致訴訟之由一決則承仕兩人善圓幷道乘相副遣河州畢於寺門奉行は譽田三郎左衛門沙汰之間事書等以譽田方先披露スヘシ於內儀ハ就花田小柳可申沙汰云々十二月十八日自今日維摩會可有始行之由衆而一定之處ニ山城國狛野庄所出堂內御油無故無運上之由自寺務幷會勾當披露之間被延引廿

日畢山城國一圓畠山右衛門佐殿近年押而惣國知行之間狛事同知行之又狛下司事依爲敵令逐電之間彼跡自畠山殿被申付延命寺得分被押置之間篇々御油運上令懈怠云々仍以使者爲學侶畠山方ニ被申處不及屋形披露聽而三奉行成屋形之奉書一切自狛寺社運上分不可有無沙汰早々大小年貢等可有運上之由被成奉書畢自兼於春日八幡御領者不可成綺之由屋形意願而山城國衆ニ以奉行被命間更不可相違然上ハ只今御油計成下知之時ハ自餘年貢等下知可成參着歟之間惣而可成下知之由遣而被申之條憲法之至寺門尊崇之儀祝着之由使者申置使者之體唯儀講承道乘善圓兩人畠山殿三奉行書狀云從上狛庄春日社江參候本役以下諸下行之事ハ下司跡可被定之間儀爲沙汰人可有社納但下司得分事ハ可被殘置候南都雜掌ニモ此趣申遣間可有存知候恐々謹言十二月十九日延命寺殿進之候小柳貞强判豐岡慶綱判花田家淸判袖書云此由殘方々へも可被仰候從上狛庄春日御社江參候本役諸出等之事下司跡可被申付之間事者爲沙汰人先可社納之由折紙遣候但下司得分之儀ハ在所ニ可拘置候此趣爲御心得申入候恐々謹言十二月十九日南都雜掌梅坊進之候小柳判花田判豐岡判○按梅坊と云は道乘之事なり

又云永正二年八月二日澤藏軒宗益京兆被仰出今日山城國入部了云々去六月十日細川殿より宗益御免則上洛只今如本城州被仰付之條希代之事也三年正月廿六日今日澤藏軒河內譽田古市へ責入追落了兩遊佐故雖防戰不叶郡兩遊佐は高屋へ被入畢同廿九日通夜河內高屋城沒落了仍當國奈良隱物以下以外馳走也但自成身院澤藏江以使被音信處懇に返事在之間先以安堵了二月朔日今日澤藏軒へ寺門より樋成身院へ傳被遣了同七日澤藏軒は京都上洛畢三月十五日奈良中寺門之儀無爲之趣澤藏軒書狀兩承仕持來了禮錢は貳百貳拾貫分也七月廿四日澤藏軒今日爲大和入國宇治邊下向云々仍寺門制札京兆御書到來禁制與福寺幷境內奈良中一軍勢甲乙人等亂入狼藉事一陣取事一伐取山林竹木事右條々堅令停止訖若有違犯之輩者速可被處嚴科之由依仰下知如件永正三年七月廿四日因幡守三好朝臣在判東大寺へ之制札文言同篇也京兆御書之寫當國人等事和與時分雖種々申今度河州に進發之剋無其働上は敵同意現形之條加退治候仍南都儀許容牢人以下之間雖拘其罪候於軍勢亂入は寺社可及滅亡歟堅可制止旨申付宗益幷下制

札候然上は此砌一段可被致忠節由可被申屆兩寺同奈良中候恐々謹言七月廿四日成身院政元在判大和國人等之事和與時分雖種々申今度河州進發之砌無其働之上は敵同意段現形候剩于今牢人以下許容條各可有退治候但筒井成身院事無別心由被申候爲其分者不可有異儀之上は可抽忠節之旨可申候恐々謹言七月廿四日澤藏軒政元在判九月十四日今日自澤藏軒使僧二人差上南北鄕之堂まで奈良中地下人本主を被注了兩沙汰は罷出注之了同十九日東大寺普門院家依不義先年被擯出申處今度依澤藏軒口入被歸寺了十月三日今日澤藏軒南都下向宿猪屋同四日今日澤藏軒社參伴衆百人計自身與則今日山城邊打歸了自寺門以使節奈良成事被申了加思案重而可申合返答在之十月十日今日澤藏軒信貴山參籠云々則奈良を立了同十二日澤藏軒自信貴下向則猪屋被着了同十三日今日澤藏軒京都上洛云々四年四月廿七日今日爲一色殿退治武田語右京兆同六郎殿三好澤藏已下悉以丹後國被進發了六月廿三日今夜細川右京兆政元御生涯云々六月廿七日丹後國へは去廿五日右京兆御生涯聞之云々仍澤藏計略而一色殿と令和與則歸陣廿六日には宮津城迄引離然處今日石川以下一揆令蜂起フカウ谷邊にて宗益生涯了八月二日六郎殿御上洛先陣赤澤新兵衛和田源四郎子內堀神次郎古市播磨律師四人衆圓明院後陣三好其外甲賀江州之諸勢數千騎云々廿三日今日細川六郎殿公方樣へ御出仕云々廿七日赤澤新兵衛大和入了今日被仰出云々十月廿日寺門奈良中事細川殿制札在之赤澤成敗在之間昨日今日端々出所に物取乘打殺畢廿八日今日赤澤新兵衛奈良上洛宿朱雀院古市と北竹林院內堀は當坊に在之尊敎院妙德院以下兩寺之衆自赤澤用錢過分に申懸了十一月二日自赤澤方今度就調伏之儀條々寺門へ申懸了張本人十六人之處重科禮錢千貫可給之由申了古市依取合十六人分三人に成了尊敎院多聞院玄明院以上禮錢事年內又五貫文來春二百貫文殘三百貫文は御造替方可有奉加云々三日爲禮錢用脚奈良中一同棟別下知了十一月四日今日赤澤方京都上洛了十一日赤澤方今日自京都下向了宿朱雀院十七日今日於修南院家籾井修理進官府已下被參寺門成幷御造宮反錢之事被仰付了修理進懇御請申畢廿四日御造替反錢幷寺門領可在運上由赤澤方出狀了御造替反錢幷寺門反米寺社領御事各無相違可被相渡萬一於違亂之在所者給人可相致者也恐々謹言十一月廿四日和

州諸給人御中赤澤長經在判十二月二日棟別錢之内五十貫又赤澤方へ被レ遣了此内三十貫(赤澤)十貫(坂井)三日就二御造宮反錢奈良成之儀一自二諸方一使被レ出談合共有レ之赤澤方より四郎兵衞穗積自二官府一村井治部丞自二寺門一顯當專當幷良善承仕今日談合共と云々七日奈良中棟別成足內半分禮錢に可レ給之由赤澤被レ申間則今日五十貫文被レ遣了九日今日學侶六分沙汰人一所會合寺門領之事赤澤方へ可レ被二申遣一之由談合共也十日今日自二尾州一御馬太刀赤澤へ被レ遣了幷嶽山可レ被レ責之間赤澤可レ有二出陣一之由被レ仰云々則於二朱雀院一令二對面一可二出陣申一由領狀申云々十二月十六日自二六郎殿一奈良修理進御使而赤澤方河內出陣之事被二仰出一云々十七日赤澤方今日箸尾迄出陣了廿四日就二赤澤出陣一今日卷數被レ遣了

又云天正二年三月八日明日柴田番替ニ來付迎トシテ各上了九日柴田番替ニ夕部來了多人數也云々十日從二柴田一寺門へ使ニテナラ守ノ成敗堅申付由在レ之十四日從二柴田寺社一ナラ中成敗制札被レ出了札ノ筆者へ一貫二百文定リ也トテ銀子ニテ被レ遣候由也七月廿七日信長多聞城へ下了筒井ヨリ夕飯於レ城在レ之柴田ニ妙法院同子五大院內衆福聚院ニ候三年三月廿五日去廿三日ニ塙九郎左衞門當國ノ守護ニ被二相定一了五月十二日柴田ヨリ十市へ使來長柄城可レ歸之由申證人可レ上之由六月廿四日多聞山へ去廿日ヨリ塙九來普請在レ之四年二月七日原田備中守薪能見物ニ下向成身院宿同代官衆ハ遂城院順慶ハ圓明院總之伴衆近所ノ地下ニ宿ヲ押取被二申付一(按原田備中守は塙九郎左衞門の改たる名稱なり)五月三日於二大坂邊一寄衆敗軍數多討死原田備中守塙喜三郎同小七郎討死必定十日今日巳刻ニ和州一國一圓筒井順慶可レ有二存知一之由信長ヨリ明智十兵衞萬見專千代兩使ニテ被二申出一之由從二森彌四郎一打紙ニテ成身院へ注進有レ之七月廿八日塙小七郎被レ預藏ノ米筒井ヨリ中坊使ニテ被レ取了十四年五月五日大坂ノ用トテ坊別ニヒハタノ釘二升ツヽ中坊ヨリカケ了則削出了之處ニ又社頭ノ用トテ十石付八合ツヽ可二削上一候通也則申二付之一六月廿五日指出相違付爲二佗言一各々郡山へ下向了然處大政所俄霍亂大事煩出大坂へ宰相殿迎ニ追々馬共遣ラル道ニテ馬二三疋乘殺了ト依レ之先々各々歸了關白殿へモ追々注進云々廿九日郡山幷ナラ中坊獄囚之者共悉以被二放免一了大政所死去歟指出事モ御弱ラキ之間目出由一庵申上了七月四日宰相殿昨夕上洛中坊ニ在レ之今朝社參了寺僧衆一向不レ可二出合一云々十一日三方入群參ノ經ノ事從二中坊一被レ申宰相殿仰

之由申間從二今日一在レ之高山へ各々從二夜中一上了留不レ下沈思々々十五日中坊ヨリ郡山へ風流在レ之ナラ中ノ德人衆居色々ノ出立事盡了兩門幷寺門へモ及レ夕來了八月廿九日先日於二大鳥居邊一搦取引剝一向不レ存由ハ申セトモ可レ及二嚴重之成敗一之由中坊へ宰相殿ヨリ被二申付一今日既於二般若寺坂一夫婦(十九歲)アフリ殺了九月十四日去九日於二熊野一合戰在レ之宰相殿ノ衆數多討死云々今日中坊源五爲二見廻一越了十月五日宰相殿中坊へ上了井上源五へ二千石知行被レ出了九日奈良中賣買升中坊ヨリ京番トテ悉鄕內へ被レ出家每ニ升如レ此用意シテ判ヲ可レ取代二斗ツヽト云々今迄ノ十合ノ二合入也云々十二日和州一國遣升京番ニ被二相定一於二中坊一十五日以前ニ升判ヲ可レ取レ之判賃二斗ツヽ當升ニテ可レ取レ之云々萬一古升用レ之者ハ可レ及二成敗一旨嚴相觸了十五年三月廿八日昨日一庵上テ社頭修造事ハ講屋幷舞殿ノ上葺ハ從二中納言殿一沙二汰之一廻廊幷西ノ門ノ上葺ハ談儀田以下寄修造方ニテ爲二寺門一奉行人ヲ被二相定一可レ有二其沙汰一之米事ハ中坊ニ納置之間可レ渡レ之云々十六年閏五月十五日大納言殿社參木御社歟卅八所歟一ツ先可レ有二造營一之通中坊へ被二仰付一了七月廿一日此廿五六日頃於二受樂一大納言殿家へ關白殿御成被レ申御甁ノ能裝束用意神人長三郎ニ懇ニ被二申付一了中坊源五京ヨリ下テ裝束出來ノ儀被レ尋處未二出來一殊調分モ仕樣惡トテ既ニ神人令二生害一首ヲ京へ被レ上トテ以之外腹立色々申拘堪當則家檢斷事被二申付一道具色目ノ事色々佗言ニテ檢府計也九月十日大納言殿湯山へ被レ入了云々小堀三右衞門死去付竹奉行中坊へ被二申付一了十二月十五日伊賀ヨリ惡逆人トテ三人召捕搦テ中坊へ來籠へ入了ナラ中ニテ惡逆仕者也十九日先日伊賀ヨリ來召人於二般若寺坂一竹ノノコキリニテ左右手ヒキ切了十七年九月廿二日從二中坊一御殿コケラフキノ用トテクキ石ニ付二合ツヽ懸了社頭事ハ勿論也中坊作事ニ懸催事淺猿淺猿十八年十月四日金藏院吉祥院中坊へ呼二井上源五一慥ニ申渡秀長長病不二只事一一段ト可レ有二祈禱一之由從二關白殿一被二仰入一候間女中各々談合ニテ諸神諸寺へ如何樣ノ祈禱可レ被二申入一ヨリ當國ハ大明神へ祈念ノ段肝心ニ被二申入一如レ此被二相違一旨長秀同心ニテ悉被二達付一候通也則明日於二社頭一信讀經執行事女中ヨリ布施物卅石可二相渡一由源五被二申渡一候旨吉祥院來被レ語了十二月廿九日從二一爰法印小堀新介井上源五三人一寺門へ一萬五千石之都合知行被二返置一之旨來五日六日之頃寺門使衆被二下置一帳面相渡倚納

在レ之可二引渡一通申來

又云文祿元年二月十日中坊へ奈良中ノ狛ヲ被二取寄一云々皮ヲ剝ヤリノサヤノ用歟云々灰色ハ被レ返云々九月八日一乘法印井上源五ニ桑山修理幷杉若越前守副テ奈良中ノ者共京堺大坂ニテ金借衆悉召取リ可レ來ト御下知云々則中坊へ來ナラ中諸口ニ諸關ニ番ヲオキ甲乙人ノ通路指塞云々三年十一月八日去々年頭屋之時寶光院へ松林院ノ大木ノ松申請破風已下ニ沙汰トテ昨日ヨリ中坊ヨリ寶へ譴責ヲ入寶藏以下符了剩坊主ハ寺門へ預ルト申懸了四年十一月八日從二中坊一披露ニテ爲二六方一寶光院罪科了

南都隨筆云天正十年ヨリ慶長七年迄大和大納言殿內井上源五慶長七年ヨリ大久保石見守內鈴木左馬同長左衞門源五已後此兩人石見守家來ニテ南都ノ諸事執行石見守へ訴レ之

和州寺社記云東大寺三倉ハ聖武皇帝崩御四年後建世々勅符也然ニ慶長七壬寅年六月十一日破損內見ノ爲メ開符アリ勅使ハ廣橋右中辨勸修寺右中辨此時ノ奉行ハ本田上野介翌年癸卯年二月廿五日修理ヲ加給フトテ開符アリ勅使ハ前ノ兩人奉行大久保石見守寶物御藏へ納メ給フ時モ石見守本田上野介此時ハ長持三十棹新ニ調玉フト也○按當時大久保は奈良の代官をもかれたる故に此事にもあつかりしなり同十八年四月卒までは猶此職を掌せしと見ゆ其年五月に中坊秀政奈良代官を命せられしにて思ふへし

殺人譜云中坊左近飛驒守元南都之衆徒慶長七年被二召出一奈良支配同十四死○按飛驒守名は秀行といふ當時大久保石見守南都の代官をかれたれは秀行はその副職たりしと見ゆ

南都水谷鬪諍記云中坊ハ大職冠廿九世ノ後胤奈良備前守秀武一子讚岐守盛祐一子奈良左近秀國ト號始テ南都奉行職ト成リ松永彈正少弼久秀か妹聟海老名兵衞尉友淸カ婿ナリ故ニ松永家ノ麾下ト成左近カ一子忠右衞門秀行家督シテ左近ト號セリ智謀勇武父ニ越テ南都ノ町司ト成後ニ松永カ佞惡ヲ厭ヒテ一家ノ好ヲ離レ筒井家ノ麾下ニナリ數度ノ功名無レ限其後從五位下ニ敍シ中坊飛彈守ト改名シテ再南都ノ町司トナレリ然ニ慶長十四己酉六月廿日夜伏見ノ旅泊ニ於テ六十三歲ヲ期トシ暴死ス秀行ニ一男一女アリ男子ハ左近飛驒守秀政也○按秀行の父秀國南都の奉行たりしは詳に所見なしといへとも彼家はもと興福寺の衆徒にして奈良の檢斷の事なとを沙汰せしものなれは事に便あるか故に松永久秀大和を進退せし程は彼地の事は中坊にゆたねし事なとありしなるへし

當代記云慶長十七年十月比南都東大寺衆徒三人搦捕此外一人同宿以上四人也其故ハ六七年以前勅封ノ藏へ忍入數板ヲ切拔寶物ノ內金作ノ鷄同盃ヲ搜取テ折々京都へ指上令二兩替一刷二私用一今年彼盃ヲ其儘ニテ可二兩替一ノ由令二相談一亭主見レ之非二尋常物一殊昔ノ年號有ケル間如何樣是ハ勅物カ御物カト存二不審一由問二此旨ヲ彼僧一申僧及二難儀一往々此事亭主方ヨリ可レ漏ト思取テ前ノ宿ノ亭主ヲ振舞飼二鴆毒一間則死畢妻女頤テ板倉伊賀守所へ行テ言二上此旨一自二伊賀守一奈良代官へ相屆間彼僧三人幷同宿一人搦テ京都へ上セケル伊賀守事ノ由ヲ直ニ被レ尋ケレハ有ノ儘ニ白狀スサテ南都へ下置東國へ言上來年一月新ノ能見物ニ集二貴賤一被レ相二見之一其上可レ有二成敗一ナト風聞也十九年三月先年於二伏見一逢二横死一中坊飛驒守男奈良爲二代官一是皆人所存外也ト云々○按中坊秀政の此職をうけ給はりしは前年五月のことなり本書はおほよそにかけるなるへし

南都水谷鬪諍記云慶長十八年癸丑五月十一日ニ中坊飛驒守秀政奉二公命一和州南都奉行職タリ與力六騎同心卅人幷和州御代官五萬石ヲ支配シ自分ノ知行三千五百石吉野郡ニアリ任職廿六ケ年ナリ寬永十五戊寅八月十五日於二南都一病死セリ生質寬大ニシテ勇アリトカヤ○按增補筒井家記にも秀政慶長十八年五月十一日和州南都の奉行職となれりと記せり

駿府記云慶長十九年十一月十五日大御所奈良渡御奈良奉行中坊左近獻二御膳一云々

大坂軍記云元和元年四月廿八日紀州よりの注進に付大野主馬二萬の着到にて長池まで押候筈に候處昨廿六日大坂方大野主馬後藤又兵衞兩組の勢秋篠生駒山を經て郡山へ燒働仕候番手に罷在候筒井主殿介與力三十六騎にて防事不レ叶郡山を明捨て福住へ落行そこにて自害仕候大坂勢は郡山を燒拂其夜はそこにて陣取今日東南の鄉寺田まで三里か間燒働奈良へ働可レ申支度候由京都へ注進玉水にて日向守行合それより一騎欠に奈良へ欠付候奈良の代官中坊左近藤村市兵衞長池まで迎來日向守に參合大坂勢奈良般若寺坂まで亂入候間中々叶間敷候此邊に御陣取候て能々被二聞召一可レ然之旨申候日向守申候は奈良を燒かせ候ては兩御所の思召弓矢の恥辱に候一騎成とも奈良へ欠付成次第に取固可レ申候討死と相究候間中々是に陣取事成間敷候各兩人は奈良の所司代の儀に候間乍二不肖一同心被レ致候へと申し奈良へ欠付候所へ松倉十左衞門豐後守弟なり與田三郎右衞門方〻早馬を以て奈良は未燒せ不レ申候敵は郡山を燒陣取候其元手遲候は丶奈良は難レ抱候由注進に付日向守彌急候て其日の暮に奈良へ欠付申候○按藤村は中坊の副職とみゆ

按大和國は鎌倉室町の世とともに興福寺の別當大乘院一乘院にて守護せる國なりけれはかしこに官府を設け置

て衆徒の中さるへき輩其所に候し奈良はさらなり國中の檢斷以下の事大かたはからひ沙汰する事なりき（東大寺にかゝはりし事はいろはさりしと見ゆ）されは足利殿の時にも南都奉行といふはありしかともかしこに訴訟いてきしをりに其訟をきき又は春日祭會の時下向して非常を守るなとやうのつかさなりけれはひたすら彼地に在住して檢斷の沙汰なと執するまての事はなかりしに應仁の亂いてきし後諸國大に亂れて畿內の地もたゝかひの街となりけれは大和のわたりは畠山家より管領し文明中に山城大和の地に代官を居置て何事をも奉行せしめしかは奈良もかの代官のはからひとなりしなりそれより常のならひとなりて其後細川家大和を管領せしほとは赤澤氏の者に命して奈良の諸務を沙汰せられしなりやかて三好松永の黨近畿に横行するに及ひては松永久秀大和の多門に在城して南都の成敗を專らにせり（南都水谷國靜記によれは松永多門に在城の間は中坊秀國南都の檢斷をつかさとりし由なり彼家はもとより興福寺に附屬しそれよりあなたにも檢斷なとやうのつとめをつかさとりしすぢなりけれは松永もそのつかさを命せしなるへしされと多門院日記には其由たしかにみえす）さて松永衰へ織田家兵權をとられしはしめ其服心の輩かはる〳〵奈良の成敗をつかさとりしにいくほとなく筒井家をもて大和の守護となされし後は中坊秀政その附屬として奈良の代官となり檢斷已下萬事を奉行せり（筒井氏はもと興福寺の衆徒にて檢斷等の沙汰をうけ給はり官府の長なりしやからなり故に一國の守護にもなされしなるへし）さて豐臣家の世となりては大和をは大納言秀長に授與せられしかと猶古きにならひて中坊秀政南都の成敗をつかさとりて其家人井上源五を國主の家臣に准して秀政の下司とし久しく萬事を沙汰せり慶長五年關東の御はからひとして奉行を置せ給ひしより遂に連綿の職とはなりぬ此奉行たる者を奈良所司代ともよへるは其頃の俗間すへて檢斷の職をうけ給はる者をは所司代とよひしより誤り唱へしなり凡所司代といふは侍所にかきれる名なり其由は既に侍所のくたりにのへたり又長崎代官を長崎所司と云しもこれに准してしるへし（大友興廢記監澤兵部丞鎮を買取條に兵部鎮と鵄を見しらぬことのあるへきか是非我を狼藉者といはゝ奉行所へつれ行て穿鑿を遂首をきらんと瞋りけれは町人理にまけてなし止ることかなはす樋筒色々を調へ所司代栗田所へ持參し狼藉の押買にあひ監澤殿に鎮をとられ候立證ろゝ御法度の札にもおし買狼藉のことは初條に御座候處御付られ候へと中云々とありこれも其頃檢斷のつかさを所司代と云し一證なり）

○大津代官

當代記云永祿十一年九月廿八日信長東福寺ニ移給（中略）芥川城細川六郎三好日向守十月朔日城ヲ捨退散也小清水瀧山兩城同退散義昭公小淸水ニ移給芥川ヘハ信長被ニ相移一也池田ノ城主筑後守屬ニ味方一近江山城攝津國和泉河內五个國悉尾濃ノ衆ヘ被レ下大津草津是兩所ニ被レ置ニ代官一諸軍莫レ不ニ美談一云々（○按淡海志に初は大津奉行傳九郎賴長後に駒井主膳正次に駒井石見守とありこの駒井氏はみな織田家にて置れし所なり賴長はそれよりあなたの奉行にや又は織田家の時なるやいまた考得す）

稻葉系圖云伊豫守道長（或貞通）女江州大津町奉行古田肥前守妻（○按こゝに町奉行とあるは代官の事なり檢斷をもつかさとる故に町奉行とかけるなるへし）

小畠景憲家譜云大久保石見取立之侍鈴木左馬介江州大津之御代官仕身上有德故古田織部爲ニ成大野修理弟主馬と入魂不レ淺候

大坂軍記云五月二日に京都御出馬の御觸有レ之處に四月廿六日江州の御代官鈴木左馬介先の敵と稱し戸田八郎右衛門と云浪人左馬介を日の岡にて打果し山越を三井寺（江）退其時左馬介召連候挾箱の內大坂內通の密旨一揆蜂起の同文有レ之を板倉伊賀守潛に二條江差上候其吟味甚急にして彌實正に究る其上左馬助舅古田織部か茶道木村宗喜此餘黨たるに依て宗喜を始張本人廿餘人被ニ召捕一候

按大津は近江の一都會なれは佐々木氏守護職たりし間も代官を置れしなるへけれといまた所見なけれは詳ならす（但鎌倉殿の時には非常の事あれは此わたりの事をもなへて六波羅より檢斷するならひなりけれはたとへ守護の代官はありとも後の世のごとく沙汰を專らにする事はなかりしなり足利殿の時にも應仁亂以前は大かた其さまなりしとみゆ）織田豐臣家の時には正しく代官のつかさを置れて市中の檢斷及ひ近里の土貢收納の事をつかさとらしめしなり（見聞雜錄に織田家の時大津の倉に米穀をたくはへしことみゆ彼書は古書にあらされともよりて出る所ありしなるへし）織田殿弑逆に逢れし後明智光秀東坂本にありて大津を管領せしかともしはしの間なれは代官なと置へきほとはなかりしなるへし其後は京極高次大津に新城を築きて居城せられしかは其家人をして市中の檢斷を沙汰せしと見ゆ慶長五年よりこなたは關東より代官のつかさを置せらるゝこととなれり

○長崎代官（又稱長崎所司）

大村家傳云元龜元己巳春南蠻船始テ長崎浦ニ來リ彼浦入海深ク入津之勝手能所ユヘ入津場ニ相極度由大村ヘ相願ニ付同二庚午年三月大村ヨリ朝永對馬ト申者ヲ遣シ始テ町六丁ヲ割異國商賣ノ湊ト相定候其節ノ地子銀三百目町中ヨリ相納ル長崎內町幷山里村淵村吉利支丹寺ニ預ケ置天正十五丁亥秀吉薩州御歸陣ノ節筑前箱崎ニ於テ長崎之伴天連無禮ノ仕形ニ付致ニ逐電一候因レ之長崎幷右預置候兩村公領ト成天正十六戊子年ヨリ鍋島加賀守殿ヘ長崎御預四年被レ勤文祿元壬辰年ヨリ慶長七年マテ十一个年寺澤志摩守殿支配慶長八卯年ヨリ同十巳年マテ三个年小笠原一庵老奉行（是より御當家長崎奉行始る）

役人譜云長崎寺澤志摩守廣高慶長六年辛丑小笠原一庵御代官
慶長八年癸卯同九年甲辰卒去長谷川羽右衛門重治御代官
慶長九年甲辰同十年乙巳佐渡奉行 長谷川左兵衛藤廣御代官
慶長十年乙巳○按寺澤廣高は文祿元年より長崎の事を支配すといへとも御當家に屬するは關ヶ原役の後なるか故に慶長六年と記せしなるへし

當代記云慶長十四年十二月九日去夏黑船數艘著ケレトモ糸ノ賣買于レ今不レ止間京都糸同板物甚高直也去年九州長崎ノ有馬修理被管共ヲ遣二明朝天川一爲二商渡海一ノ處ニ彼所者シ・ンニヨロ商人の司也 并加飛丹是は船頭司 天川ノ賣買ノ樣子日本人知ナハ重テ黑船長崎へ雖二著船一難レ得レ利由存日本人三百人餘一所へ呼入悉燒害畢爲二此相當一此船ノ者共可二討害一由自二駿河一有馬修理ニノ玉フ殊ニ日本人燒害シタリシシンニヨロ加飛丹來朝ノ間幸ノ儀彼舟ヲ雖二計呼一終ニ不レ上二陸地一間不レ及二了簡一船ヲ操リ以二干戈一可二討果一用意アリ是ヲ黑船唐人見知シテ今日九日俄ニ船ヲ出シ十二三里程漕歸ケル所ニ風忽ニ起テ十里ホト吹返シテ硫黃ト云所へ黑船上然處ニ有馬修理此間操シ船ヲ漕寄井樓ヲアケ黑船へ漕寄素有二案內者一鹽硝ノ有ケル所へ火矢ヲ射ル間忽燒亡條黑船沉滅却シ畢(中略)黑船被二討果一シ時長谷川忠兵衛ト云者別テ令二計略一是駿河ヨリ長崎へ每年著船ノ賣買ノ檢使糸以下ノ事專取行左兵衛カ弟也此忠兵衛モ同使也

慶長年錄云慶長十七年三月廿三日岡本大八と申者長崎奉行有馬修理を日比取持但內々にて申は金子を多く指越候は、老衆へ遣しまた出頭の女中へ遣し九州之內鍋島知行預分二郡を申受まいらすへきと僞り候を眞に致し金銀數多出是を取候て一圓沙汰もなく不レ致二返答一候間公事に成大八負にて則廿一日に阿部川原にて火あふりに被二仰付一諸人見物にくまぬ者はなし大八死とき申樣は有馬修理にも大惡あり唐船の糸奉行に被レ遣候長谷川左兵衛を有馬修理やみ打に可レ仕よし我等に相談申所分明也と申候て死申候間有馬修理も囚人にて大久保石見に被二仰付一甲州へ被レ遣御穿鑿可レ有と也

當代記云慶長十七年三月廿三日岡本大八ト云者アリ親ハ在江戶ス彼大八九州長崎ノ有馬修理儀ヲ於二駿府一取持者也中略大八被レ行二罪科一砌大八カ云自二大御所一長崎唐船ノ糸彼是ノ使被レ遣長谷川左兵衛ヲ有馬修理闇打ニ可レ仕由大八へ申合候ツル由ヲ白狀致候間修理爲二囚人一則被レ預二大久保石見一其後甲斐國被レ遣二郡內一息左衛門ハ不レ可レ懸二此科一ノ由宣フ本領令二安堵一如レ前ニ長崎居住十八年八月四日昨日三日西國風烈シテ長崎ヨリ上ル糸幷唐物積タリシ舟十五艘潮入其中代官長谷川左兵衛舟三艘不レ見驚テ京堺糸物爲二高直一十九年七月九州長崎古有馬修理男左衛門佐ニ日向國高橋右近領跡被レ下間左衛門佐爲二國替一相移八月此比自二九州一長谷川忠兵衛長崎商物糸卷物以下賣買の代官駿府へ下此度來朝黑舟伴天連遂二佗言一如レ此以前彼宗派九州ニ有二居住一樣ニトノ儀ニテ舟中ノモノ曾不二賣買一間个樣ノ事可レ有二言上一儀歟

駿府記云慶長十六年八月廿日長崎所司長谷川左兵衛藤廣著府大明南蠻異域之商舟八十餘艘來朝則快爲二商買一之由言上有二御感一云々十九年十二月廿四日長谷川左兵衛藤廣堺政所可レ仕由今朝自二岡山一被レ召被二仰付一由本多上野介披二露之一二十年閏六月三日小豆島者長崎與二堺津一海路舟之往來得レ便所也長谷川左兵衛可レ致二代官一由被二仰出一

按足利殿の世より織田家の時までは異國より來船の要津は泉州堺浦なりけれは殊方の珍器大かた彼地にて交易したりしか豐臣殿下兵權を取られし後大村嘉前か所領の內肥前長崎の津を召れて天正の末より來船の津に定められきこの津は是よりさき大村氏私に交易せし地にして著船に便よき所なりけれはなりさて鍋島寺澤の兩家相繼てかの津をあつかりて大小事をつかさとれり慶長五年の後も寺澤廣高もとのことく此地を支配せしに同八年に小笠原一庵をもて長崎代官に補せられき是後の長崎奉行のつかさなり それより後は御家人たる誰かはる〲此職をうけたまはる事となれり慶長の末長谷川藤廣代官たりし間有馬晴信しはしの程長崎の公務を攝せしことありこれは藤廣とつとめを同じくせしいはれにあらすひとへに鍋島寺澤の例にならへるものと見えたり三家皆大名にて長谷川と同等の人にあらされはなり晴信召預けられし後は長谷川氏その務を專にせり此職を長崎所司ともいひし事見ゆるは奈良代官を所司代ともよひしに同し其由は既に前條にのへたり寛永の頃はこれを長崎町奉行ともいひしこと物にみえたり町奉行のつかさとる所は所司の職掌に似たるものなれは當時長崎所司長崎町奉行なともいひしとみゆ

○佐渡代官

當代記云慶長七年此比ヨリ佐渡國ニ銀倍增シテ一萬貫目餘上へ被レ納先代越後景勝彼國領納ノ時分ハワツカナリシト云々又石見國金山モ倍增シテ四五千貫目被レ納是モ先代毛利輝元ノ時ハ僅ナル儀也家康公分國ニナリシヨリ如レ此右ノ兩國大久保石見守拜領也但金山ノ儀ハ彼人爲二代官一銀ハ上へ右ノ通被レ收每年石見守三月佐渡へ相下ハ

月伏見ヘ上九月十月ハ石見國ヘ下是金山相改彌銀多分爲レ可レ被レ納也九年八月十日比自二佐渡國一大久保十兵衛上ル銀子山繁昌ノ由悦給佐渡國十兵衛ニ被レ下（但銀山は除）十一年正月伊豆國金山ニ銀子多可レ出ト云々大方ハ佐渡國ヨリ出ル程モ可レ有レ之ト云也此已前代官彦坂小刑部タリシヲ引替向後大久保石見守可レ爲二代官一ト也十二年五月此比大久保石見守佐渡ヘ下銀山仕置可レ仕ノ由依レ仰駿州ヲ立伊豆ノ金山銀シカ〲此頃ハ不レ出ト也十八年四月廿五日大久保石見守死去五月大久保石見男共蒙二勘當一其故ハ父代官所可レ遂二勘定一ノ由急度仰成ケレ共若黨故不レ知二前後一如二上命一難レ成ノ由言上付如レ此云々石見守下代共召集於二駿府一彦坂九兵衛所ニ被二押篭一近年押領ノ金銀悉被レ改條不レ殘出獄レ之右ノ石見存生ノ時慶長六年辛丑ノ年ヨリ今年迄十三年間佐渡國石見國諸國金山ヘ年中ニ一度充上下路次中ノ行儀夥事也召遣ノ上郎女房七八十人其次合二百五十人同道ノ間泊々ノ宿何モ代官所成クレハ家家思樣ニ作並タリ其外傳馬人足以下幾等ト云不レ知レ數毎度上下如レ此此石見守ト云ハ甲斐國武田ニ住シタル大藏大夫入道末子也家康公甲州ヲ入レ手給シ時ヨリ自然ノ氣相ニテ近ク祗候シケルカ知行方又ハ金山等ノ儀ニ付利方ニ能立入ケレハ仰二大久保相模守一出二名字一號二大久保石見守一云々（○按大藏入道は猿樂の鼓打なり）

駿府記云慶長十九年四月四日間宮所左衛門田邊十郎左衛門從二佐渡一參府銀千貫目餘持參云々（○按此二人は石見守死後に命せられし有司なり）

按佐渡に黄金を産する山のありし由は古くよりいふことなるかこれを堀得しは上杉輝虎北邊を倂領せし後にありて天文永祿よりこなたの事とみゆされと上杉氏の領分たりしほとはさはかり多くは出さりしか慶長五年の後大久保石見守を佐渡の代官に補せられしよりいと多く出ること、はなりぬ上杉家にて領せしほとも家人なと遣して金山の沙汰を執しめけむされと其事いまた所見なし石見守死てより已後は御家人たる輩相繼て代官職をうけ給はるならひなり是今の佐渡奉行のつかさなり

武家名目抄第五十册

塙檢校保己一編

職名部廿九上

○總追捕使

吾妻鏡云元曆元年二月十八日丁丑武衞被レ發二御使於京都一是洛陽警固以下事所レ被レ仰也又播磨美作備前備中備後已上五箇國景時實平等遣二專使一可レ令二守護一之由云々（○按此時景時實平を五箇國の總追捕使となすへきためかく命せられしなるへし）

又云文治元年四月廿六日己卯近年兵革之間武勇之輩耀二私威一於二諸莊園一致二濫行一歟依レ之去年春之頃宜レ令二停止一之由被レ下二綸旨一訖而關東以二實平景時一被レ差二定近國總追捕使一之處於二彼兩人一者雖レ存二廉直一所二補置一之眼代等各有二猥所行一之由漸懷二人之訴一就レ之早可レ令二停止一之旨所レ被レ成二御下文一也十一月廿八日丙午補二任諸國平均守護地頭一不レ論二權門勢家莊公一可レ充二課兵粮米一（段別五升）之由今夜北條殿謁二申藤經房卿一二年三月一日己卯諸國被レ補二總追捕使幷地頭一內七箇國分北條殿被二拜領一畢而深存二公平一一去頭上二表地頭職一（中略）於二時政一給二七箇國地頭職一者各爲二下令一レ遂二勸農一候上可レ令二辭止一之由所二令レ存候一也於二總追捕使一者彼凶黨出來候之程且爲レ承二成敗一可レ令二守補一之由所レ令二存知一也七日乙酉北條殿被レ申二七箇國地頭上表事一已經二奏聞一畢之由右少辨造二奉書於帥中納言一彼卿又送二其狀於北條殿一云々時政申狀奏聞畢一地頭辭退事爲二人愁一停止之條尤爲二穩便一歟一總追捕使事雖レ替二其名一只同前歟但義經行家不二出來一以前二位卿不二申行一之外一向不レ被レ止之由難レ被二計仰一世間不二落居一之間每レ國置二總追捕使一若又廣博莊園許補者可レ宜歟最狹少所々皆悉被レ補者喧嘩不レ絕訴訟不レ盡歟

平家物語云（判官都落條）日本國のそうついふしを給はつてたんへつにひやうらうまいあて行ふへきよしを鎌倉殿より公家へ申されたりけれは法皇仰なりけるはてうの怨てきをたいらくるものはんこくを給はるといふ事むりやうき、やうに見えたり賴朝か申ちやうくわふんなりとてしよきやうに仰あはせらるしよきやう申されけるは賴朝卿の申さる、處道理半なりとてしよくにしゆこを置しやうしんにちとうをふせらるか、りしかは一もうはかりも臨るへきやうそなかりけるかまくら殿かやうの事をはよしたの大納言經房卿をもつて申されけり（○按右大將家文治元年大江廣元のすゝめを用ひ朝

廷に請申し同二年諸國に總追捕使を補して其國を守護せしめ地頭を設て兵粮米をあてとる法を定められたりこの總追捕使は皆御家人の所職にして右大將家自其職に居られしにはあらすされとこれ皆そのすへ司とらるゝ所なれは世には日本國の總追捕使に補せられしと思ひしなるへし本書及增鏡の文辭かすかにして分明ならす

將軍次第云 前右大將源朝臣賴朝卿諸國總追捕使職 拜二領之一文治元年拜二領之一（或建久元上洛之時拜領云々○按一說建久元年とあるは誤なり）

增鏡云（新島もり卷） 建久のはしめつかたみやこにのほるそのいきほひのいかめしき事いへはさらなり（中略）其年の十一月九日權大納言になされて右近の大將を兼ねたりしはすのついたちころよろこひ申て同しき四日やかてつかさをはかへし奉る此時そ諸國のそうついふくしと云ふ事うけたまはりて地頭職に我家のつはものともなしあつめけるこの日本國のおとろふるはしめはこれよりなるへし ○按こゝにこの時とあるは右大將家の時といへることにて建久元年上洛の時をいへるにはあらす將軍次第の一說に上洛の時許されしとはかゝる文辭を讀みたかへしなり

長門國守護職次第云 土肥次郎實平號二總追捕使一（代官土岐次郎） 佐佐木四郎左衞門尉高綱自二大將殿一文治二年給レ之號二守護職一

曾我物語云（八まん大ほさつ條） さてもいつの御山にてゆめ物語しとひあはせたてまつりしものけむ玄やうにあつかるとう九郎もりなかはかうつけのそうついふしになさるかけのふはわかみやのへつたうえんにんのそうくわんをたまはる

太平記云（雲景未來記條） 元曆ヨリコソ正シク本朝ニ武家ヲ被二始置一則二海內一蔑二君王一奉ル事ハ出來ニケレ（中略）武家雅意ニ任セテ天下ヲ司ルト云トモ王位モ文道モ相殘故ニ關東如レ形政道ヲモ理メ君王ヲモ崇メ奉ル體ニテ諸國ニ總追捕使ヲハ置タレトモ諸司要脚ノ公事正稅佛神ノ本主相傳領ニハ手ヲ不レ懸目出カリシニ時代純機宿報ノ感果アル事ナレハ後醍醐院武家ヲ亡シ給フニ依テ彌王道衰ヘテ公家悉廢レタリ

神皇正統記云 建武乙亥の秋の頃ほひに高時か餘類謀叛をおこして鎌倉にいりぬ直義は成良の親王を引つれ申て參河の國までのかれにき（中略）高氏は申うけて東國にむかひけるか征夷將軍ならひに諸國の總追捕使を望みけれと征夷將軍になされてこと〳〵くはゆるされす程なく東國はしつまりぬ

園太曆云 文和二年九月卅日此間八幡宮有二種々怪異一云々又聞西國以外蜂起直冬給二南方綸旨一奉二總追捕使事一又諸國守護已下事任二承久已前例一可二執行一之旨勅許云々又東國同蜂起世上猶定難二落居一歟但例浮說歟

按追捕使押領使なといへるはいにしへにもまゝきこえたり武家興隆の後新に設けられしつかさにはあらすされと諸國一國に置れたるは鎌倉の右幕下にはしまれり（西宮記に諸國追捕使畿內或奉二勅宣一外國以二國解一申レ官賜二官符一押領使同レ之とあり朝野群載にも追捕使押領使の歷置を申請へる國解を載たりいつれも武家創業以前の制度なり） 初公家にて此等の職を設けられし故は國々に謀叛の者ある時又は盜賊蜂起なとのをりに武勇の器たる人を此司に定補してむねと追捕の役に從はしめ或はさせる事なくても常に靜ならさる國々にはひたすら此職をおかれし所もあり又國司みつから押領使を兼ねたる國もありしなり其職掌は檢斷を專にせるものにして檢非違使のつかさに異なることなしもとは大かた追捕使とのみいひて惣字はそはさりしなりさるは一郡一庄に限れる押領使追捕使もあり又は一社一寺に限れるなともありてまきらはしかりけれは一國を統るは惣追捕使と稱する事もいてきしなるへし（尊卑分脈に齋藤爲賴越前國惣追捕使とありこれは武家興らさる以前のことなり又平家物語腰越條に判官こはされは何事そや縱いかなる不思議ありとも一度はなとか對面なからむ凡九國の惣追捕使にも補せられ山陰山陽南海道何れなりとも預けられ一方の御かためにもなされむするかとこそ思ひたれ云々とありこれらを合せ考へて其頃惣追捕使といへる職まゝありしを知るへし） 鎌倉殿兵權をとらるゝに及ひて其奏請のまゝに每國に惣追捕使をおかるゝ事をゆるされしかは御家人等をもてこれに補任し各國を守護せしむる事となれりさてやかて其稱を守護に改められしなり（猶くはしき由は守護の所にいへり） さて其稱をかへられしはいかなる故そと思ふに古くより相續し來れる武家被管の外なる惣追捕使もあり一社一寺にも其職名あるをきらはれしなるへし（吾妻鏡に正治二年二月廿日丙子親長自二京都一歸參具二下國人播磨國總追捕使芝原太郎長保一是其時與黨也二十二日戊寅推二問長保一申云依レ爲二播州守護一就二彼吹擧一雖レ致二奉公一敢不レ與二叛逆一云々とありこれは守護の外なれはもとよりの總追捕使なるへし弘安二年石淸水八幡御入洛記に別當朗圓か肥後前司某に贈れる狀あり其文に御山守護致內槇栞山城總追捕使等如レ元可レ被二奉行一云々とありこれは石淸水宮につきたる惣追捕使なり又東寺文書に例進平野殿御庄旅寄合旅一荷總追捕使分右任二例進一令レ進候了文保二年七月晦日總追捕使平淸秀とありこれは東寺領平野庄の總追捕使なり又鹿島香取の兩宮にも古くより此職あり） 抑此職は御家人たる輩うけたまはれることにて將軍みつから補任せられしにはあらさるなり常の諺には鎌倉殿を日本國の總追捕使と稱せしこともありけれは後には將軍みつから其職に居られしことくおもひあやまりしかは等持院殿も諸國總追捕使たらむことを望まれ足利直冬も其職に補せらるゝなとやうのこともいてきしなるへし

○守護

長門國守護職次第云 長門國平家以往守護職元者號二押領使職一

吾妻鏡云 元曆元年三月廿日己酉今日大內冠者惟義可レ爲二伊賀國守護一之由被レ仰二付之一

又云 文治元年五月廿三日丁巳參河守（範賴） 受二二品之命一爲二

對馬守親光迎可遣船於對馬島之處親光爲遁平氏攻三月四日渡高麗國云々仍猶可遣高麗之由下知彼島在廳等之間今日既遣之當島守護人河内五郎義長同送狀於親光是平氏悉滅亡訖不成不審早可令歸朝之趣載之十一月十二日辛卯因幡前司廣元申云世已澆季梟惡尤得秋也天下有叛逆輩之條更不可斷絕以此次諸國交御沙汰每國衙莊園被補守護地頭者强不可有所怖早可令申請給云々二品殊甘心以此儀治定廿八日丙午補任諸國平均守護地頭不論權門勢家莊公可充課兵粮米段別五升之由今夜北條殿謁申藤經房卿

百練抄云文治元年十月廿八日源二位依申請可令補諸國守護之由被下院宣云々彼代官北條四郎時政上洛

○按前に引く所の吾妻鏡によるに十月は十一月の誤なるへし

吾妻鏡云文治二年三月一日己卯諸國被補總追捕使幷地頭內七箇國分北條殿被拜領畢而深存公平去頭上表地頭職(中略)於時政給七箇國地頭職者各爲令遂勸農候可令辭止之由所令存候也於總追捕使者彼凶黨出來候之程且爲承成敗可令守補之由所令存知也三年二月九日辛巳有大夫屬定康關東之功士也彼近江國領所平家在世之時者稱源家方人被收公滅亡今又守護定綱爲兵粮米點定之依之企參上募申有勞之間停止傍狼藉如元可領掌之趣今日被仰下

長門國守護職次第云土肥次郎實平號總追捕使佐々木四郎左衞門高綱自大將殿文治二年給之七月十三日下國號守護職佐々木太郎判官貞綱高綱舍兄守護代甥栖次公久

吾妻鏡云正治元年二月六日戊辰羽林殿下去月廿日轉左中將給同廿六日宣下云續前征夷將軍源朝臣遺跡宜令彼家人郎從等如舊奉行諸國守護者十二月廿九日丁亥以小山左衞門尉朝政補播磨國守護職畢住國家人等相從朝政勤仕內裏大番總可致忠節也朝政可沙汰事者謀叛殺害人事計也相交國務不可成敗人民訴訟凡觸事不可煩國中住人之旨被仰含云々

又云承元三年十二月十五日乙亥近國守護補任御下文備進之其中千葉介成胤者先祖千葉大夫元永以後爲當莊檢非違所之間右大將家御時以常胤被補下總一國守護職之由申之三浦兵衞尉義村者祖父義明天治以來依相交相模國雜事同御時檢斷事同可致沙汰之旨義澄承之訖之由申之小山左衞門尉朝政申云不帶本御下文曩祖下野少掾豐澤爲當國押領使如檢斷之事一向執行之秀郷朝臣天慶三年更賜官符之後十三代數百歲奉行之間無片時中絕之例但右大將家御時者建久年中亡父政光入道就讓與此職於朝政賜安堵御下文許也敢非新恩之職稱可散御不審進覽彼官符以下狀等其外國國又帶右大將家御下文訖縱雖犯小過輙難被改補之趣有其沙汰向後殊不可存懈緩之由面々被仰合

同脫漏云安貞元年閏三月十七日丙申諸國守護地頭所務之事貞應二年任御下知狀市津料供給雜事赤銅等事可停止守護所張行事已下條々被觸仰

吾妻鏡云寬喜三年五月十三日今日有被定下條々先諸國守護人者大犯三箇條之外不可致過分沙汰檢非違所者廻寬宥之計可專乃貢勤之由云々

東寺文書云東寺御領若狹國太良庄雜掌重言上云々當地頭親父若狹次郎兵衞尉忠季建久六年補任當國守護正治二年遠敷郡三方郡被補二郡總地頭大番勤仕之雖然人夫召仕之外無別煩建仁三年出羽前司家長遠敷郡同給九箇所地頭太良庄此內也十箇年雖令知行無其煩承久二年次郎兵衞入道忠季守護地頭共以返給之其時當地頭舍兄兵衞尉忠時大番勤仕之是又人夫召仕之外無煩三代之例如此云々○按一國の守護たる者國內の地頭の闕しとき申給りて其所の地頭を兼る事は本文に依てしるへし

貞永式目云諸國守護人奉行事右右大將家御時所被定置者大番催促謀叛殺害人附夜討强盜山賊海賊等事也而至近年分補代官於郡鄕充課公事於莊保非國司而妨國務非地頭而貪地利所行之企甚以無道也抑雖爲重代御家人無當時之所帶者不能驅催兼又所々下司莊官以下假其名於御家人對捍國司領家下知云々如然之輩可勤守護所役之由縱雖望申一切不可加催

吾妻鏡云嘉禎二年十月二日丙戌六波羅飛脚參着申云自去月中旬之頃南都蜂起構城郭巧合戰六波羅遣使者雖相宥彌倍增云々五日己丑被經評議爲鎭南都騷動暫大和國置守護人沒收衆徒知行莊園悉被補地頭畢又相催畿內近國御家人等塞南都道路可止人之出入之由有議定被撰遣印東八郎佐原七郎以下殊勝勇敢壯力之輩衆徒若猶成敵對之儀者更不可有優恕之思悉可令討亡云々又南都領在所悉不可被知食之處武藏得業隆圓密々與其注文於佐渡守基綱就送進關東被新補地頭云々六日庚寅大和守護職等御下文被遣六波羅云々十一月一日甲寅六波羅飛脚參着南都去月十七日夜破城郭退散是於所領被補地頭被

塞二闕々一間失二兵粮之計一難レ聚二人勢一之故也云々十三日丙寅六波羅飛脚到着南都蜂起落居自二去二日一僧綱已下歸二寺闕二寺門一行二佛寺一云々十四日丁卯南都事有二沙汰一衆徒静謐之間止二大和國守護地頭職一如レ元可レ被レ付二寺家一云々〇按これより後足利家の時までも大乘院一乘院兩寺務として大和一國の事を興福寺より沙汰せり其他の國々は佛寺より一國を成敗することはきこえす

又云寛元三年二月十六日辛巳諸國守護人沙汰事有二其定一西國守護奉行事於二鎭西一者依レ爲二遠國一不レ相二鎭狼藉一之間任二右大將家御時之例一可レ致二沙汰一之由可レ被レ仰二遣六波羅一云々

新編式目追加云西國守護人奉行事於二鎭西一者依レ爲二遠國一不レ相二鎭狼藉一之間任二大將家御時之例一可レ致二沙汰一之由被二仰下一畢如レ不レ可レ依二御式目一其外西國者任下被二定置一之旨上可レ致二沙汰一之由可下令二下知一給上也寛元三年五月九日相模守殿武藏守判〇按前なる吾妻鏡と此文とを合せ考ふるに筑紫九國の守護人は貞永の制によらす舊例のまゝに沙汰せしと見ゆ

吾妻鏡云寶治元年十一月廿七日丙子畿內諸國守護地頭等所務事有二散亂子細一之由依レ令二風聞一今日有二其沙汰一所レ被レ仰二遣六波羅一也其詞云諸國守護地頭等遂二內檢一責二取過分所當一之間難レ令レ安二堵土民百姓一非レ就二國司領家目錄一可レ致二沙汰一之由可レ相二觸守護地頭一云々

又云建長二年三月三日己巳今日諸國守護檢斷事有二其沙汰一殺害事如二守護人等申一者可レ請二取其身一之處郡鄕地頭等搦二進六波羅一條無レ謂云々如二地頭等申一者搦二渡守護所一之處不レ論二輕重一卽放免之間還而依レ有二其煩一召二進六波羅一云々就レ之被レ仰二遣六波羅一云守護成敗事被レ定二置諸國一之間可レ被レ加二下知一但地頭等中若致二無道一者守護人者就二訴申一尋明可レ被二注申一殊可レ有二御沙汰一也云々

新式目云弘安七五廿七評一就二犯人在所一可二斟酌一事於二本所一圓之地一者可レ相二渡犯人一之由可レ相二觸彼所一若不二敍用一者可レ注二申事由一至二關東御分所一者守護之綺雖レ無二先例一於二今度一者可レ致二其沙汰一一獄舍事一官食事一兵具事以上三ケ條爲二守護役一可レ致二沙汰一

貞永式目追加云弘長新制云可下仰二諸國守護地頭等一令レ禁二斷海陸盜賊山賊海賊夜討强盜類上事諸國守護地頭等可レ致二其沙汰一之子細被レ載二式目一訖而不沙汰之由依レ有二其聞一如レ此惡黨等不レ可二見隱聞隱一之旨雖レ被レ召二起請文一於二御家人等一猶以不二斷絶一云々早仰二國々守護所々地頭一殊可レ被レ加二懲肅一此上猶惡黨蜂起之由於下有二其聞一所上者云二守護一云二地頭一可レ被レ改二補其職一矣守護人者三ケ條之外不レ可レ致二過分之沙汰一若背二此式目一相二交自餘事一者或國司領家之訴訟或就二地頭土民之愁鬱一非法之至爲二顯然一者被レ改二所帶之職一可レ補二穩便之輩一也又至二代官一可レ定二一人一也結解難澁之輩者任二申請員數一可二成敗一猶對捍者重以二使者一尋二問實否一未濟之條無レ所レ遁者可レ改二所職一但於二少分一者早速可レ致二沙汰一至二過分一者三ケ年中可二辨濟一也猶背二此旨一令二難澁一者可レ被レ改二所職一也弘安七年〇按本書月日をのせされとも新式目によりて考ふれはこれ卽弘安七年五月廿七日の評定なり

增鏡云くめのさらやまむかしこそしゆりやうとも任の程その國をしたゝめおこなひしかこの頃はたゝ名はかりにていつくにもしゆこといふもの目代よりはおそましきをすゑたれはふけのまひきにてのみ大やけさまの事はよろつおろそかにしける

太平記云武家繁昌記元曆年中ニ鎌倉ノ右大將賴朝卿追二討平家一而有二其功一之時後白河院叡感之餘ニ被レ補二六十六箇國之總追捕使一從レ是武家始テ諸國ニ守護ヲ立莊園ニ地頭ヲ置(中略)朝陽不レ犯トモ殘星光ヲ奪ハル習ナレハ必シモ武家ヨリ公家ヲ蔑如シ奉ルトシモハ無レトモ所ニハ地頭强シテ領家ハ弱ク國ニハ守護重シテ國司ハ輕シ此故ニ朝廷ハ年々ニ衰ヘ武家ハ日々ニ盛ナリ〇按已上廿一條は鎌倉將軍家の時の守護なり

梅松論云保元平治治承より以來武家の沙汰として政務を恣にせしかとも元弘三年の今は天下一統に成しこそめつらしけれ君の御聖斷は延喜天曆のむかしに立歸て武家安寧に比屋謳歌しいつしか諸國に國司守護を定め卿相雲客其位階に登りし體實に目出度かりし善政なり

太平記云諸大將恩賞條先大功ノ輩ノ抽賞ヲ可レ被レ行トテ足利治部大輔高氏ニ武藏常陸下總三箇國舍弟左馬頭直義ニ遠江國新田左馬助義貞ニ上野播磨兩國子息義顯ニ越後國舍弟兵部少輔義助ニ駿河國楠判官正成ニ攝津國河內名和伯耆守長年ニ因幡伯耆兩國ヲ被レ行ケル其外公家武家ノ輩二箇國三箇國ヲ給リケルニサシモノ軍忠有シ赤松入道圓心ニ佐用莊一所計ヲ被レ行播磨國ノ守護職ヲハ無レ程被二召返一ケリサレハ建武ノ亂ニ圓心俄ニ心替シテ朝敵ト成シモ此恨トソ聞エシ其外五十餘箇國ノ守護國司國々ノ關所大莊ヲハ悉公家被官ノ人々拜領シケル〇按こゝに其國を給はるとあるは守護になされしをいへるなり

又云諸國朝敵蜂起條備前國住人兒島三郎高德カ許ヨリ早馬ヲ立テ申ケルハ備前國ノ地頭御家人等吉備津宮ニ馳集テ朝敵ヲ相待ツ處ニ淺山備後守備後ノ國ノ守護職ヲ賜テ下向スル間其勢ヲ幷テ同二十八日福山ニ押寄責戰シ日高德カ一族等大手ヲ責破テ已ニ城中ニ打入ル云々

長門國守護職次第云輔大納言殿守護代山田入道千惠
若狹國守護職次第云山名伊豆守時氏文和二年七月宮方よ
り給之但同廿七日歸洛了（○按已上五ヶ條は公家より補せられし守護職なり）
建武式目云諸國守護人殊可被擇政務器用事如當時
者募軍忠被補守護職歟可被行恩賞者可充給
莊園乎守護職者上古之吏務也國中之治否只依此職尤
被補器用者可叶撫民之義乎
同追加云諸國守護人事（○建武五後七廿九御沙汰奉行諏訪大進房圓忠）右被補守護
之本意爲治國安民也爲人有德者任之爲國無益者
可改之處或募勳功之賞或稱譜第之職押妨寺社本
所領管領所々地頭職預置軍士充行家人之條甚不
可然固守貞永式目大犯三箇條之外不可相綺爰近
年不敍用引付等之奉書不及請文徒渉旬月多累
催促慾欝之輩不可勝計政道之違亂職而由斯仍就違
輩之科條須有改定之沙汰矣
太平記云（公家武家榮枯易地條）前代相模守ノ天下ヲ成敗セシ時諸國ノ
守護大犯三箇條ノ檢斷ノ外綺ノ事無リシニ今ハ大小ノ事
共ニ只守護ノ計ヒニテ一國ノ成敗雅意ニ任スレハ地頭御
家人ヲ郎從ノ如クニ召仕ヒ寺社本所ノ所領ヲ兵粮料所ト
テ押ヘテ管領ス其權威只古ノ六波羅九州ノ探題ノ如シ
又云（秀詮兄弟討死條）攝津國ニ不慮ノ事出來テ京勢若干討レニケリ
事ノ起ヲ尋ヌレハ當國ノ守護職ヲハ故赤松信濃守範資無
二ノ忠戰ニ依テ將軍ヨリ給リタリシヲ範資死去後嫡子大
夫判官光範相續シテ是ヲ拜領ス而ルヲ去年宰相中將義詮
朝臣五畿七道ノ勢ヲ率シテ南方ヲ被責時光範カ軍用ノ
沙汰毎事不足ナリト將軍近習ノ輩共ツフヤキケルヲ佐々
木佐渡判官入道道譽能次テトヤ思ケン南方ノ軍散シテ後
光範差タル咎モナキニ攝津國ノ守護職ヲ可被召放由
ヲ申テ則我恩賞ニソ申給リケル
又云（淸氏叛逆條）加賀國ノ守護職ハ富樫介建武ノ始ヨリ今ニ至
ルマテ一度モ變スル事無シテ而モ忠戰異他成敗依不
暗恩補列祖ニ復セシヲ富樫介死去セシ刻其子未幼稚也
トテ道譽尾張左衛門佐ヲ聟ニ取テ當國ノ守護職ヲ申與ン
トス細河相模守是ヲ聞テサル事ヤ可有トテ富樫介カ子
ヲ取立テ則守護安堵ノ御敎書ヲソ申成ケル
又云（山名京兆被參御方條）ケニモ此人御方ニ成ナラハ國々ノ宮方力ヲ
落スノミナラス西國モ又可無爲トテ近年押ヘテ被領
知ツル因幡伯耆ノ外丹波丹後美作五箇國ノ守護職ヲ被
充行ケレハ時氏父子ノ榮花時ナラヌ春ヲ得タリ
花營三代記云應安元年六月十七日寺社本所領事（中略）
以本領誤被成御下文地事被充行替之程先本所
與給人各半分可爲知行不可有守護人之綺矣
鹿苑院殿御元服記云禁裏進物事（後日有其沙汰被進之）砂金百兩（兩分本法銀折數）
太刀一腰（皆銀）鞍馬一疋（鹿毛切付唐皮當日御沙汰仁自管領進上之）御使（能直持參執奏）禁裡御
進上金代等諸國守護役（○按永享元年普廣院殿御元服の時も禁裏へ進せられし金代は諸國守護役たるよし松田長秀記に見えたり）
東寺文書云守護方催促狀案（正守護殿）南方在陣之間人夫一人事
爲雇分可被沙汰遣非安宗六方候由仍執達如件永
和元年七月廿五日（○按正守護殿とは守護代小守護代等にむかへていへるなり）
後愚昧記云永和四年十二月廿三日傳聞紀州守護山名修理
大夫補之美作國相兼知行也
明德記云山名陸奧守小林ヲ呼テ宣ヒケルハ若軍利有ハ爭
フヘキ人アルヘカラス御分執事ノ職ニ居シテ毎年ヲ申沙
汰シ給ヘト宣ラレケレハ小林良有テ申ケルハ當家ノ御事
ハ先年御敵ニナラセ給タリシカトモ御後悔有テ故殿御歸
參ノ後御一家ノ間ニ十一箇國ノ守護職ヲ御拜領ノミナラ
ス諸國ノ御領共幾千萬ト申限モ候ハス是等ハ皆御所樣ノ
御恩ニテ候ハスヤ云々
又云奧州四箇國ノ守護ニテ坐シカハ恩顧芳志ノ若黨ノ外
一家ノ被管タルモノ一二万人モ有リツラムニ軍難儀ニ及
ヒシカハ思々ニ迯散テ氏淸ノ討死シ給所ニテ一人モ供ヲ
セサリケルハ言ノ葉モ無ウテサヨ（中略）此奧州丹波一國
ノ守護タリシ時モコソ有リツラメ今ハ四箇國ノ管領トシ
テ何事ノ不足サニ此謀反思立ケント申ニ貧クシテヘツラ
ハサルハ有トモ富テヲコラサルハ無ト云理リト覺エタリ
事ニ觸テ惡事ヲノミ振舞給シカ共公方ヨリ補任ノ守護ナ
レハ恐ヲ成申テ欺人モ無リシヲ我權勢ヲ憚リテ世ノ人オ
ツルソト意得テ今度ノ大逆ヲ企ラレシ心ノ程コソ短慮ナ
レ（中略）近國ノ事ハ申スニ及ハス中國西國一時ニ亡テ新
補ノ守護何レモ眉ヲ開シハ希代ノ不思議ト覺エタリ
又云畠山右衛門佐ノ兵ニ能登國ノ住人ニ熊來左近將監高
田兵部丞同民部丞三人ナリ近年一所懸命ノ地ニ離テ牢籠
ノ身トナリケルカ當國ノ守護ニテ坐シケレハ右衛門佐ノ
方ニ名字ヲ懸テ左京シテ有ケルカ云々（○按御家人たる者も管領をはなるれは守護の家人となることこの文にて知へし）
又云明德三年正月四日今度ノ闕國共諸大名ニ任ラレケル
畠山右衛門佐基國ニハ山城國細川右京大夫賴元ニハ丹波
國一色右馬頭滿範ニハ丹後國赤松上總介義則ニハ美作國
大內權大夫義弘ニハ和泉紀伊國兩國ヲ拜領シ山名宮內少
輔時昭ニハ但馬國右馬頭ニハ伯耆ノ國佐々木治部少輔高

詮ニハ隱岐國出雲二箇國ヲ給又一色左京大夫詮範ニハ小國ノ守護ヨリモ大莊ノ恩補ニハシカストテ若狹ノ國在所稻積ノ莊勳功ノ賞トシテ行ル凡守護ノ事ハ先代ノ職タリ此在所ノ事ハ分國ノ內ノ大莊ナル間殊ニ畏由ヲ申サレケル

東寺文書云東寺領山城國殖松東庄巷所事任二去十一月七日御敎書之旨一退二中御門宰相雜掌一可レ被レ沙二汰付下地於寺家雜掌一之狀如レ件應永廿六年十二月廿七日三方山城入道殿花押（押紙云侍所一色左京大夫義範于レ時山城守護〇按三方氏は守護代なるへし）

建內記云正長元年十月十九日兩奉行（清和泉守秀定 齋藤加賀守）爲二御使一入來內宮役夫工米攝津丹波讃岐三箇國事依二守護故右京大夫入道道歡他界一被レ憚二禁忌一去年以來延引了云々

季瓊日錄云文正元年二月十七日湯山湯沐御暇之事伺レ之卽免許之由被二仰出一仍途中警固之事依二攝津國守護一於二細河右京大夫殿方一被二仰付一也

土岐家聞書云當方へ瑞龍寺殿御時慈照院殿御成にて親世太夫能を仕りて万足下さる丶也云々三管領幷三ヶ國の守護職は每年の御成に每度百貫也當方に今濃州一ヶ國也五千足可レ然と云々

蜷川親元記云文明十三年七月十日癸未山城國守護職事爲二御料所御代官一侍所赤松殿（兵部少輔政則）に被レ仰二付之一仍守護代職事は所司代浦上美作守則宗に可レ被二申付一候由被レ仰二出之一

宇津山記云卅餘年のあなたより都のかたはらにしてこゝかしこ田舍にも行かよひこしのしらねもたひ〲こえて越後守護殿（上杉安房守房定）津の國にすむ能勢因幡守賴則（攝津源氏細川被官）三河國牧野古白（今橋城主）といひし隱者さては京ちかき人のなさけにておのつから小野の炭小原の薪ともしからすそありし

大舘常興記云天文九年二月九日日行事攝より各へ折紙在レ之明後日より御門役事たれ〲に可レ被二仰付一哉の事重て細川播州へ可レ被レ仰候也惣別和泉守護はもとより花御所四足一季（三ヶ月）つゝ相勤申候事にて候と存候旣只今御事かけ候間今月中被二勤申一候やうにと以二御門役奉行一可レ被二仰付一歟と存候由申レ之也十一年五月廿三日能登守護畠山匠作入道とうふく御免事內々御尋旨佐申レ之間如レ此一紙に言二上之一能登の守護畠山匠作入道とうふく御免の事くるしからす令レ存候むかし三職巳下少々御免にて着用候つるよし申つたへたる御事にて候此趣よろしく可レ有二言上一候五月廿二日左衞門佐殿常興

東鑑記云（小弓御所發向條）其頃上總國ノ守護代武田豐三眞里谷三河守ト同國ノ侍原ノ次郞ト云者上總ノ小弓ノ城ニ在城シテ所領ヲ論シ合戰度々ニ及ヒケル是ハ下總守護人千葉介カ家來ナレハ千葉勢ヲ加勢ニ請テ武田每度打負ケル

樵談治要云當時の守護職はむかしの國司に同しといへとも子々孫々に傳て知行をいたす事は春秋の時の十二諸侯にことならす所詮賴朝の大將よりこのかた守護職はおのおの武將の代官をうけたまはるよしにて當代にいたるまてもその例をおそはるゝうへは早く定おかれたる御法を守りかきりある得分の外は其いろひをなさす上には事君の節をつくし下には撫民の仁を施して廉直のほまれ當世のきこえ陰德の行末代におよほさは冥慮にも叶ひ榮華を子孫につたふへきにやともすれは無道をかまへ猛惡をさきとする事返々思案なきにあらすや貞永の式目には或は國司領家の訴訟により或は地頭土民の愁欝につきて非法のいたり顯然ならは所帶の職をあらためて穩便の輩に補すへき也又建武の御法には守護職は上古の吏務なり國中の治否たゝ此職による尤器用に補せられは撫民の義に叶へき歟と云々式條のことくならは時にしたかひ人をえらひて其職に補せらるへきよしみえたるにやしかるに當時の體たらく上裁にもかゝはらす下知にもしたかはすほしいまゝに權威をもて他人の所領を押領し富に富をかさね欲をくはふる事はさしあたりて事かけたるゆゑにはあらすたゝ無用の事のしたきと人の數をおほくそへんとのためなるへしたゝ世のそしりをうけ人のうらみをおふは無理非道の押領をなすゆゑなり又人數のほしき事も誰かはねかはしからぬ事にあらされと正體なき家人に所領をおほくあて行へはのち〲は過分に成ていさゝかもきにあはぬ事のあれは主をもとりかへんとすかゝる事はまのあたりに見及事ともなり云々（〇按巳上廿三條は足利將軍家の守護職なり）

蜷川親元記云文明十年四月廿日壬子山城國守護職事管領畠山殿（政長）へ被二仰出一御禮御申候七月十八日戊寅城州守護職畠山殿御判物者自二布施方一直々可レ進之由御返事あり

賀越鬭諍記云（從大坂越前守護職居置條）去程ニ桂田富田滅亡シテ後越前國ハ大坊主衆一揆等カ進退スヘシト思慮大坂ヨリ下間筑後守ヲ越州ノ守護ニナシ杉浦法橋ヲ大野ノ郡司トシ下間和泉守ヲ足羽ノ郡司ト定七里三河守ハ上郡府中邊ヲ進退セリ云々

多聞院日記云天正三年三月廿五日去廿三日ニ塙九郞左衞門當國ノ守護ニ被二相定一了云々先代未聞ノ儀惣ハ一國別

ハ寺社滅亡相究者也云々四月二日伊源横島ヨリ歸ル對面了塙九郎左衛門入魂當國守護ハ大旨一定也云々

惟任征伐記云惟任合體之侍丹後國守護長岡兵部大輔藤孝大和國守護筒井順慶京都之趣令二注進一

柴田退治記云美濃國守護池田紀伊守之助越前一國加賀半國守護惟任五郎左衛門尉長秀能登一國加賀半國守護前田又左衛門尉利家越中守護佐々内藏助成政丹後守護長岡越中守忠興丹波守護羽柴御次丸秀勝播磨但馬守護羽柴美濃守秀長因幡守護宮部善浄坊繼潤備前美作守護宇喜田直家者先年播州別所謀叛之剋背二西國一秀吉一味國之危事雖レ及二度々一以二無二一覺悟一成二入魂一依レ之直家逝行之後召二出嫡男一賞二猶君一分二名字一號二羽柴八郎秀家一分國之外所所賜二領知一者也

天正記云秀吉賀州發向條其時越後の守護長尾喜平次秀吉にこうをなしはた下にそくするてう人しちをとり五月八日あつちにいたりかいちんす

按守護のつかさは古の追捕使押領使等の職掌に當れること既に前條にも述しか如し文治元年に鎌倉殿の奏請のまゝにはしめて諸國一同に惣追捕使を置き地頭を補せられしかは天下の間一毛はかりの地も武家の綺にあつからぬ所はなくなりぬさて幾程なく惣追捕使の名をあらためて守護と稱することに定められたり本文に引たる吾妻鏡文治元年同二年同三年正治元年等の文をみて知へし又長門國守護職次第に土肥實平をは惣追捕使と稱し佐々木高綱より末は守護職とあるも其證なり但これより前にも國郡を警衛するものを守護といひしことのありけるを此時頃て便に付て惣追捕使の名を廢し諸國悉く守護に改められしなり吾妻鏡治承四年十月廿一日に以二安田三郎義定一爲二守護一遣二遠江國一被二差遣一とあり元暦元年二月十八日には播磨美作備前備中備後已上五ヶ國景時實平等遣二專使一可レ令二守護一云々とありこれら正しき名目には非れとも守護の稱は此時始れりさて景時實平等は件五ヶ國の惣追捕使たるよし文治元年四月の所にみゆされは惣追捕使を守護と云る事もありしなるへし又元暦元年三月廿日に大内冠者惟義可レ爲二伊賀國守護一云々とみゆ是らの文に仍ても元より某國守護といへるかありしなるへししかく名を改められしは前條にもいひし如く武家の被管ならぬ押領使惣追捕使なといへるかあるをきらはれしなり凡守護を補せられしに二義あり一は勳功ありける者を其賞として補せられしなり一は文治より已前その國の惣追捕使または押領使檢非違使たりしもの、御家人に列するをそのまゝ守護になされしなり吾妻鏡承元三年十二月十五日の條にみゆ既に本文に引たりこれのみならす國の舊家たるもの御家人となりて本國の守護に補せられしものまゝあり諸家の系譜にみゆこれ其つかさとる所同しけれはなり凡守護の職掌は檢斷をむねとするは勿論なれと鎌倉右大將家の時定められしは大番役の催促其國の地頭御家人を催して番役にしたかはしむるなり謀反人殺害人の檢斷すへて三ヶ條を專務とす其外にも強盜竊盜山賊海賊等の檢斷をもかね行へり又軍役ある時は國中の地頭御家人を催し國民を夫役にあてそれらを率ゐて事に從ふならひなり文治の制にて公田私田より出す段別五升の兵粮米は地頭の收納にて守護は預らされと非常の事あれは其費に給すへき料を國中に充課せてめすこととなりもとより郡郷庄保の差別あることなし貞永式目に充二課公事於庄保一とみゆるは是なり前にいひし如く定日兵粮米を收むることはなけれと其國の庄郷に地頭の闕職ある時守護たるもの申請て兵粮料の爲にやかて其所の地頭職を攝するものもまゝあり鎌倉殿の時初めの程は時々守護人を改補せられて必其職を世々にすへき定めにはあらさりけるかいつとなく世職のことくなれり然れとも罪あれは所職を放たるゝも常の事にはありけるなり北條家亡ひて建武一統の世となりし時には公家武家の分ちなく諸國の守護國司に補任せられしかといく程もなく足利殿兵權をとられて武家よりも守護を置れけれは國によりては彼と是と守護二人ある所もいてきて戰爭絶る事なかりしか四十餘年を經て南北一統に歸せしかは其後は又武家よりのみ守護を置ることゝなれり二ヶ國かね領せし族も聞ゆ三ヶ國の守護たる人は其人のしなあかれる由は土岐家聞書にみゆるかことし應仁の亂後諸國の守護各在國して幕府の令に從はすなりしより國々の地頭御家人はいつとなく守護の家人となりしかは守護たる輩は今の世の大名のことときものとなれり但天正の末まては國士といひて全守護の家人にならさりし者もまゝあり其已後にいたりては悉く守護の家人となりしなりされは其頃よりこなたには守護地頭の職掌いにしへとは一變して各守護家の法度に任せて幕府の命を守る事絶果たり剩織田朝倉三好長曾我部等の如きものはいつれも守護代眼代の類なりしか勢に乘して主家の國を奪ひみつから一國の守護となれり其外にもかゝるやからすくなからす幕府の勢威これを制すること能はさるのみならす返てその力をかる程の世となりしかは彼輩の請に任せてあらぬ筋の輩をも其國の守護たるへき命を下すたくひいてきて武家の古法は悉く廢絶せり織田豐臣の時にいたりては天下の舊族多く滅ひて新家の輩國々のあるしとなりしかは國政法度いよいよあらたまり守護といふ稱のみ殘れる事となりぬさて慶長よりこなたには守護の稱をはとゝめられて正しく今の制度になされしなり

○半國守護又稱半守護

豫章記云右大將賴朝卿御書曰伊豫國道後七郡事爲ニ守護職一可レ有ニ管領一道前事者申ニ付佐々木三郎盛綱一候也諸事申合可レ有ニ沙汰一候得能冠者事者勿論也恐々謹言元曆二年七月廿八日河野四郎殿　賴朝然所九郎判官殿被レ失故通信同心ノ由ヲ被レ訴籠々喜多郡ヲ似テ梶原平三景時ニ賜守護ヲハ盛綱ニ被レ補畢又梶原被レ失時以ニ的矢一景時ヲ射タリシ勳功ニ依テ宇津宮賜レ之然共文治五年奥入合戰ノ時阿津賀志山ノ先陣懸タリシ軍功ニヨリ奥州三ノ迫ヲ給リ亦爲ニ喜多郡替一久米郡ヲ賜ル建治又半國守護職ヲ給ル元久元年閏七月御家人卅六人ヲ管領建曆三年新居郡西條莊ヲ賜建保六年一國ノ守護ニ被レ補了

相馬家傳云陸奥國東海道守護事小山出羽判官可レ致ニ沙汰一之狀如レ件觀應二年十月廿六日相馬出羽守殿右京大夫

〇按右京大夫は奥州一方管領吉良貞家なりこゝにいへるは陸奥の内海道四郡の守護職なり陸奥はもとより大國なるか故に所々に守護を置れしなり是は全く半國守護にはあらされともその類なるをもて爰にのす次の條これに准すへし

又云海道四郡守護事先國司御時被レ充ニ行之一然者今度最前令レ致ニ忠節一給者如レ元不レ可レ有ニ相違一之狀如レ件正平六年二月十三日相馬出羽前司館花押　〇按これは吉野行宮より命せられし守護職なりこの外康安二年に足利家より相馬讃岐守に命せられし狀ありそれには東海道四郡檢斷職事守ニ先例一可レ致ニ沙汰一云々とあり卽守護の事なり

康富記云文安四年五月十七日戊申或仁語云加賀國守護職事富樫次郎(童名龜童丸)并叔父安岡兩人半國充可ニ知行一之由管領之沙汰落居云々

應仁記云(赤松家條)赤松次郎赦免事子細有ヘシ(中略)嘉吉ニ雖レ行ニ治罸一今度勅許有テ寬宥也改則五歲長祿三己卯年赦免綸旨ニ御教書副ラレ先闕國ナレハトテ加賀國半國綸旨ニ御教書ヲ添ラレ被ニ成下一ケリ

齋藤親基記云寬正六年十一月十日御卽位方寨帳典侍御訪并綾綿絹等代沙汰分(中略)一細川阿波入道(御訪廿九貫四百文和泉半守護上總十五貫)代廿二貫五百文　一細川刑部(常有同前)一富樫鶴童(御訪同前上總十一丈代十五貫文)一赤松次郎法師(同前于レ時加賀半國守護)云々十三日午剋若君(義尚)御誕生(御臺樣)御臺所細川刑部少輔常有(泉州半守護)作事以下諸事兩守護相共沙汰也

應仁記云(洛中大焼條)冠木門ノ武士方ハ讃州相模土岐京極能登美作兩大夫備中守護因幡守護和泉兩守護淡路守護云々

江濃記云(佐々木兩家わかり條)惣領定綱の子孫江州の家督を繼ける中にも定綱の一男廣綱承久亂に院方に有しかとも其弟信綱關東より責上り忠功比類なかりしかは近江守に補任し惣領を繼けり信綱の子息泰綱父の跡を繼近江守に補任せらる今の六角の元祖是なり其舍弟對馬守氏信とて將軍家の近習にて今の京極家の元祖是なり元弘の亂にも惣領の六角方は六波羅の催促にしたかひ戰功粉骨を盡し馬場か崻の戰場より京都の降人に參られしかは其身は出仕を止められ子息氏賴名代として京都へ指上られける又京極家には佐渡守入道道譽は尊氏卿の味方にて一度も不忠の事なく殊に惣領氏賴遁世の志有近江の國務の事道譽老人計にて惣領方をも离さし引しけるしかも尊氏卿義詮卿二代の將軍につかへ武家の政道を補佐し子孫四職の其一に撰はれ京極殿と稱し近江國十三郡の中八郡を六角方知行し五郡を京極方に支配す明德年中より京極殿又大名に成て出雲隱岐飛驒半國を知行し其勢惣領家にまさりけり

播州征伐記云抑播磨東八郡之守護別所小三郎長治對ニ羽柴筑前守秀吉一尋ニ矛楯之濫觴一天正六歲三月之初秀吉承ニ將軍之御下知ニ西國爲ニ征伐之備一下ニ向彼地一之事長治一味同心之故也

柴田退治記云越前一國加賀半國守護惟住五郎左衞門尉長秀能登一國加賀半國守護前田又左衞門尉利家

四國發向記云備前美作守護羽柴八郎秀家播州西郡守護蜂須賀彥右衞門尉正勝同小六家政父子黑田官兵衞尉孝高相加ニ上讃岐八島ニ云々

按半國守護又半守護ともいふ其職掌は全く一國守護のつかさに異なることなし初め守護を置るゝ時もと半國の檢斷を沙汰する職の御家人となりしを其まゝ半國守護になされしもあり又故ありて一國守護のなかはを放たれたる跡を給はりしもあるへし但鎌倉足利兩代何れも半國の守護は多からさりしなり織田豐臣の時に至りてもまれには半國の守護たるものなきにあらすされとも是は古法にならひしにはあらすもとよりの領地を其まゝ給はりて半國のあるしにてありしもあり又半國の闕所を其まゝ給はりしもありあるは舊領の多少に准して充られしもありしとみゆ自餘なへて前條にならひて知へし

武家名目抄第五十一册

塙檢校保己一編

職名部廿九下

○守護代（又稱守護代官）

吾妻鏡云正治元年十月廿四日癸未參河國内御寄附大神宮之莊園有六ヶ所而守護人藤九郎入道蓮西代官善耀被押妨之由自神宮依訴申之爲廣元朝臣奉行被尋問蓮西之處於六ヶ所者御奉免之後更以不交其沙汰之由善耀内々申之旨昨日進請文云々

長門國守護職次第云佐々木太郎判官貞綱守護代甥橘次公久

又云天野和泉守政景貞應元給之代官小田村左衛門尉

吾妻鏡云承元元年六月廿二日丙寅坊門亞相（信清）使者參著所被進仁和寺御室令旨也是紀伊國土民等亂入高野山企狩獵押妨主領和泉紀伊國守護代爲其張本爲關東御沙汰可被止狼藉之趣有寺門愁訴云々

正安元年六波羅下知狀云當保者爲氏澄開發私領之間下司職則重代相傳也云々角戸三郎朝守當保濫妨之時盛經仰六波羅

新編式目追加云謀叛之輩爲宗親類兄弟者不及子細可被召取其外都雜掌國々代官所從等事者雖不及御沙汰委尋明隨注申追可有御計之由自關東所被仰下也可令存此旨而稱謀叛被管輩無左右及追捕狼藉之由有其聞事實者甚不可然所詮其類可注申子細之狀如件寶治元年六月廿二日河内國守護代相模守判

東寺文書云東寺寶相寺少納言僧都行賀雜掌申伊賀國平梯庄領家職事重訴狀を以服部竹屋治部左衛門尉濫妨間先度御施行之處不事行云々太無謂所詮不日沙汰付雜掌可被執進請取狀更不可有緩怠之間可被下知守護代狀依執達如件文永二年十二月廿二日仁木右馬頭殿散位判

又云異賊降伏御祈事御教書案文如此於當國中寺社付頭實可被祈請之由可被相觸別當神主等且御祈之次第可被進注文歟仍執達如件弘安七年正月四日若狹國守護御代官殿右衛門尉在御判沙彌在御判加賀權守在御判

西琳寺文書云可禁斷守護代并地頭御家人頭於西大寺以下諸事致濫惡事右任今年四月十日關東御下知之可安堵之由所被載關東御下知也其外守護人越後禪門狀守護代眞々部左衛門尉施行關東御教書六波羅狀以下證文多之（中略）如二月十三日（不記年號）越後禪門狀者丹波國波々伯部保下司盛經折紙如此於官兵并大番者任先例可令勤仕云々如寬喜四年二月十九日守護代眞々部左衛門尉施行者官兵并大番役者任先例勤仕之由御教書十五日所下給也

貞永式目云諸國守護人奉行事右右大將家御時所被定置者大番催促謀叛殺害人（付夜討强盜山賊海賊）等事也而至近年分補代官於郡郷充課公事於庄保非國司而妨國務非地頭而貪地利所行之企甚以無道也云々至代官者可定一人也

吾妻鏡云寬元二年八月廿四日壬辰今日有臨時評定（中略）又自今出河殿被申事爲攝津前司師員以下條々也守護代兵庫大夫資範非法間事於鎭西守護成敗事者自右大將家御時以別儀被定置之間帶代々御下文所致沙汰也不可被准申餘國守護沙汰事也云々四年三月十八日丁未讃岐國御家人藤左衛門尉擬進海賊事彼國守護人三浦能登前司光村代官注申之間六波羅又被執申仍有沙汰神妙之趣殊及御感之由可仰含之旨被旨可致沙汰之狀如件永仁六年九月九日右近將監平朝臣判前上野介平朝臣判

長門國守護職次第云左京權大夫殿（時村）御代官左近大夫將監永仁六八十一著府任近江守及尾張守守護代吉良殿又小笠原入道蓮念下國（按御代官といふは中國諸州の代官をいひ守護代とあるは長門一國の代官なり已上十二條は鎌倉殿の時の守護代なり）

阿蘇大宮司惟澄申狀云惟澄屬五十餘人延元二年二月廿二日馳上甲佐嶽相催一族以下同三月廿二日打入豐田莊追拂地下凶賊之所號守護代賴尙之家人猶庭小太郎入道以下數百騎寄來之間懸合山崎原致散々合戰云々

園太暦云（關東政北條）文和元年三月一日今日國三位基經卿送使者云去十九日尊氏卿沒落大略不知行方於武藏國前守護代藥師寺一黨上椙一類等合戰御方乘勝了

建武式目追加云寺社本所領事（文和元十一十五御沙汰）嚴密可遵行之子細去七月以來載兩度事書之上就面々訴雖被成御教書寄事於世上物忩云守護云使節倚緩怠之間多以不事行云々難遁其咎但無勘錄者定有未盡之後訴歟所詮且取調先日散狀召出守護代并論人等尋究遵行難澁之旨趣陳謝無謂者准先例可勘申罪名亦

有二殊會尺一者隨二事體一加二糺決一宜レ經二評議一之由可レ仰二
五方之引付一云々
東寺執行日記云貞治二年八月四日 昨日赤松彦五郎 攝津國守護代
號二廣瀨一 候人猪能四郎來臨勸二一獻一了垂水庄事談合了九月十
日慶妙法師自二大成庄一上洛於二當庄一者去月廿五日守護直
施行今月二日打二渡下地一畢而敵方猿子美濃入道道宗代カ
コノ藤兵衛立二歸遵行之地一亂妨之間爲レ止二彼違亂一可レ被
レ遣二守護代宮内少輔狀於道宗方一之由申レ之庄家百姓道圓
同上洛旨趣同前矣
太平記云 上杉畠山流罪死刑條 壁草ノイツマテカ露ノ命ノカヽルヘキ
トテモ可レ消水ノ泡ノ流留ル處トテ江守ノ庄ニソ著ニケ
ル當國ノ守護代細河刑部大輔八木光勝是ヲ請取テ淺猿氣
ナル柴ノ庵ノシハシモ如何カ栖レント見ルタニ物憂住居
ナルニ警固ヲ居テソ置レタリケル
又云 師冬自害條 上杉民部大輔カ養子ニ左衛門藏人父カ代官ニ
テ上野ノ守護ニテ候シカ謀叛ヲ起テ鎌倉殿方ヲ仕ル由聞
エシカハ云々
又云 和田楠軍評定條 楠左馬頭正儀和田和泉守正武二人天野殿ニ參
シテ奏聞シケルハ云々湯淺山本恩地贄河野上山本ノ兵共
ハ紀伊國守護代鹽冶中務ニ付テ龍門山最初峯ニ陣ヲ張セ
紀伊川禿邊ニ野伏ヲ出シテ開合セ息ヲモ繼セス令レ戰ハ
極メテ短氣ナル坂東勢共ナトカ退屈セテ候ヘキ云々 ○按此一
條は南朝より置れし守護の代官なり下に引きたる武朝申狀これに同し
又云 和田楠與箕浦次郎左衛門軍條 此頃攝津國ノ守護ヲハ佐々木佐渡判官
入道道譽カ持タリケレハ其身ハ京都ニ有ナカラ箕浦次郎
左衛門ニ勢百四五十騎付テ國ノ守護代ニソ置レタリケル
菊池武朝申狀云武朝奉レ屬二將軍宮一令レ在二陣肥前國府一
運二諸方計策一之處今川仲秋相二率松浦以下之凶徒一打二出
博多一之間指二遣肥後國守護代武國一致二大綱合戰一追二散仲
秋一畢
江濃記云 雲州佐々木由來有條 佐々木黨此國を知行する事むかしより
今にたえす先代九代の代々には隱岐鹽冶此國を知行す其
後尊氏の御時山名しはらく當國の守護に補しけれとも守
護代は上郷三河守其子鹽冶四郎とていつれも佐々木の末
葉なり其後京極殿の領地となりて高詮持淸より又佐々木
家の國となり于レ今至て守護代も佐々木の門葉尼子伊豫
守七代迄此國の主と成事不思議の事ともなり
季瓊日錄云文正元年二月十一日 細川右京大夫殿以二秋庭
三郎左衛門尉一柳五荷折二合付狀幷當國守護代庭葉修理
亮柳三荷折二合付狀被レ贈レ之

賴印僧正袷詞云至德三年五月廿七日小山若犬丸打出テ下
野國祇園城ニ楯籠ヨシ同廿九日方々ヨリ早馬參ル處ニ當
國守護代木戸修理亮多勢ヲ率シテ同國フルエ山ニ陣ヲト
ル處ニ若犬丸勢競來テ散々ニ合戰ニ及ケル間守護勢打負
テ足利莊へ引退ク
明德記云河内ノ國ノ守護代遊佐河内守カ許ヨリ注進申ケ
ルハ和泉ノ國ニ奥州近日以外ニ合戰ノ用意ニテ只今打立
ヘキ體ニテ候
建内記云嘉吉元年十月廿八日辛酉花藏院重救法印入來高
家莊事全無二相違一但宇野次郎滿口 前代官也 未レ渡レ之彼舍弟十一
歳 屬二守護山名一依二彼威勢一對二地下一不レ可レ有二了見一之云
云宍粟郡郡司今月廿一日入二部件郡一欲レ入二高家一之處無二
其儀一就二前守護代官所一入二部柏野莊一已畢宇野館披露之
處宇野黜二其所之道一潛令レ居二住之一播磨國新守護 山名左衛門佐持豐
去十一日入部 守護代垣屋大田垣口口三人使 國中郡司伺二沙汰一居候仍赤松
播磨守滿政奉行云々
康富記云享德三年十月十九日丁酉參二管領一以二齋藤修理
亮一申入了丹州隼人保金泉增雖レ下二度々召文一不二出對一之
間第四度召文宛二守護代一發出候間可二仰付一候由令二申入一
了
又云康正元年十二月十二日癸丑鷹司前關白家雜掌申和泉
國五ケ畑年貢事及二拾ケ年一無沙汰云々事實者大不レ可レ然
所詮云二連年之未進一云二當年之西收一共以嚴密可レ被レ致二
其沙汰一之由被二仰出一候也仍執達如レ件康正元二月六日守
護代爲數判 貞基判 ○按爲數貞基は奉行人なり
文正記云從二文正元年丙戌七月中旬比一洛中騷動擬二天地一
諸國之軍兵充滿而不レ知二其員幾千萬一然間尾州守護代織
田兵庫助敏廣拂二遠州陣一少休二汗馬一甘レ氣在國仕云々
鎌倉年中行事云正月朔日公方様出御(中略)其後弓征矢ヲ
役人持參其次ニ沓行騰ヲ役人持參イタシ罷出後管領被管
武州守護代子或ハ孫或ハ兄弟等御車寄ノ立砂ノ前ニ御馬
御鞍ヲ於テ引立
鎌倉大草紙云武田信長は代々鎌倉の近習なりけるか成氏
關東御歸參の最前に馳參代々關東奉公の儀を申けれは御
感有て近習して有けるさて又甲州は京鎌倉動亂につきい
また守護代も不レ被二仰付一の間西郡は逸見押領して中郡
東郡は跡部上野父子押領して己かまゝにありけるかかく
ては公方の御とかめにあつかりあしかりなんと存そのこ
ろ道成入道浪人にて信長に扶助せられ武州府中に有ける
をまねき主と名付置國は一向己か儘にふるまひけり

應仁記云 三寶院落書條 七月廿五日細川衆能勢源左衞門尉賴弘同子息彌五郎モ爰ニテ討死シ赤松ガ名代加賀ノ守護代間島河內守モヤクラノ下迄責入ケルヲ大石ヲナケテ胄ヲ打破クレハ不レ叶討死ス

長門國守護職次第云大內權大夫殿 義興 御社參明應六年正月廿二日午剋御幣御取次杉兵庫助弘隆同年九月五日當國守護代役事內藤掃部助弘春御安堵也仍小守護代當府役勝間田左近將監十二月廿四日著府內藤殿御社參之事明應七年卯月廿二日御幣御頂戴在レ之

細川兩家記云永正元年九月初に與一淀の城へたて籠りける志かりといへとも政元の御內衆與一弟の與次を初めとして諸勢を催し淀の城へおしよせて川とも堀ともいはす責られける城の中にも爰をせんと、戰ひけれともさのみはいかてこらへつへき九月十八日申刻終に城落にけり（中略）去程に弟の與次は御かん有て此度の恩賞に桐のたうの御紋を被レ下三郎左衞門と改名なされ兄の與一か跡を賜りて攝津國上下守護代となり榮花にほこれり

勝軍地藏山軍記云 高政高屋城退出條 河內守護畠山高政は遊佐長教死去ノ後長教子息イマタ幼稚ナレハトテ安見美作守ヲ遊佐名代ニ河內守護代ニ定メラル

細川尹賢亭御成記云大永四年三月六日午刻御成（中略）是樣衆御禮申次第天竺孫三郎殿上野源四郎殿赤澤兵庫助麻植修理亮長塩亦三郎小河與一赤澤源次郎赤澤又三郎鬼窪源四郎 以上 右御太刀一腰 金千疋充 進上勢州披露あり御通ありて御酌日野殿御屋形樣守護代四人御禮申各持太刀進上香河美作守內藤彈正忠藥師寺九郎左衞門藥師寺與次是も御通あり御酌同前御進物悉翌日に以二目錄一御進上御屋形樣守護代四人是樣の衆進物何も一紙被二加書一云々 ○按御屋形とは細川高國をいへるなり

國府臺戰記云こゝに上總國の守護代にたけたのふんそう眞里谷三河守千葉の御內に原の次郎と所領をあらそふ事年久し

大舘常興記云天文九年三月十七日來廿三日より觀世太夫勸進猿樂可レ有レ之仍佐棧敷波多野 丹後守護代なり 方より內々富越かたへ申レ之候云々

伊達文書云奧州守護代事桑折播磨守牧野彈正忠兩人可レ存二其旨一條肝要候爲レ其指二下、孝阿一候猶晴光可レ申也九月廿四日伊達左京大夫とのへ 義輝 ○按已上廿七條は京都將軍家の時なり

安土日記云天正元年八月廿四日義景頸京都へ上セ獄門ニ懸サセラレ越前一國平均候間國中ノ掟ヲ被二仰付一前波播磨守守護代トシテ被レ置八月廿六日江北虎御前山迄信長御馬ヲ被レ納

加越鬪諍記云 越前江州守護代々條 天正元年九月二日淺井久政父子傷害而後信長江州越州兩國ヲ打捕玉ヒテ江州北郡ノ守護代ニ羽柴藤吉郎ヲ居置越州ノ守護職ニ前波九郎兵衞尉吉繼ヲ置テ一乘ノ谷義景ノ舘ニ居住セリ

按守護代は守護職たる人の代官にして全く國司の目代の如し是を守護代官とも稱し又は代官とのみいひし事もあり 代官といふには品々ありそは代官の條に出せり すへて守護の所職は何事にまれ守護代の預りきかさることとなし抑其人品多くは守護の子弟一門たる輩あるは其家人郎等の內おとなしき者を以て此職にをらしむもと私に補せし司にはあれと一國の成敗を執するか故に大家一家の家人なりとも此職に補せらるゝものは幕府にも祗候し謁見をもゆるさるゝ事なりこの故に守護代を補せんとては守護より幕府に申して後に命するならひとなれり 足利殿の世には關東をは鎌倉御所にて管領せられしかは京都へは申されさりしなり 守護の幕府に祗候する程は國に留守して萬事をすへ斷ること守護に異なることなしされと守護と共に他鄕に赴くことあるときは我門族家人の內にてさるへきものを小守護代とし所職を攝せしむる事なりはしめは守護代の家と定まれるはなくて事に堪たる者かはるかはるうけ給はり沙汰せしか世をふるまゝにいつとなく其家すち定まれることゝなりて其威風おのつから一國におほふか故に足利殿の季世にいたりては守護を放逐しみつから其職に代りてたくひもすくなからす又一國押領はなさねとも守護の被管をはなれて別に一家をなせしもあり織田豐臣の兩家兵權を執し時には天下の形勢一變せしかとも猶守護代の名は殘りしかと其意すこしたかへりそは全く一國の領主とするにはあらて假初に其地を守らしむる者を守護代ととなへしなり本より守護のあるにあらす所司なくて所司代を置れしたくひなり慶長已後はこれらの職名悉くすたれけれは今は絕てなきことゝなりたれと豐臣家以來の例にて大家の長臣たる者陪臣なから府に詣して謁見をゆるさるゝ事あるは全く古の守護代のなこりなるへし

○小守護代 又稱又代又代官

若狹國守護職次第云陸奧守重時朝臣 六波羅北殿 自二寬喜三年一御二拜領之一御代官原小二郎兵衞尉廣家（中略）次守護御代官加賀守殿自二延應元年一拜二領之一其代平左衞門入道

又云貞時朝臣御分國自弘安八年御代官工藤右衛門入道果禪其代林三郎入道道西○按貞時已後宗方宣時守護と志るしたる所にいつれも其代なり貞時より已前には見えす

長門國守護職次第云武藏守殿時師御代官駿河三郎殿弘安四閏七晦日下國又代官平內左衛門尉○按本書鎌倉將軍家の間は前後みな代官のみにて又代官といへるはなし

若狹國守護職次第云高時朝臣御分國自元亨四年八月御代官小馬三郎其代和久二郎頼基自正慶元年九月工藤次郎右衛門殿代佐々布又太郎左衛門殿又代同弟佐々布十郎○按こゝに又代といへるは小守護代の又代官なり次の條なるも同し其外には此たくひ見ゆることなし已上四條は鎌倉將軍家の時の小守護代なり

又云公家一同御分國司大藏權少輔代官山城前司其代賀來下總權守又代三郎入道意圓四月十八日意圓下著

又云尾張修理大夫入道道朝代官宍草上總介又代官安富

又云一色修理大夫入道信傳貞治五年八月より給之代官小笠原源藏人大夫長房後號三河守於安賀庄金輪院楯つくの間守護代押寄及合戰之處に手負出來打負て在所を燒拂はれ得替し了信傳御逝去之後小笠原三河守出家法名道鎭又代官武田右京亮重信同出家法名淨源應永三年正月廿五日死去子息左近將監長盛又代守護代○按注なる又代の守は衍なるへし本書信傳の子詮範詮範の子滿範の所にいつれも代官又代官あり

又云一色五郎義範守護代三方彈正又代官民部丞○按義範は滿範の子なり本書義範にとゞまるその後はなし

長門國守護職次第云大內左京權大夫殿義弘御社參永和元年三月廿一日御役人守護代杉信濃守重直其後杉大炊允儀安小守護代久佐備後入道源祐○按本書の記す所義弘の後義興の代にとゞまる其間代々いつれも守護代小守護代あり本文に御社參とあるは一宮へ參詣せしをいへるなり

東寺文書云守護方催促狀案守護代內奉行南方在陣間人夫二人事可雇給候之由候仍執達如件永和元年七月卅日矢野庄東寺方預所殿友房長氏季兼○按こゝに小守護代の名目はなけれとも守護代內奉行とあれは其職掌あたれるか故にこゝにひけり

應仁別記云寄手ノ遊佐カ內ニ馬場ト云初參ノ者勢數アリケレハニヤ先陣ヲ申付ケリ一仁ニ中村ト云者義就御座アレハ國ノ守護代遊佐ノ下代ナレハニヤ若江ニ殘置ケリ

蜷川親元記云文明十二年四月十日左衛門督殿より御使遊佐彈正和州への御內書の事早々御申御沙汰悅喜申候次和泉の小守護代片山にて候をかた岡と候そと御申かへ候は丶悅喜可申候御返事意得申候

長門國守護職次第云大內權大夫殿義興御社參明應六年正月廿二日午剋也同年九月五日當國守護代役事內藤掃部助弘春御安堵也仍小守護代當府役勝間田左近將監十二月廿四

日着府同日參宮○按社參宮共に一宮へ參詣するをいへるなり

宗長手記云吉川次郎左衛門頼茂淡路小守護の息繼母のくみにて宗長につきて罷下牢人とも被管ともなくて當國より甲州牟楯の合力の人數にて討死

按小守護代は守護代の代官なれは又代共又代官ともいへりたとへは所司代に小所司代ありてこれを又所司代ともよひしたくひなり其職掌は守護代に准へてしるへしされは其人の品秩も亦おしはかるへし此職いつの頃まて存せしにや詳に知かたけれと思ふに足利とのゝするまては殘れる國もありしなるへし

○守護使

石見國文書云可早停止守護所使入部石見國大家庄事右任將軍家度々御成敗之旨可停止守護所使入部也若有子細事出來之時者言上事由可蒙上裁之狀依仰下知如件承久三年十月日陸奥守平判

河內國金剛寺文書云當國金剛寺住僧申守護使亂入候事訴狀副具書遣之事實者尤以不便任前々御下知之狀不可有自由亂入儀之狀如件寬喜二年七月十九日河內國守護代駿河守判掃部助判

正安元年六波羅下知狀云如嘉祿三年八月廿八日六波羅下知者威神院日御供料丹波國波々伯部保守護使亂入事社解遣之如狀者前々守護代之時不申入之處當守護代始令亂入保內令煩土民之間長日御供及闕如云々事實者不便任先例可停止新儀若又有殊子細者可參決云々

島津文書云可令早停止爲伊賀國守護使亂入當國長田庄事右當庄前々守護之時不入部使者之由地頭所申也大番役幷謀叛殺害沙汰之外不可入部彼使之狀依仰下知如件貞應二年八月六日前陸奥守平判

新式目云弘安七五廿七評博弈事爲守護人御使沙汰可加禁遏有違犯之輩者於御家人者可被召所領也非分家人凡下輩之事同前○按已上五條は鎌倉殿の時なり

南禪舊記云太政官符南禪寺應停止國司守護使入部並官使檢非違院官諸司及神人甲乙人等亂入造諸社已下大小國役關東鎭西早打役當寺領事右得當寺住持沙門疎石去二月日奏狀偁當寺者龜山法皇革皇居成佛閣勵叡志與祖宗仍被降天澤廣大之宸翰永令備寺領安全之龜鑑云々望精殊蒙天恩當寺領悉任勅願之叡志爲寺家一圓之地永止國衙之綺幷國司守護使等入部應停止造諸社以下官使檢非違院官諸司國使等之亂入大小臨時

之國役關東鎭西上下早打役吉備津宮役白山金劔宮以下諸寺諸社神人甲乙人等亂入狼藉之旨被成下官符備寺領安全之龜鏡者從二位行權中納言藤原朝臣實世宣奉勅依請者建武二年四月廿一日（○按廿一條は建武一統の時公家の成敗なり）

新編式目追加云一諸國守護人已下使節緩怠事（康永三七四御沙汰）或沙汰付下知之旨被仰下或可催上論人之由觸遣之處遲行遲引之條甚以不可然向後於難澁之使者者須令改公所帶次一山賊海賊事尋究出入之在所若領主有同心之儀者令改替地頭可被入守護使歟

又云號一揆衆致濫妨事（貞和二十二三御沙汰）近年或押領他人之所領對專使妨道行或爲散私宿意率黨類及合戰云々造意之企難遁重科所詮任守護幷使者之注進須處罪科但隨事體可有輕重焉

若狹國守護職次第云一色修理大夫入道信傳貞治五年八月より給之兩使伊藤入道遠山入道下向代官小笠原源藏人大夫長房（後號三河守）爰應安二年正月十五日於安賀庄金輪院楯つくの間守護代押寄及合戰の處に手負出來打負て在所を燒拂はれ得替し了同三年十二月に山東山西郷に守護代を入彼所を被押之間同晦夜守護使壹岐太郎を夜討にし畢此由を聞同四年正月二日守護代西津を立て山東山西に押寄菅濱に於て合戰有之

後愚昧記云永和三年十二月十六日自畑飛脚到來守護使下向之由有其注進之使男所住色井莊（但州）也而守護使爲檢注令下向者自但州可越畑之旨兼仰含之故也

花營三代記云康曆元年八月廿三日門與奉行日吉祇園北野神輿造營用脚事所詮以諸國之段錢可造畢三社之神輿云々此上仰使節召出國々太田文段別參拾文嚴密檢納之若令對捍者相處罪科云云交名云在所可注申之次先度難澁所々事守護使相共遂入部令譴責可究濟之條同前

南禪舊記云鹿苑院殿公文御判南禪寺領諸國所々（目錄有之）諸公事臨時課役幷段錢人夫以下國役事被免許畢仍停止守護使入部之狀如件應永十年閏十月廿八日

東寺文書云普廣院殿御判東寺領丹波國大山庄播磨國矢野庄例名方若狹國太良庄段錢以下課役事悉所免除也早可爲守護使不入地之狀如件永享六年三月廿六日左大臣源朝臣御判（○按已上七條は京都將軍家の時なり）

加茂社文書云加茂社領境內幷六鄕所々散在等事從先規三社之內爲守護使不入度々御下知被帶御朱印殊秀吉御折紙被遣上は山林竹木人足非分課役以下如先々令停止之狀如件天正十一十二月廿三日加茂惣中玄以在判

鹿苑寺文書云當寺領山城國北山之內三百四拾石餘西院之內九石餘合三百五拾石之事幷境內守護使不入諸役免除任慶長十五年四月廿日同十九年六月六日兩先判之旨永不可有相違之狀如件寬永十三年十一月九日鹿苑寺御朱印

按守護使は守護職の使節たるものをよへる唱へなりもしその國に田畠を檢地すへきこと又は年首の不納なとあるおりには家人の內事にたへたる者をつかはして檢注究濟せしむ又非常の事いてきたれる時にもこれをつかはして沙汰せしめ折にふれては檢斷なとのことにもあつからしむるものなりもちろん臨時の所役にして平常まうけおかるゝつかさにはあらすもとより守護のわたくしにさたむる所司にておほやけにかゝはれるものにあらすこの故に別に名稱をもまうけすしてひとへに守護使とよへるなるへしさるへき神社佛寺の領地また堂上地下の庄園にても由來ある所領にはこのつかひの入部してけんちゆうすることを禁せらるこれを守護使不入地また守護不入地ともいへり慶長よりこなたには守護の名目給りたれとも古例によりて國主領主の綺をゆるされさる寺社領をは守護不入と稱すること猶ほ古に異ならすとそ

192
55

著作權所有

明治三十六年五月廿五日印刷
明治三十六年六月廿八日發行

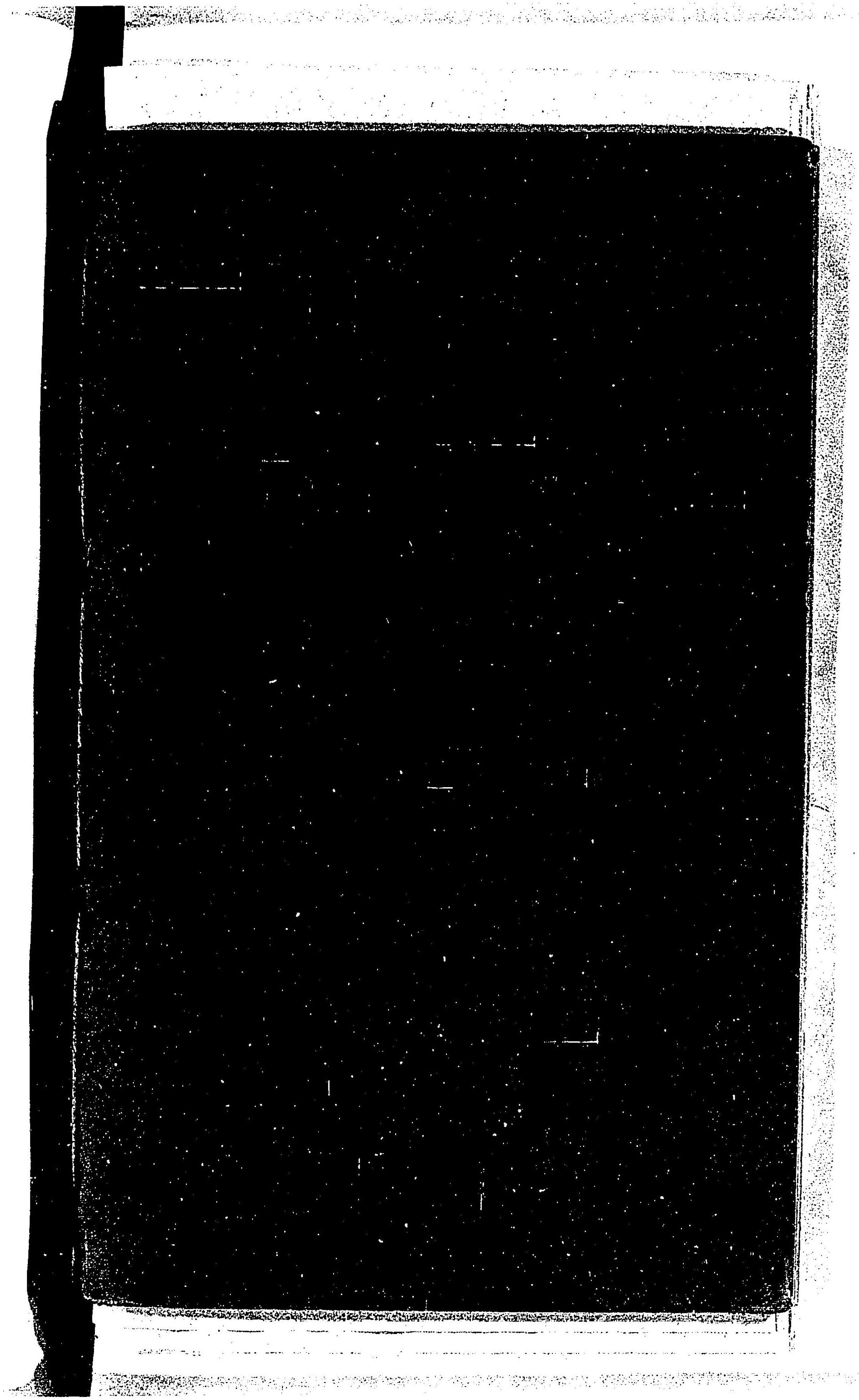
（故實叢書第三輯第三回）

發行兼印刷者　東京市京橋區南傳馬町壹丁目十二番地　吉川半七

印刷所　東京市京橋區新榮町五丁目三番地　吉川印刷工場

發行所　東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地　吉川弘文館

192
55



彙刻書目[illegible] 下